74
66

022425-000-1

74-66

河及湖沢

志賀　重昂／著

M34

ADB-0072

志賀重昂著

山水叢書

河及湖澤

文武堂藏版

發刊の因由

人、地上に生滅し、地上に始終す、地と人とは造次顚沛だに別かるべからざるもの。地ありて人あり、人ありて事あり、地と人と事とは三にして實は一より發す。上下五千載、水陸三千四百五十萬方里、人文の消長、王覇の興廢、偏へに太塊の上に活動すとせば、「地と人との交涉」を考究するは、予輩人類たる者の特に力むべき所。唯だ歐米の地理學家と號ふ者、其見大抵は此所に出でず、單に地を地として考究するのみ、地と人との干預を極論する者殊に少なきを憾となす。玆に自から惴らざるも、『山水叢書』なるものを發刊し、取次に「地と人との交涉」を考究せんとす、而かも事未だ桑創に屬し、予輩が立言の足らざる所正に多きを知る、乃ち世上博雅の君子が叱正を切に待つ。

明治二十九年十二月三十一日

著者識

河及湖澤目次

(一) 緒言……一丁
(二) 河流の大勢……五丁
　(一) 河源……五丁
　　(一)河源としての雨水……六丁
　　(二)河源としての雪水及び氷河……七丁
　　(三)河源としての湧泉……七丁
　　(四)河源としての湖……八丁
　(二) 上流……一〇丁
　(三) 中流……一一丁
　(四) 下流……一二丁
　(五) 河口……一三丁
(三) 河の方向……一七丁
(四) 河の長短大小……一九丁
　(一) 河の長短……一九丁
　(二) 河の大小……一九丁
(五) 河と人生……二四丁
　(一) 河の所在は坦平なり……二五丁
　(二) 河の所在は肥沃なり……二八丁
　(三) 河の所在は交通に便なり……三五丁
　(四) 河は航運に利す……三八丁
　　運河……四一丁
　(五) 河は灌漑に資す……四五丁
　(六) 河は水力利用に供す……四九丁
　(七) 河は諸般の生業を授く……五二丁
　(八) 河は其他雜多の便宜あり……五三丁
(六) 日本史……五四丁
(七) 朝鮮史……五八丁
(八) 支那史……六三丁
(九) 支那の三大河の文學……七五丁
　(一) 黃河……七五丁
　(二) 楊子江……七七丁
　(三) 岷江……八四丁
(一〇) 西洋史……八七丁
　　河湖地名考……九三丁
(一一) 米國史……一〇一丁

(一二)濠洲史……一〇六丁
(一三)河と破壊……一一四丁
(一四)湖及澤……一二〇丁
(一五)湖と人生……一二四丁
(一六)風景……一三一丁
(一七)日本の地質と衆議院議員撰擧區……一三九丁
(一八)印旛沼……一四三丁
(一九)景敎及摩尼敎……一四九丁
(二〇)パラマッタ河及ウエントウォルス溪……一五八丁
(二一)閩江……一六七丁
(二二)吁江……一九九丁
(二三)鄱陽湖及九江……二一〇丁
(二四)莫愁湖……二一七丁

緒言　淀川　大坂の生命と淀川

山水叢書

河及湖澤

志賀重昂著

(一)緒言

夕陽淡路島の一角に殘りて、東の方生駒の山色次第に紫ならんとし、身は一幅應擧の畫中にある處、俯して淀の江面を臨めば、汪々として亘津を作り、商舶賈船水を爭ひて錨を下し、十萬の人家兩岸を擁して立ち、大坂の市、百貨を呑吐し、億萬金を開闔し、實に日本國商業の中心と稱へらる、而かも一の淀川にしてあるなけんか、其の形勝たる縱令南日本の關門と號ふるも、如何ぞ商舶賈船の爭ひ來ること此の如きあらんや、如何ぞ百貨の呑吐、億萬金の開闔すること此の如きあらんや、空しく蘆荻千年、よしもあしも狐狸として、漁莊蟹舍の其間に參差するに過ぎざらん、唯だ一の淀川あり、

北上川　陸前の小牛田停車場より陸中の沼宮内停車場に到る間

是を以て巨津を作り商舶貿船の出入に供へ、是を以て道頓堀、長堀、東横堀、西横堀等の運河を鑿ち漕舟の用に利し、是を以て攝津の東南部十餘方里の沖積平原を構造し、十萬家の市街を其上に立基せしめ、沖積平原は曳きて東西に延綿し、攝津、河內、山城の三州九十七萬(大坂市四十九萬人、攝津三十一萬人、河內十萬人、山城七萬人)の生靈を其上に衣食せしめ、是を以て無慮十五萬町歩なる田畝の灌漑に資せしむ、仁德天皇の難波に大宮居を定めさせ民の竈の賑はひつるを見そなはし玉ひけるも此川あるが爲めのみ、西行法師が身を雲水に托しゝ頃、江口の邊に官道のありたるも此川あるが爲めのみ、豊太閤の群雄を驅使して大城を築きたるも此川あるが爲めのみ、大坂の生命は正しく淀の一水に歸す、觀じ來れば淀川の功德や千萬無量。若し夫れ滊車仙臺市を去りて北に入らんか、陸前の中部より陸中、陸奥の境界に到る一百十哩の間、髮の如き鐵道幹線を敷き得たるは實に北上川あるが爲めのみ、獨り東北鐵道線を敷き得たるのみならんや、此川や能く十八萬町歩の沃地を沖積し、以て莫大の穀類(米、麥、豆)麻、綱、材木、桐下駄臺を產出せしむるのみならず、亦た東北日本の東半なる物產の天然的出口となり、兼ねて東京地方より木綿、古着、舶來和製小間物、砂糖、藥品、石油、廿簞、蜜柑の類歲々三千五百駄を運入する溝渠となる、豈に這般の有形的功德に止まらんや川は古來關西、江戶の文化が東北日本に入るの大衢路なりき、北上川の有形上に無形上に東北日本を利濟せしもの少しとせんや。若し夫れ石狩川に至りては、蝦夷の榛莽の啓かれたるも此川あるが爲めのみ、札幌の開府も此川あるが爲めのみ、內陸の中心たる上川に離宮地を相せられたるも此川あるが爲めのみ、百三十哩の鐵道線を敷き得たるも此川あるが爲めのみ、東西六十里、田疇墟落秩々として畫くが如く、新開地の活氣鬱勃たるものあるも此川あるが爲めのみ、鮭、鱒の滋則として網に入り巨萬金の利潤を漁民に附與するも此川あるが爲めのみ、所謂北海道拓殖の門戶は畢竟石狩川の爲めに開かれたるもの。淀川や、北上川や、石狩川や、日本國の人文、經濟に干預する此の如く大且つ深し。日本に於ける王覇の興亡、世運の推移、齊しく河畔に決斷すとせば、彼の黃河及び揚子江

東北日本東半に於る物產の天然的出口

關西江戶の文化東北日本に入るの大衢路

石狩川　石狩川と北海道の拓殖

炭礦鐵道二百七哩の內

黃河　揚子江

ナイル河
ライン河
ミシッピー河

畔に「堯舜旦。文武末。葬操丑淨。古今來。許多脚色」の演出されたるも、「埃及は●ナ●イ●ル●河の恩賚なり」と喚ばれたるも、「●ラ●イ●ン●河●の歷史なり」と稱へられたるも、「●ミ●シ●ッ●ピ●ー●河は米國致富の大原素なり」と呼號されたるも、眞に然りと謂ふべし。深い哉川の功や、大なる哉河の德や、曰く、土地を滋潤し、魚鰕を生育し、舟楫を通利し、人民を補益す（赤松宗旦）と、曰く、五行始焉。萬物之所由生。元氣之賸液也（苞）と、曰く、大河は猶ほ上帝の無量壽の如くに動くなり（ヘブライ言）と、宜べなり言、我れ請ふ今より君と共に輕舟に楫し、煙簑雨笠、河を上下して之れを探討せんか。

豐王一劍定中州。大阪名城控上游。久使益揚稱沃土。頻聞河渭轉漕舟。歌聲春合煙花市。客夢風寒蘆荻洲。自是千年藏覇氣。龍盤虎踞亦金甌。大阪

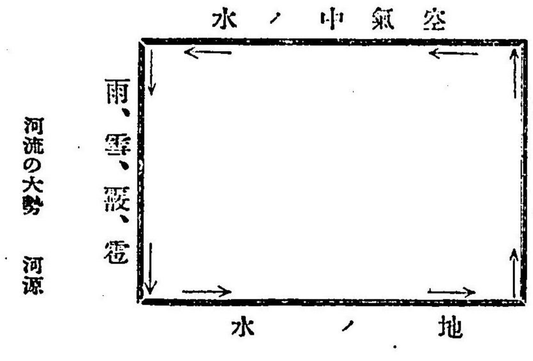
古賀穀堂

（二）河流の大勢

河流の大勢を探討せんか、（一）河源、（二）上流、（三）中流、（四）下流、（五）河口。

（一）河源

大は太瀛の水より、小は硯池滴々の墨汁に至るまで、凡そ渾圓球上にある水分とては、綿々として始終蒸發せざるはなく、斯くて此の空中に英浮游せる水蒸氣は、一たび温度を失ふや、忽ち凝縮し、雨となり、雪となり、霰となり、雹となりて地に下り來り、遂に河流の泉源となる。是に於てか知る、地の水は一たび天上の水となり、天上の水は復た地の水となり、地の水は復た天上の水となり、此の如く永劫萬代の間循環又た循環し、以て太地の經濟を整齊することを。



河流の大勢　河源

河源を大別して四となす、(一)雨水、(二)雪水、及び氷河、(三)湧泉、(四)湖。

河源としての雨水

湊川

ワデヰー

(一)　河源としての雨水

雨水の直ちに河源をなすものあり、平時に當りては、河身盡く露はれ、白沙燦々の間、鏡の如き水溜りの點々するのみ、而かも一たび雨に會ふや、流水奔然として下り、雷轟虎鬪、一時の壯觀を盡すもの即ち是れ。攝津の湊川は此の好模本にして人をして坐ろに楠公が平時は鈐韜に潜思嘿修するも、一たび風雲起り旗皷動くや、輙ち喑啞叱咤、一以て百に當るの健戰を轉想せしむるものなきにあらず。亞拉比亞(アラビヤ)の所謂「ワデヰー」亦た是れにして、知名なるシルハン、ダワッシル、アフタン、ルムマの諸河は皆此種に屬し、特にルムマの如き、蜿蜒三百二十里、平時は一帶の乾沙に過ぎず。其他亞細亞の內陸、濠太利の內陸(此種の湖もあり)に至りては、此種の河殊に少しとせず。

酒家粉壁映晴波。官道乾沙度淤河。風景依然人欲老。楠公墓下十經過。攝州路上

賴山陽

河源としての雪水及び氷河

雪水

越中立山以北の小河流

楊子江

氷河の融解

恒河

シル・ダリヤ

ライン河

ローン河

河源としての湧泉

伏流

利根川

筑後川

吉野川

(二)　河源としての雪水及び氷河

春風忽ち度りて魚氷に上り、四山の層雪一時に融くるや、雪水は幾條の銀絲となりて山側に沿ひ、頻りに平地に下り去り、地の低所凹所を搜めて遂に河流と化成し來る、越中立山以北に此種の小河流間、發見せらる。若し夫れ外國に至りては、此種の河流最も多く、夫の唐人の岷山に發すと記載せる楊子江の如き、近く岷山に發せずして、實は遠く崑崙南側の雪汁より由來するもの。其の氷河の融解より由來するものゝ如きは、夫の天竺人の神視せる恒河(ガンヂス)は大雪山(ヒマラヤ)中よりし、北史の「藥殺」と稱ふる中央亞細亞のシル・ダリヤは天山山中よりし、歐羅巴中原の二巨水ライン、ローンはアルプス山中よりし、悉く口に數へて指に屈するに暇あらず。

(三)　河源としての湧泉

雨水、雪水の地中に浸入するや、岩石の罅隙に潜伏し、集合して流動し、「伏流」を作り、漸く匯溜して再び地表に湧出し、遂に河源を化成するもの往往あり。坂東太郎の利根川、筑紫次郎の筑後川、四國三郎の吉野川の如き皆此種

北上川
信濃川
黄河
ダニューブ河
河源としての湖
淀川
天龍川

に屬し、其他北上川に、信濃川に、日本の大川と稱ふるもの太概は是れなり。支那にありては、元の都實が自から探檢して「有泉百餘泓。沮洳散渙。弗可逼視。方可七八十里。履高山下瞰。粲若列星。名火敦腦兒。火敦譯言星宿也」と記載し西洋の地理家亦た此事を信認せる黄河の如き、歐羅巴洲にては、獨逸バーデン山中の三湧泉より發源せるドノー河(多惱河)の如き亦た是れ。想へば此の東にある百泓の泉、西にある三個の湧泉、一は三皇五帝より周、秦、漢、隋、唐、五代、宋に至るまで四千年間の治亂成敗を噴き出し、一はクルト民族、テゥトニック民族、スラヴォニック民族、蒙古人種の大遷徙より刻下バルカン半島の東方問題に至るまで四十三世紀間の隆替消長を噴き出したる源水ならんとは、如何に天馬空に行くの想像力を逞ふするも、猶ほ且つ描く能はざる所ならんか。木の下の影、數掬の石清水、實は古今を包括し群豪を擒縱するの大活素。

(四)　河源としての湖

湖の河源となるもの、淀川の琵琶湖を裂きて來り、天龍川の諏訪湖を絞り

阿賀川
釧路川
阿寒川

て出で、阿賀川(岩代、越後)の猪苗代湖より、釧路川(北海道)の釧路湖より、其の支流阿寒川(アカン)の阿寒湖より排去さるゝが如き即ち是れ。獨り日本に止らんや、寰宇の蒼々莽々たる大川長江も、遠く其の本源に溯れば、太概は湖に發するもの。試みに指點せんか、

河	所在	發源の湖	湖の所在
アンガラ(エニサイ河系の主流)	西比利亞	バイカル	西比利亞の南部
イルテヰッシュ(チブ河系の主流)	西比利亞	アルタイ山中の一湖	アルタイ山中コブド高原の西南側
インデュス	印度	カンゲリ山中の一湖	西藏高原の西南側
アム・ダリヤ(パンジュ、アクス)	中央亞細亞	ヴヰクトリヤ、バルカル・ヤシン	大パミルの山中、小パミルの山中
ポー	伊太利	アルプス山中の二小湖	ヴヰソ山の北側
ナイル(白ナイル、ヴヰクトリヤ・ナイル)	亞弗利加	アルバート・ニアッサ、ヴヰクトリヤ・ニアッサ	赤道線の少北
ミシッピー	北米合衆國	イタスカ	合衆國の北部ミネソタ州
アマゾン	南亞米利加	ラウリコチャ	秘魯國内アンデス山の西側

(二) 上流

河水、源を出づ、其の初めは晶明清洌、幽々として荊棘雜草の擁蔽せる間を潜り、正に是れ

ひゝきくる松のあらしに埋もれて　蘆庵

たえまかちなるたにの水浅き

の景致あり。既にして沙動き礫鳴り、湲潺として自然の琴を彈じ、巖石に隨ひて屈折する際、這般の小流は左よりも到り右よりも來り、十澗百溪湊注して水漸く嵩り、且つや上流地方は水蒸氣凝縮し、降雨も亦た頻々たるを以て、水愈〻多く勢益〻猛く、地面の傾斜急劇なると共に、湍々を飛びて下り、大巖を挑み聳ち、亂石と衝りて馳逐し、却て沙を、率ひ礫を驅り巖石を提げて武器となし、恣に所在の土壤を浸蝕して自己の所領を大に擴げ且つ深く鑿ち、雷ねて兩岸巖石の罅隙に滲入し、更に内部より攻擊して、遂に河道を作る、是れを上流の大勢となす、岩に堅緻なるあり、脆軟なるあり、脆軟なるものは流水の之れを浸蝕すること容易に、隨て河道廣大なるも、堅緻なる

武藏國多摩川の上流

葛　橋　丹波山村　氷川村　鴨澤村　吉野谷

上流の水は巨大なる鋸

上流の職責

破壊的

上流の酷愛すべき所

中流

中流の特色

段丘

ものに會へば自から狹窄なり、斯くて上流の水は、畢竟巨大なる鋸の用をなし、其の職責は河道を鑿ち且つ擴ぐるにあるもの、唯だ勢力迅速なるを以て、沙泥を沈澱堆積するが如きは些も顧る所にあらず、此は是れ分別盛りなる中流老成なる下流の爲す所に任す。上流や宛も快活の年少子、謂ふ勿れ、上流の能事は破壞のみと、能く破壞の行業を成就せずんば、如何ぞ中流下流に建設の行あらんや、況んや此所に飛瀑あり、急湍あり、壑谷ありて、水の氣韻眞個に生動するものあるおや、水の酷愛すべきは上流にあり。

(三) 中流

河漸く亂峯の間を去り、會〻丘陵地に出づるや、所在の傾斜漸く緩漫となり、幅も亦た太まるを以て、流勢自から緩漫となり、浸蝕も猛烈ならず、露開けて炊煙間々起り、時に鷄犬の聲を聞き、輕舟上下して、次第に人間に近くを知る。古人「山舒水緩有土田」の句あり、是れ中流所在を描く好個の措辭。蓋し中流の特色は、汎濫毎に沙泥を兩岸に沈澱堆積し、屢々階段の如きものを疊み、「段丘」を構成するにあり。段丘は本州の河流に見ること少きも、北海道

中流の職責　破壊的又建設的

高地と低地との中庸物

の河には多く之れあるを認む。要するに**中流**の職責は河道を擴ぐると同時に、土壌を浸蝕し、且つ堆積し、破壊と建設と兩々相衡平するにあるもの、即ち河の壯年時代なり、而して段丘地は實に高地と低地との中庸物。

下流

下流の職責　建設的

下流に於る自然の景象

沙洲　渚汀

下流の酷愛すべき所

(四) 下流

河、既に丘陵地を去るや、土地の傾斜愈〻緩漫となり、幅益〻太まり、流勢も亦た緩漫を極め、遂に土壌を浸蝕せず、唯だ上流、中流より傳送せる沙泥を沈澱堆積するに過ぎず、既に然り、下流の職責は專ら土壌を沈澱堆積し、以て新陸地を經營するにあり、要は全然建設的なるもの。是を以てか自然の景象も亦た悠々に、江面溟渤、煙波掩映し、岸遠く山更に遠く、所在は田畝頻りに開け、且つ河道は下流に趨くに隨ひ常に大なる弧を畫きて曲折すれば、若し夫れ春色蔣駘の候に到れば、麥苗菜花の間に風帆を認め、翠色黄色白色の錯綜するを見、更に沈澱堆積の結果として沙洲渚汀隨所に現はれ、若し夫れ霜氣秋に横はるの節來れば、白蘋紅蓼狼藉として、鮭魚澱則と網に上り、荻花雪の如きの邊、時に鴻雁の下るを看る。下流の酷愛すべきは平和の所にあり、優長の所にあり、縹緲として畫の如き所にあり。

河口

江港

河の自動的及び他動的作用

角洲

(五) 河口

河水滾々として卑きに就き、遂に流れ了るや、(一)洋海、(二)湖澤、(三)他の河に注ぎ入るを例とす(沙中に注ぎ入りて消失するものも時にあれど)。其の注ぎ入る所を「河口」と稱ふ。河水の此所に到るや、流勢は頓に減殺するを以て、上流、中流、下流より傳送し來れる沙泥を頻りに沈澱堆積し、漸く渚洲を構成し、汎濫毎に愈〻沈澱堆積して益〻擴大するや、河水は爲めに這般の渚洲を裂き破り、幾多の岐流を作りて洋海若くは湖澤に朝宗す、故に渚洲の形は宛として白扇を開きたるが如く▽を現はす、是れ「三角洲」の起生する所因、然れども注口(洋、海に注ぐものゝ)に於ける海潮の干滿劇甚に、河水にして之れを抵排する丈ケの勢力なからんか、海潮と海浪とは、河水の傳送し來れる沙泥を湊へ去り、注口の土壌を削り取り、河底を深くし、些も三角洲を造らず、却て幅廣く底深き「江港」を鑿ち來る。知り得たり、河口は自動的には三角洲を造くり、他動的には江港を鑿つことを。

中流なきもの

日本の河たる、上流と下流ありて中流なく、將た上流のみにして中流下流なきもの少しとせず、是れ地幅狹窄にして巍峩たる山系は國の中央に連亙し、河底の傾斜特に急劇なるに因るもの。飛驒の益田川、初出水無嶺下、便分爲兩派、至此（船戸）再相會、非復向者涓流。自恃其勢力、互不相下、奮躍百閱乃合、擁沙走石、聲聞數里、飛驒美濃以此爲界。對岸美濃金山、亦村市閧然、二川既合、同爲飛驒川、入美濃之域、由井尻、過柿野、皆武儀山中也、百泉亂注、水勢逾壯、然岸石對峙束之、兩岸之間稍狹、細語相聞、水高數丈、溪旁人家、仰聽水聲、而往往又大石側出、每阨其流、水更躍丈餘、倒射石角、零珠碎玉、的礫漉空、宛如飛瀑、終日不止、未幾、亂石如林、盤錯水中、巨流爲之如滅如沒、但見其噴雪濺珠、沸騰乎石經中耳、已而崖谷忽開、汪洋無際、魚鳥相忘乎其中、平波散漫而逝、是日使搖斗酒而隨焉、行採菰蒲、聚松柈、以篝火、濕紙包煨、味極芳烈、又水產溪鰕、土人設竹筌、以捕之、就買數枚、其大尺餘、山水奇絕、既不可狀、緣路如綫、逐流而轉、每路

中流、下流なきもの　朝來川　熊野川　川代川

纔轉、景致便別、正如橫幅畫卷、循序展而觀之、愈出愈新、每使人躍然拭目。

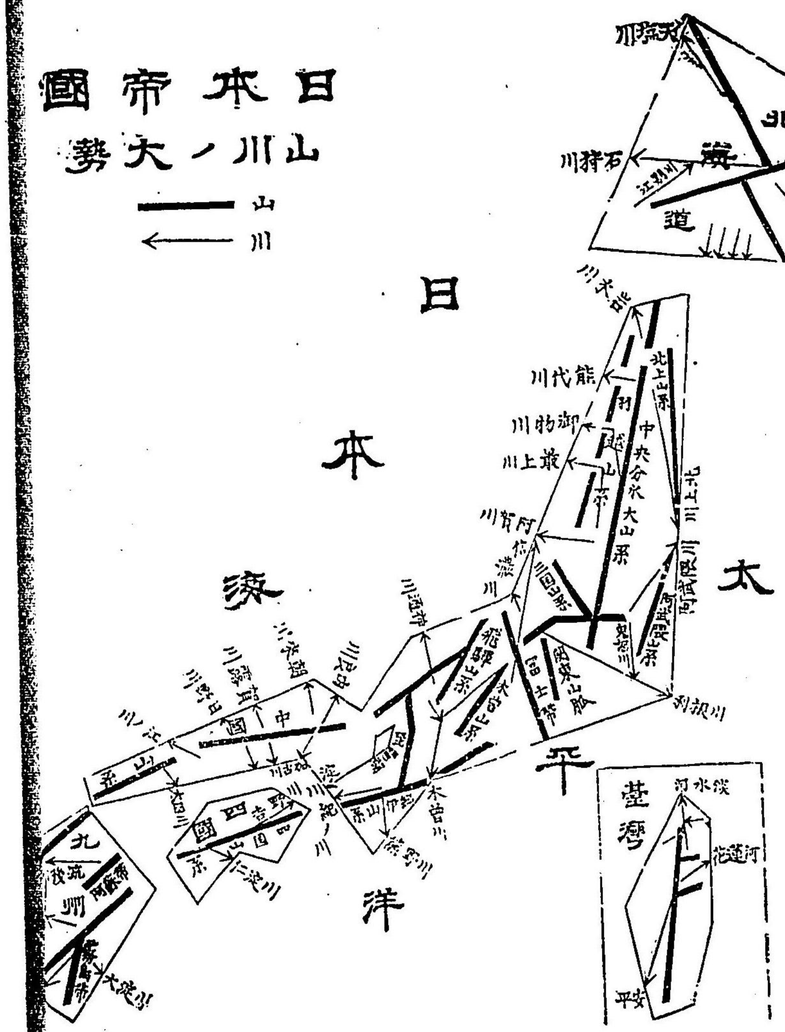
曾我耐軒

山水之觀、至此而極矣。

の如き、正に上流、下流ありて中流なきもの、而して山陰の名川たる朝來川（但馬）、紀南半島の巨水たる熊野川、九州第一の長江たる川代川（日向、大隅、薩摩）の如き、切言せば上流のみにして中流、下流なきもの。

夏川の音に宿かす木曾路かな　重五
夕立や瀨を研き流す刀根の音　輕舟
もちゝかみ高根の雪やとけぬらん
　てる日に勝る富士の川水　茂枝
たゝ一と木たてる洲崎の松かけに
　幾度あまの舟つなくらむ　游清

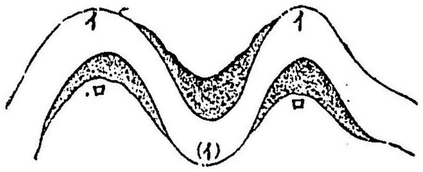
夾街綠樹映樓臺、惟見櫻花不見梅。獨逸山中
涓滴水、化爲無數大河來。　バタアリヤ巴威里　中井櫻洲

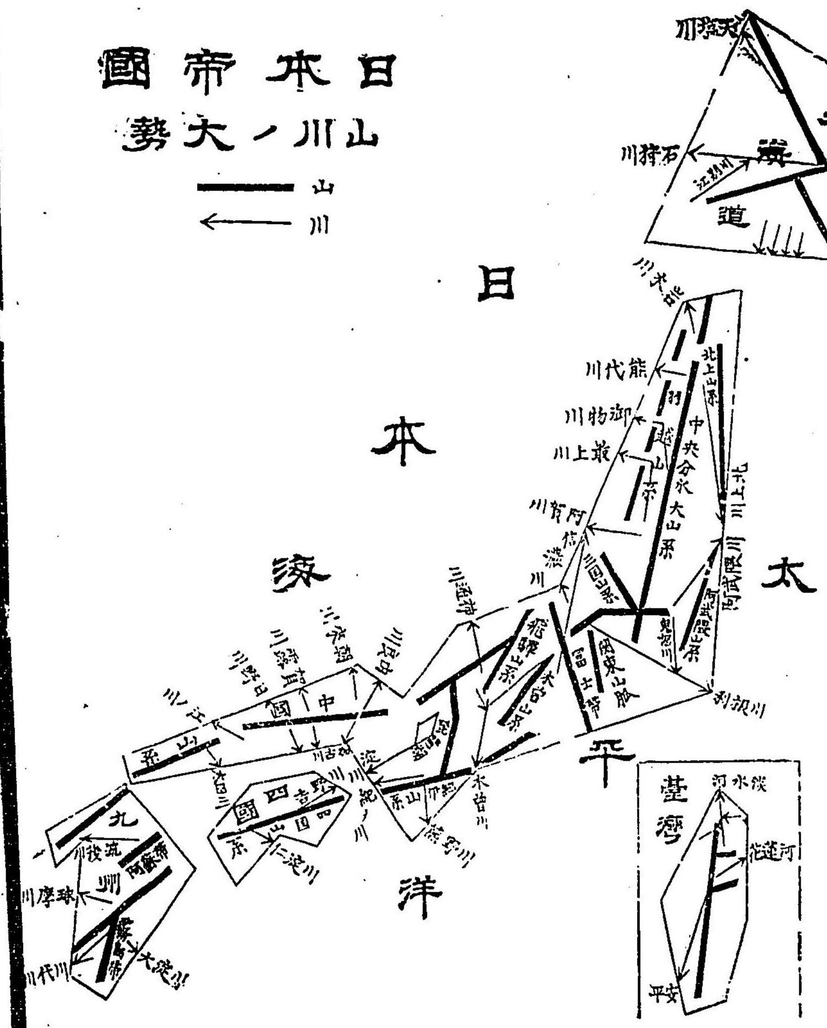


河の方向を裁定する太要

(三) 河の方向

河源を出づるや、即ち卑キに就き、地皮の破綻割裂せる部分に入り、障碍物に會へば避け去り、先づ岩の軟弱なるものゝみを目懸けて浸蝕す。是を以て河道自から曲折するや、水は弧の凹所イ(イ)イに沿ひて專ら駛走し、凸所ロロは流勢爲めに定靜となり、遂に沙泥を此所に沈澱堆積す。愈々沈澱堆積するや、凸所は益々凸となるを以て、凹は愈々深入して益々凹となり去る。故に兩對の凹所時に連絡して新に直路を造くることなきにあらず、此の如くなれば、舊河道は或は湖、澤となり、或は乾涸するに至るを常とす。獨り軟弱なる岩のみならず、水分多量にして河底の傾斜急激なりせば、輙ち堅緻なる岩をも浸蝕すと雖も、要するに地勢の卑キに就くと、岩層の走向に隨ふと、軟弱なる岩を搜めて浸蝕すと、此の三の者、實に河の方向を裁定する太要となす。阿武隈

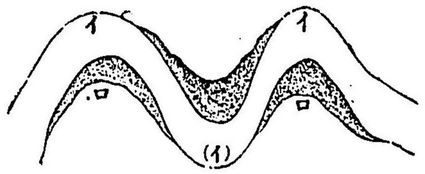




河の方向を裁定する太要

(三) 河の方向

河源を出づるや、即ち卑キに就き、地皮の破綻割裂せる部分に入り、障碍物に會へば避け去り、先づ岩の軟弱なるものゝみを目懸けて浸蝕す。是を以て河道自から曲折するや、水は弧の凹所イ(イ)イに沿ひて專ら駛走し、凸所ロロは流勢爲めに定靜となり、遂に沙泥を此所に沈澱堆積す。愈〻沈澱堆積するや、凸所は益〻凸となるを以て、凹は愈〻深入して益〻凹となり去る。故に兩對の凹所時に連絡して新に直路を造くることなきにあらず、此の如くなれば、舊河道は或は湖、澤となり、或は乾涸するに至るを常とす。獨り軟弱なる岩のみならず、水分多量にして河底の傾斜急激なりせば、輙ち堅緻なる岩をも浸蝕すと雖も、要するに地勢の卑キに就くと、岩層の走向に隨ふと、軟弱なる岩を搜めて浸蝕すと、此の三の者、實に河の方向を裁定する太要となす。阿武隈



阿武隈川と北上川

四首、自から北方衆健の氣象あり

川と北上川とは一は南よりして北駛し、一は北よりして南走し、兩々の注口相背對して同一の仙臺灣に朝宗す、是れ本州中央の分水大山系と太平洋岸の山系(阿武隈山系及び北上山系)との間に南北に駛走せる溪谷(横谷)あり、南にあるもの即ち阿武隈山系に沿ふものは北に向ひて低下し、遂に太平洋岸山系の割斷せる仙臺灣に到りて盡き、北にあるもの即ち北上山系に沿ふものは南に向ひて低下し、是れ亦た仙臺灣に盡く、而して阿武隈川は南の溪谷を駛走し、北上川は北の溪谷を流下するを以てのみ、河の方向、豈に偶爾にして然らんや。

夕立の阿武隈川と押し出しぬ　阿武隈川　賓馬
稻妻の紅粉なかしけり最上川　最上川　柳居
白雨や雲はころひてころも川　衣川　津富
一川刀勝水透逸。繞岸垂楊十萬枝。誰識氷溪接
疆域。春風吹度北蝦夷。　勝川　佐藤牧山

河の長短

長河

短川

日本に長河なき理由

河の大小

河の大小の準據如何

(四) 河の長短、大小

(一) 河の長短

山影遙かにして、四望浩々、地勢廣漠にして坦平なり、此間にある河や長くして、蜿蜒千百里、眞個に白雲の中より來るの概あり、所謂「長河」「長川」「長江」是れ。山近くして、所在は起伏し、地勢も亦た狹窄なるや、此際に駛走する河たる、短くして、流勢激越雄快、所謂「短川」是れ。特に日本の如きは、幅狹き島國なるが上、巍峩たる山系は海岸線に並行し國の中央に連亘するを以て、若し夫れ鋸を把り日本國土を切割せば、其の横截面は三角形を作さん、而して河の泉源は大概三角形の頂邊にあり、以て急劇なる斜面を兩方(一は日本海に、一は太平洋に)に直瀉し下れば、國に長河なきは固より然る所。

(二) 河の大小

世に「大河」「小川」と謂ふ、抑も何に準據して之れを謂ふか。河道の長きものは我

河の長短は河の大小を準據せず　亞拉比亞の河道

馬來半島の河道

灌漑の大小は河の大小を準據せず

四比利亞の諸河系

印度支那半島の河

支流の多少は河の大小を準據せず　黄河

れ其の「長河」たり「長川」たり將た「長江」たるを聞く、短きものは、我れ其の「短川」たるを聞く、河の長短、以て河の大小を準據するに足るか、亞拉比亞の河道は長きもの多し、而かも一歲の强半は水あるなし、以て「大河」と稱ふべきか、馬來半島の河道は擧げて短し、而かも幅廣くして內には水常に滔々汨々す、以て「小川」と目すべからず、此の如くなれば、河の長短、未だ以て「河の大小を準據するに足らざるを知る。一河系の幹流長く支流の多く且つ長きものは、我れ其の「灌漑」の大なるを聞く、一河系の幹流短く支流の少く且つ短きものは、我れ其の「灌漑」の小なるを聞く、灌漑の大小、以て河の大小を準據するに足るか、西比利亞諸河の灌漑は廣寬無邊、而かも所在は降雨絶些にして水量少く、且つ年內多分は氷封して流動せず、印度支那半島の河は其の灌漑なる西比利亞諸河の十の一に過ぎず、而かも所在降雨頻劇にして水量多く、且つ年內滾々として恣に流動す、此の如くなれば、灌漑の大小未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る。支流の多少以て河の大小を準據するに足るか、黄河は長サ一千五十里、而かも其間の支流僅に指を屈して數ふるに過ぎず、ライン河は長サ三百二十里、而かも支流一萬二千條、イザル河は多牖河三十四條の支流中の第四位に過ぎざるもの、而かも更に支流を受くる無慮千二百九十三條、此の如くなれば、支流の多少、未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る。河の幅廣く底深く水の塡てるものは、我れ水量の寡きを聞く、水量の多きを聞く、幅狹く底淺く水の瘦せたるものは、我れ水量の寡きを聞く、水量の多寡、以て河の大小を準據するに足るか、日本の河の如き、季候風の印度洋、支那海を經て北上するや、降雨頻劇、所謂

ライン河

イザル河

水量一時の多寡は河の大小を準據せず

日本の河

鈴鹿川八十瀬もおなしいはなみの　春滿

音になりゆくさみだれのころ

亞拉比亞の河

の實際あり、而かも一年秋高く冬近きや、水涸れ沙白く、乃ち　蓼路

へるたけは減て澄けり秋の水

河の長短、大小　長短　二一

の風情あり、亞拉比亞の河亦た季節に隨ひ水量の推移殊に劇甚なるを見る、此の如くなれば、水量の多寡を一時瞥見し、未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る、既に然り、河の長短、灌域の大小、支流の多少、水量一時

の多寡、悉く以て河の大小を知るの能はずとせば、世の「大河」と謂ひ「小川」と喚ぶ者、古往今來、抑、何に準據せしぞ。詩家、歌客、文人は可なり、特に怪む、歐米の地學家と號ぶ者、亦た漠乎として「大河」「小川」の稱を踏襲し、其の準據を確立せず、恬然却て自から怪まざることを、是れ度量衡なきと同一般、汲理學寧ろ此の如きものあるか。悟り得たり、河の大小の準據は、其の灌域と其の河口に吐出する水量一個年分との比例にあり、比例の大なるは「大河」にして、小なるは「小川」なることを試みに甲は灌域百方里にして一個年吐出の水量百萬石、乙は二百方里にして四百萬石、丙は三十方里にして九十萬石とせんか、各比例たる、甲は一萬、乙は二萬、丙は三萬、故に丙は「大河」、甲は「小川」、乙は其の中間にあるものとす。語を寄す、「長河」「長川」將た「長江」と「大河」「大川」將た「大江」と混淆するなく、「短川」と「小川」とを同一看するなく、河の長短と大小との間に歷々たる區別を劃せんことを。此の如くすることなく、千歲の汲理學、無標準、無根據、以て長へに滿足せば焉んぞ「河」に關する學問を啓發せしむるに足らんや。

河の大小の準據

大河　小川

長河と大河、短川と小川とを混一すべからず

河の大小の根據や確立す。是に於てか一問ふ、「大河」將た寰宇の何の邊にか多きやと、曰く一般に赤道線に愈近くに隨ひ益、大河の存在するものと定則すべきことを確認す、何となれば赤道線に近くに隨ひ降雨頻劇にして、假令蒸發力の猛烈なるにもせよ、河口に吐出する一個年の水量多く、南北兩極に趨くに隨ひ、降雨絕少にして、假令蒸發力の遲緩なるにもせよ、河口に吐出する一個年の水量少きを以てのみ。同緯度なりとせんか、大河は第一に島、第二に半島、第三に太陸に存在す、是れ亦た一個年雨量の多寡に準據し、太概島には降雨最も頻劇に、次は半島、次は太陸なればなり。東印度群島に第一流の大河あり、印度支那半島に第二流の大河あり、印度に第三流の大河あるは、正に之れを證左す。定則は此の如きも、其間變移なきにあらず、若し夫れ河道に湖瀑布、氷河あらんか、流勢を儲溜し、隨て河口に吐出する水量を多からしめず。亞細亞、歐羅巴の河道には氷河あり、亞弗利加の河道には湖瀑布多く、北亞米利加中部以北の河道には湖澤橫はる、是れ河口に吐出する一個年水量の割合に多大ならざる所因となす。

大河の所在

大河所在の定則

同緯度に於ける大河の所在

大河所在の定則の變移

河の人生に大關係ある理由

(五) 河と人生

淡きこと水に似たりと、逝く者は此河の如しと、然れども河豈に此く無意味なるものならんや、上下五千載、東西九百萬方里、盛麗の人物は河の流域に聚り、雄富の邦國は河の溪谷に興り、通都廣邑は河の濱に建つ、河は地の經緯なり、又た社會の經緯なり、社會の理勢は全く河の流勢と神契默會するもの。史眼千秋、太塊の上に立ち、先づ河に向ひて映し來れ、世の治亂成敗、人種の隆替消長は瞭々火を睹るより炳かならんとす、乃ち溯りて「河と人生」を窮めん哉。何が故に然るか、曰く、

(一) 河の所在は坦平なり。
(二) 河の所在は肥沃なり。
(三) 河の所在は交通に便なり。
(四) 河は航運に利す。
(五) 河は灌漑に資す。
(六) 河は水力利用に供す。
(七) 河は諸般の生業を授く。
(八) 河は其他雜多の便宜あり。

河の所在は坦平なり

河は太塊の掃除人なり

(一) 河の所在は坦平なり

太塊の上、幾多の破壞的勢力あり、雨や霜や氷や、是れ土地を溶解するもの、風や太氣や、是れ土地を洗削するもの、伏流や是れ土地を崩墮するもの、農人の犂鋤や、是れ土地を遊離せしむるもの、草樹や蘚苔や田鼠の類や、是れ土地を穿鑿し潰壞せしむるもの、這般幾多の破壞的勢力は、造次顚沛だに運動を休止せず、爲めに太塊は時々刻々に其の高サを殺がれ、時々刻々に平かならんとす、而して河は這般破壞的勢力の結果として出來せし沙泥を浚へ、且つ雨潦、惡水、汚穢物を抱容して去り、千年萬年、憩はず倦まず、之れを負擔して下り、骨を折りて中流以下に運搬す、要するに、河は太塊の掃除人なり、而かも無賃銀にして荷の重キを怨まず半時間の煙草休みだにせざる掃除人なりと觀ずれば、太塊の上にある予輩人類たる者、如何ぞ河に對して滿腔感謝の眞心を捧げざるべけんや。想ふて此所に到る、我れ頓に水廟に謁し柳蔭に跪きて簫を吹き鼓を鳴らし嘉拜以て河伯に賽するの念を催し來る。然れども河亦た自から其の勢力を恃む者、何すれぞ他の破

河の灌域地を一尺の厚サ浸蝕する年限

壞的勢力のみの恣に太塊を平ぐるを看了せんや、己れ亦た激昂して所在の岩を浸蝕し、土地を平らげ、且つ行業の徒らに破壞的のみならざるを證左せんとし、沙泥を中流以下に沈澱堆積し、以て絶大なる新陸地を經營す、而して這般の新陸地や、固より曠濶にして坦平砥の如きもの。蓋し河の其の灌域地を平均一尺の厚サ浸蝕する期限は（チヤールス・ダヴヰッドスン氏の所説に據り換算せしもの）

ミシッピー	一、五一五年	ドノー（多惱河（ダニユーブ））	二、二三〇年
ニス（蘇格蘭（スコットランド））	二、三九五年	ローン（佛蘭西）	二、四一〇年
ポー（伊太利）	二、四七一年	ガンヂス（印度）	二、七五九年
黄河	三、三五五年	平均	二、四四七年

河の地球上に於ける絶特の大職責

即ち一尺を浸蝕する期限を太概二千五百年とせんか、地球上の陸を敷き延ぶれば平均二千二百四十尺の高サなれば、河は今後五百六十萬年にして太塊を些も凸凹起伏なき茫々の一大平原と渾成せんとす。乃ち知る、河の地球上に於ける絶特の大職責は、實に縱線的に起立する陸をして地平線的に敷衍せしむるものなるを。況んや河の爲めに坦平なる新陸地の經營されたるもの、河口所在のみに於てすら延緣數千里に至り、ガンヂス及

ガンヂス河及ブラマプートラ河の三角洲　ミシッピー河の三角洲　ナイル河の三角洲　黄河の堆積　崇明島

ブラマプートラ河の三角洲は五千方里、ミシッピー河の三角洲は二千四百方里、ナイル河の三角洲は千六百方里ならんとす。黄河の如き、些々三旬にして十一町四方高サ二十間の洲渚を築き、楊子江口の坦平なる崇明島の如き、彼の明の世、方孝孺が慨然として燕王に屈せず義を取り仁を成したる頃には潜みて水底に伏在せしも、今や面積六十五方里、無慮五十餘萬の生靈を其上に滋殖せしめ、崇明縣を建て儼たる縣治をなし、長江の口を控掣する一雄鎭となりぬ。何ぞ必しも外國の大河のみならんや、夫の

贖佳人。佳人覲。太守嗔。妾身任君殺。妾身任君活。妾身既有阿郎在。妾心不可奪。鬢髮在手亂如絲。木蘭舟中斫娥眉。遺恨不知深幾尺。三叉之水終古碧。

東京の三叉所在中洲

てふ三叉所在（東京）の如き、中洲（ナカス）（東京）の如き、皆な墨田川の作したるもの。中洲の枕流館上、淺酌低唱の時、三叉に對して一杯を佳人の芳魂に酹する者、請ふ更に餘瀝を墨水に灑ぎて河伯の德を頌せんか。

叙曰。水之爲德。大矣哉。

河の所在は肥沃なり

沖積土の肥沃

北米二十餘河水の含有物

歐洲三十六河水の含有物

テームス河水の含有物

ナイル河水の含有物

(二) 河の所在は肥沃なり

河は沙泥を抱き流下して之れを隨所に沈澱堆積す。沈澱堆積に依り經營されし新土壤や、細粒疎鬆にして能く草樹菜蔬の根を深入せしめ、密に溫度を擁護し、最も植物の長育に資す。加ふるに這般の沙泥は土壤中の特に膏腴なる「表土」を洗ひ削りて出來せしかば、沙泥自から莫大の榮養分を固有し、北亞米利加洲の二十餘河を分拆するに、河水一千分の中、可溶分〇、一五〇四四、其中炭酸石灰〇、〇五六四一六あり。歐羅巴洲の三十六河亦た河水一千分の中、可溶分〇、二〇三三、其中炭酸石灰〇、〇九五九八あり（ロート氏及びビシヨフ氏に據る）、英蘭のテームス河の如きに至りては、日々千六百八十二噸の可溶分を流出し、其中千百二十一噸は炭酸石灰なりと聞く。埃及（エジプト）のナイル河汎濫の際、一立方米突（メートル）の流水を掬り漂粉を査定するに（ミュンツ氏に據る）

窒素（硝酸化物）	一、〇七（グラム）	燐酸	〇、四〇（グラム）	加里	三、六六（グラム）
石灰	四八、〇〇（グラム）				

又た河水六米突（メートル）に入り一立方米突（メートル）流水中の粘泥を査定するに（仝上）、

硅酸	五三、〇七	攀土	一四、五七	酸化鐵	一〇、二一
加里	六、六七	苦土	一、〇七	炭酸石灰	三、一三
燐酸	〇、一九	有機物	二、八四	水	七、四一
計	九九、一六				

埃及はナイル河の恩賚なり

炭酸石灰の多量なる諸河皆な然り、是れ粘泥をして疎鬆ならしむるの特効あり、石灰又た能く有機物を消化せしめ以て酸素との化合を速かならしむ、加ふるに多量の加里あり、若干の燐酸あり、有機物あり、其他の化合物亦た齊しく植物に榮養する所。是を以てか埃及の地、ナイル河の洪涵を享けたる部分は翠綠にして一面の茵の如く生意頻りに勃動するも、享けざる部分は滿眸磽确にして全般の風物黯黃色を帶び蕭條凄楚、兩々區劃の歷然たる一行人にして左脚は翠綠色を蹈み右脚は黯黃色を歩むに至る。想ふナイルの精靈、五千載に洋溢し、歲時の豐登、民物の安樂、擧げて此の一水に依托す、宜べなり國人の此河に對し崇敬措く能はざることや。蓋し每歲初夏、上流アビシニヤ國に濕季到るや、降雨頻劇なるを以て、下流埃及の地は六月下旬より增水し初め、十月初旬に及びて止み、其間四方を洪涵して上流より傳送し來れる沙泥を沈澱堆積し、爲めに好個の肥料を散布し、一

ナイル祭

歳三回の收穫あるに至る。會、八月中旬、增水の坡隄を決し水の初めて溝渠に入る日來るや、國祭として日を慶し、昔時は盛粧せる少女を河に投げて犧牲とし、遺風幾千年、今に土偶を崇飾し花を裝ひ香を薰し、國都の太守衣冠束帶して之れを投げ、式典極めて莊嚴、了るや歡聲一時に起り、驢を驅るコプト人(埃及固有の人種)は、駱駝に乘る亞拉比亞人(埃及にて勢力ある人種)と相揖して「好水」を賀し、土耳其人(埃及にて統治者たる人種)は、生平の仇儺を忘れて希臘人(其數四萬あり)と相抱きて酣嬉し、吝儉なるアルメニヤ人(埃及にて商業上勢力ある人種)も此日に限り新衣を裁して、亦た貪嗇なる猶太人の賓客を接納し、政府の有司は增水の程度に準據して一歳租稅の豫算案を制定し、國內の百戲は都城に競ひ集り、棕櫚樹蔭、婆娑たるの影下、蛇仕ヒ、手品師、音樂隊は塲を設けて伎を鬪はし術を衒ひ、以て日の暮るゝを知らず、夜に入るや萬點の紅燈は洪水と映發して煌々晝の如く、滿城の士女熙然として歌ひ、婆然として舞ひ、河上無心の塘鵞、鷺鷥、白鵲(埃及人此鳥を神視す)すら喜鳴するの觀あるもの固より其故なしとせず。

日本の「上田」「上畑」の所在

日本の「上田」「上畑」なるもの悉く河に延緣す、試みに之れを證左すべきか、

河系	田	畑	全國耕地との割合	地價
御物川及能代川	一〇〇、〇〇〇町	三五、〇〇〇町	二、六八割	四三、九八五、〇〇〇圓
最上川	七四、〇〇〇	三四、〇〇〇	二、一五	三三、四四八、〇〇〇
信濃川	九二、〇〇〇	六四、〇〇〇	三、一〇	四三、九九六、〇〇〇
北上川	九四、〇〇〇	八六、〇〇〇	三、五八	四七、二四〇、〇〇〇
阿武隈川	七二、〇〇〇	四三、〇〇〇	二、二九	三三、六四五、〇〇〇
利根川	二八九、〇〇〇	二四八、〇〇〇	一〇、六八	一一五、八八九、〇〇〇
木曾川	一〇四、〇〇〇	六四、〇〇〇	三、三四	四八、八〇八、〇〇〇
淀川及大和川	一二四、〇〇〇	六二、〇〇〇	三、七四	五六、六〇六、〇〇〇
筑後川	八二、〇〇〇	四三、〇〇〇	二、四九	三七、六五五、〇〇〇
計	一、〇三一、〇〇〇	六七九、〇〇〇	三四、〇〇	四六一、二七二、〇〇〇

關東の平土と利根川

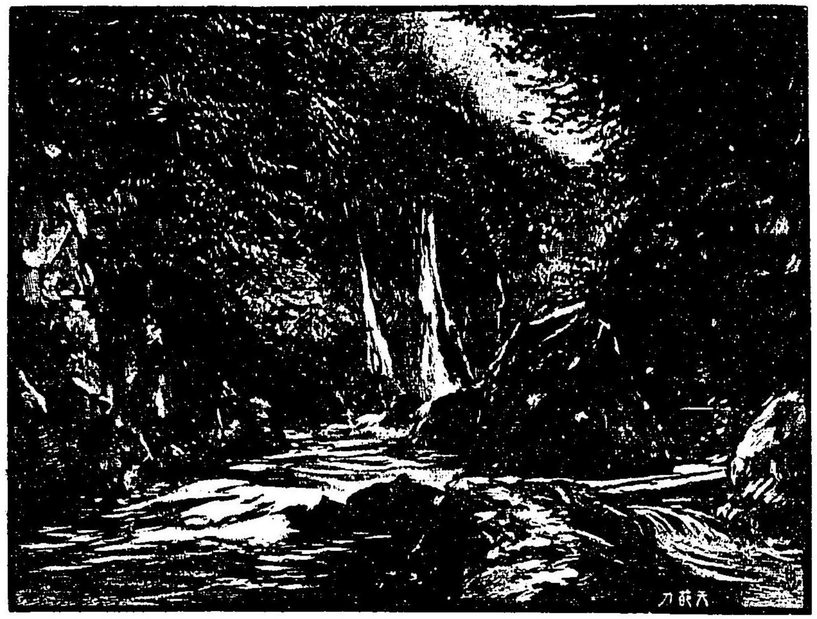
濃尾の沃壤と、木曾川

日本全國耕地の三分の一强や實に以上の十一河に延緣し、夫の關東の平土、田疇洞然として海の如く萬項の黃雲中より筑波の峯尖突兀として露はるを見るは、土地の隆起と利根川の沖積とに因り、「日本の倉庫」と稱ふ尾

畿内の膏田と淀川及大和川
筑後米肥前米と筑後川
秋田米出羽米と御物能代川
越後米と信濃川
仙臺米と北上川及阿武隈川
加賀藩百萬石の沃壤
石狩川と北海道
花蓮江と臺灣
河伯の警醒

張、美濃の沃壤は木曾川の沖積と土地の隆起とに因り、畿甸の膏田は多く淀川及大和川の沖積に因り、「五穀祠開香火叢」てふ「筑後米」、香粒玉を炊くが如き「肥前米」を穫了するは多く筑後川に因り、「秋田米」、「出羽米」は御物、川及能代川、最上川の河系より産出し、「越後米」は信濃河系の蒲原平原より産出し、「仙臺米」は北上川、阿武隈川の河系より産出し、其他

中有龍蟠虎踞之都。元精鬱渤。鍾秀標瑞。具百二之形勢。實爲蜻洲之雄鎭てふ金澤(加賀)は犀川、淺野川の沖積層上にあり、松任、美川(仝上)は手取川の三角洲上にありて、所謂加藩百萬石の沃壤膏田は悉く河の恩賚なり。況んや北方の新富源たる北海道は石狩河系の構成せし石狩溪谷あるが爲めに特に生氣を發動し、南方の新富源たる臺灣は花蓮河系の沖積せし奇萊平原あるが故に頓に多望に屬するおや。日本の詞家、文人たる者、誰れか巨刄天に磨がくが如き筆を揮ひて斯土の爲めに河の豊功偉蹟を頌歌せんとするぞ。人或は頻年河水暴漲して人畜、耕作物を毀壞するに慊らず、以て河を嫉視する者なきにあらず、而かも是れ近代の日本人が或は山林を濫



川内山の錦(秋の溪流)

松平樂翁

予が領中川うつてふ山ありつゝゝ盛なるころは人々見に行くことなり秋の紅葉は殊にすぐれたる景色なり諸州ありきて名山大川見たるもの此山の景色みては皆々おどろきぬる事なりたゞ二里許の間峨々たる山の間澗水を左にし右にして行くなり瀑布も水渇せざれば五六十ヶ所よりおちて山間の極るところに玉のすだれかけたらんやうなるたきあり

もみぢ見に行きたるが十歩にたちさゞまり五歩にみかへりしてその景色を賞しぬるが山へ深く入りぬれば彌々奇景なりはては人々默しておともせずされば言葉もて感賞するは淺かりけり

このとき善畵の者のことに山を好みぬるをつれゆきたるにあまりに感ぐてまた明けの日行きたりきさるに「うちつゞきて行きたらば萬分の一は畵にもかき得てんと思ひたるがけふ見ぬればきのふよりげにまさりて筆の及ばざるを知れり」といひぬ總ぐて興によきものははじめはさしも思はえずして見るごとによくぞおもふ

札幌農學校第一校園

（石狩川沖積平原の内）

首都密にして滴らんとす牛羊自ゆら肥ゆ。想ひ起す十數年前此の園中に馬を驅りて耕種せしことを。

河の恩惠の反證

日本の河は堆積急速なり

淀川河床層高の度

ナイル河堆積の度

伐し、或は姑息的の堤防を造築し、河に對する用心の輕忽なるを視、龍神、河伯の會、今人の近眼淺慮を警醒せん爲め、乃ち洪水を降しゝものならざるなきを得んや、而かも人畜、耕作物が毀壞の甚大なるは、即ち河の恩惠に賴らん爲め多數民人の其の所在に聚合し來りたるが故にして、是れ却て河の效能の甚大なるを反證するもの。且つ夫れ日本の河たる、太陸所在と異り、沙泥を沈澱堆積するの程度急速に、大坂の安治川口の如き（内務技師田邊義三郎氏に據る）

明治八年深十二尺の所……明治十九年深六　尺……即ち堆積六尺
仝　深十三尺の所……仝　深八　尺……仝　五尺
仝　深十五尺の所……仝　深十二尺……仝　三尺

八年に深サ八尺ありし所と十九年に深サ八尺ある所を測量するに、十九年の所は、八年の所より百間沖に出づ、即ち十一年間に百間宛沖に出づるの割合なり。

又た淀川床層高の如き、淀舊城の石垣に依り測算するに、築城後、今日に到る三百年にして川床の嵩まる十二尺五寸、即ち百年間に四尺嵩まるなり、（工師デレーケ氏の測量に據る）之れをナイル河上三千年前の古碑と比べんか、碑臺今や河の

ミシッピー河堆積の度

米産國たる日本に對する堆積の恩惠

寰宇の大經濟

沙泥を以て埋まる九尺、即ち一千年間の堆積平均三尺となす、而して河の堆積の全厚は四十尺なるを以て、其の此に到るは無慮一萬三千三百三十三年を經過せざるを得ず、ミシッピー河の堆積も亦た一千年間に三尺に過ぎずと。蓋し日本の地勢たる、河源近くして傾斜急劇に、隨て浸蝕力猛烈、沙泥を傳送する多量なるも、太陸や、河源遠くして傾斜も緩漫に、爲めに浸蝕力の遲々たるに因るもの、而かも米産を以て立國の經濟となせる日本にありては、河の堆積急速なるは特に多謝すべき所。人は謂ふ、日本の如き小土、其の大河と稱ふるものすら、太陸所在のものと比れば、眞個に溝渠一樣に過ぎず、何すれぞ日本に「河と人生」の干預あらんや、日本にありて「河と文明の關係」を立說するが如きは、猶ほ樣に依りて葫蘆を畫くが如きのみと、而かも河の日本國土を利濟する此の如く深厚なるものあり。之れを要するに、河は廢物たる舊土壤を轉換して有用なる新土壤を經營するもの、起廢回生の妙用は全く此中に存す、眞個に寰宇の大經濟。

金城靈澤碑銘曰。滋潤膏沃。涵養無竭。

河の所在は交通に便なり

道路

兩長河の直角を作るは交通を便にす

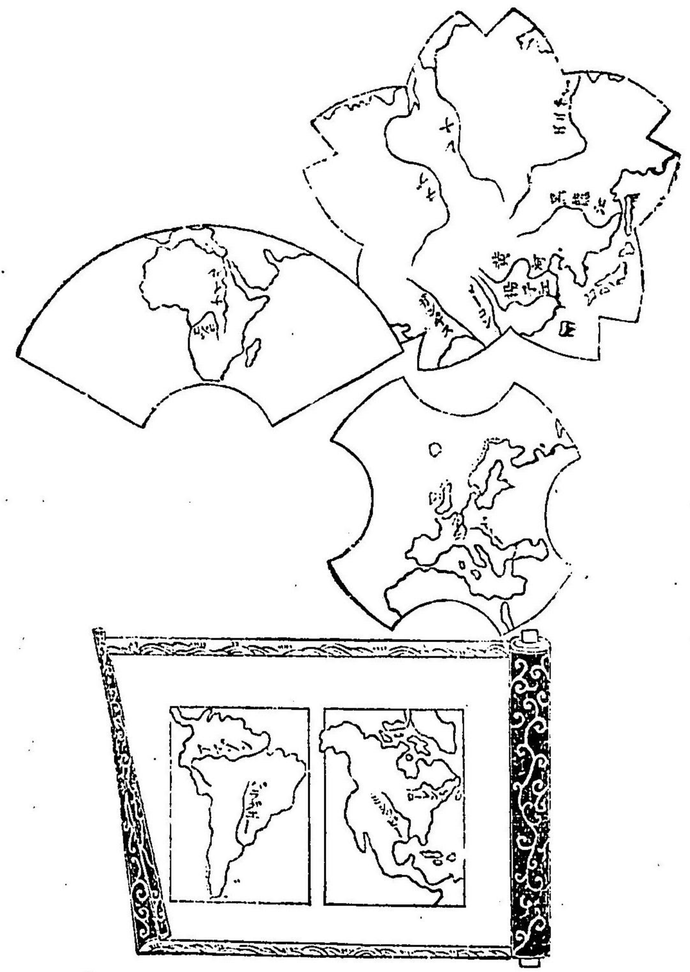
兩長河の反對して流るゝは交通に便なり

ミッスリー河とコロムビヤ河

越後街道

(三) 河の所在は交通に便なり

河の所在は坦平なり、交通に利便なる想ふべきのみ。況んや田疇は瀰望として都邑、墟落は其間に點綴す、道路の相連絡する固より然り。蓋し五太洲共に兩々の最長河は、洲内にありて直角を作りて流駛すれば、輙ち人は東より入りて南に出づるを得(亞細亞、南北亞米利加)、東より入りて北に出づるを得(亞細亞、歐羅巴)、北より入りて西に出づるを得(亞弗利加)、以て深く内陸蒼莽の間に出入し洪荒未闢の域に通達し得るは、河道の直角を作す所因に依る。更に兩長河の相反對して流駛するに至りては、内陸を縱絕將た横絕するに偉大の利便を資し、亞細亞洲の如き北より容易に南に出づるを得るは、長河の北流すると南流するものあるを以てのみ。北亞米利加洲の如き、ミッスリー河は太西洋系に流下して、コロムビヤ河は太平洋系に注入し、兩々の河口相距るゝ一千里、而かも河源の相距るゝ些々十五分時の歩行程、乃ち兩河系に沿ひて鐵道を敷設し、爲めに北米内陸の奥秘を闡明し、利源を開發しぬ。利根河口と信濃河口は相距るゝこと日本本州の殆



奥州街道
東北鐵道幹線の敷地
中仙道中央鐵道幹線の敷地
本州の脊骨を縦貫せる道路
山陰山陽間の道路
日本本州最坦平の部分

んと全半、而かも兩河系の水源たる相距るゝ數里のみ、乃ち之れに沿ひて官道を開き、驛次を置き、依りて以て江戸の政令、太平洋岸の物産は北越及び日本海岸に流通したり。奥州街道は、利根河系より阿武隈川、北上川に并行するものゝ、謂、今日の東北鐵道幹線の敷地亦た是れ。中仙道は利根河系より木曾川に通ずるものゝ、謂、將來の中央鐵道幹線の敷地亦た是れ。本州の脊骨を縦貫せる道路は、越中の神通河系より木曾河系に隨ひ飛騨を經て美濃に出づるもの。山陰山陽二道の間を連絡する道路は、山陰の大河たる賀露川、日野川、將た江ノ川と山陽の諸河系に從ふもの。日本海岸より太平洋岸に出づる最坦平の部分にして沿道遂に山嶺を超えず、宛然溝渠の看を做し、海洋の水をして今少しく高からしめば、本州をして二大島に分割するものは、兩丹の山裏川より播磨の加古川に順ふ道路即ち是れ。之れを要するに、大道長へに髪の如く引き去り、長亭短驛、車影馬聲絡繹とし、行人の輻ち謳歌して來往するは河の力のみ、政令、交誼、歴史の容易に通流するも亦た河の力のみ。河の人文に默托冥合するや其深サ幾萬尋。

河は航運に利す

北上川の航運

利根灌城は上野全部、下野七分、武藏二分、下總九分、常陸半部

一萬以上の市町は前橋、高崎、桐生、館林、足尾、足利、田沼、鹿沼、栃木、宇都宮、古河、結城、船橋、千葉、上浦、石岡、佐原、銚子

淀川の航運

信濃川の航運

富士川の航運

(四) 河は航運に利す

河の所在は交通に便なるのみならんや、河水の航運に利するは鴻濛の時よりす。謂ふ勿れ、日本は島國なり、航運に利する河なしと。而かも瀛笛長へに霜昊に嘯き、豐穰二十里の間を下り、三陸の嘉穀を滿載して石卷港(陸前)に漕轉し、港より布帆片々、太平洋の風に懸り、東京の海門に入りて、深川に荷揚ゲし、以て奥州の內陸と、太平洋と、東京と運搬上の連絡を洞通するは北上川にあらずや。灌域縱橫三四十里、上に市町を盛る百三十、內人口一萬以上のもの十八、其間を結び其際を縫ひ、關東各州をして社交上に利害の交涉上に涅して一團と渾成せしめつるは、利根河系の航運にあらずや。京攝間の運搬を幇助せる淀川十三里の瀛船航程の如きあり。日本海岸の米廩てふ北越の中心を疏貫せる信濃川十七里の瀛船航程の如きあり。其他柔櫓聲々客夢を搖す緩流は固より、短舸急湍を飛ぶ富士川の如きすら、

信甲飽於魚鹽。而駿土足於材木。五種百物副焉。自是以來。緣河之民。仰食於其利者。以千百數。不特人物牛馬省勞也。富士水碑銘序　黑川好祖

楊子江の運航

十一貿易港は重慶、宜昌、沙市、岳州、漢口、九江、蕪湖、江寧、鎭江、蘇州、上海、

ライン河の航運

ドノー(多惱河)の航運

聖ローレンス河の航運

にして、歲々輸出物價七萬餘圓、輸入物價四十三四萬圓あるに至る。河運の日本を利濟するもの無慮。

太陸にありては、其の河系に條約貿易港を開く十一、艦隊を率ゐて溯り得ること三百里(漢口まで)、瀛船を以て更に溯り得ること四百五十里(重慶まで)、灌域十二萬五千方里、航行里程四千八百里、十一省の間を漕轉する楊子江の如きあり。瑞西、獨逸、佛蘭西、和蘭の四國を過ぎり、航程二百里、幹流に所在せるケルン市まで洋航の瀛船を以て英京倫敦(ロンドン)との間に定期航海を開通し、一支流に所在せるフランクフルト市まで一千噸の瀛船を往還せしめ、西部歐羅巴全躰の交通を安排せるライン河の如きあり。墺地利(オーストリヤ)、匈牙利(ハンガリー)、塞爾維(セルビヤ)、勃爾加利(ブルガリヤ)、羅馬尼(ルーマニヤ)五邦の境を經、河系上に五邦の都城を立基せしめ、支流の航行すべきもの六十、其他大小の支流無數、爲めに水量多大にして年內同一樣に、墺匈一帝國の範圍內に於てすら乘客歲々三百五十萬、荷物無慮二百萬噸を搭載し、東部歐羅巴一帶の航運を獨占せる多惱河の如きあり。河系の航行すべきもの一萬四千里、洋航の瀛船、太西洋より直ちに河

アマゾン河の航運　英の江港は英國の倫敦ニューカッスル、プリストル、リバプール、蘇格蘭のエデンバラ、グラスゴー、愛蘭のベルファスト、コルク、歐陸太西洋岸の江港は葡萄牙のリスボン、オポルト、佛蘭西のボルドー、ナント、白耳義のアンヴェルス、和蘭のロッテルダム、アムステルダム、獨逸のハレーメン、ハムブルヒ、ベック、ステッテン、ダンツヒ等

ミシッピー河の航運

口に入り、溯ること九百里、深く内陸の間に入りスペリオ湖上のアーサー港に達し、港より太平洋上のヴァンクヴァーまで鐵道千九百十五哩、以て太西太平兩洋の運搬を連絡する加奈太の聖ローレンス河の如きあり。多雪凍寒の方土と椰樹翠にして滴らんとする方土とを連絡し、温寒帶の産物と熱帶の物産とを結申するミシッピー河の如きあり。河系の航行すべき者二萬里、太西洋上の河口より南米太陸の富饒多産なる部分を横絶し、逕々一千里、直ちにアンデス山下まで航行し得るアマゾン河の如きあり。

英吉利の河は太陸の河に比れば短小、而かも水源高崇ならざるを以て、流勢平靜にして遲々、深サ到る處均一に、且つ年内些も封氷せず、河口は底深き江港を鑿ち海潮上流まで溯り得、蓋し五洲の百穀萬貨、英國に輻湊填溢するは其河の形勝に頼るもの多く、經濟上より觀下せば、其の價値や太陸の大川長江の上にあり。歐羅巴太陸、太西洋岸の河口も亦た洋海の潮浪猛烈なる爲め、上流より傳送する沙泥を洗ひ浚へられ、且つ所在の土壌を削り取られ、爲めに幅廣く底深き江港を鑿ち、特に船舶の錨泊に恰好せしむ。歐洲太西洋岸の通商貿易熾んに、舶艦鱗次し、帆檣林立するは、主として江港の多在するに因る。

運河

運河を鑿ち、河水を疏導し、以て尋常航運の外に舟楫の便に利し、交通の用を興すもの多し。日本の如きは航行運河の長大なるものすら、夫の本利根新利根二川を連絡する利根運河二里許に過ぎず。然れども支那にありては、浙江、江蘇より山東を經て直隷省に到る大溝渠三百二十五里、支渠縱横、漕轉至便、南部支那の生意の勃動せるは全然之れに頼り、効益の絶大なる盡道隋亡爲此河。至今千里賴通波。若無水殿龍舟事。共禹論功不較多。汴

唐皮日休

河懐古

にして、隋の開皇、大業年間、初めて開鑿せしより、金、元、明、清の歴代北京に都せし者、糧餉を南部多米の地方に需要するや、皆な海路の險を避けて水路を此の溝渠に取り、千三百年の間河南河北の有形無形の交誼を緊密に連絡し、自から政治的大勢力と化成せる大運河の如きあり。歐羅巴洲にあり

利根運河

支那の運河

宋人李敬方詩あり。水通淮利最多。人爲害亦多。生脂膏是此河。盛出運河刺。蓋出運河詩。萬世功皮不可掩。ふべからず。の詩に可なり。李の詩て不可

太西洋と北海間の運河
北海と地中海間の運河
地中海と太西洋間の二運河
西歐と東歐と太西洋と北海間の運河
太西洋系とパルチック海間の運河
パルチック海黒海間の運河
米國の運河

ては、セイン、ライン二河の間に運河を鑿ちて、太西洋と北海とを連絡するあり。ライン、ローン二河の間に運河を鑿ちて北海と地中海とを連絡するあり。ローン、セイン二河の間に運河を鑿ちて地中海と大西洋とを連絡するあり。地中海より直ちにガローン河の上流に運河を鑿ちて太西洋とを連絡するあり。ライン多惱二河の間に運河を鑿ちて西部歐羅巴と東部歐羅巴、太西洋系と黒海とを連絡するあり。エルベ、オーデル二河の間に運河を鑿ちて北海及び太西洋系とバルチック海とを連絡するあり、ヴヰスチュラ、プリペット（ニーベル河系）二河の間に運河を鑿ちてバルチック海と黒海とを連絡するあり。北米合衆國にては、イリー湖東を決鑿してハッヅソン河（河口にニューヨーク港あり）に疏導し、以て人煙の稠密なること全聯邦戸口の十三分の一を占有しながら、而かも麥作の些少なる全邦收穫額の三百七十分の一にすら到らざる東部各州に向ひ、西部各州より麥、麥粉を漕入する七個月間（一年中運河の氷封せざる間）に八百七十五萬石以て貿易製造業の熾盛なる太西洋岸に對し、農利の饒々たる西部新開地方の土産を送附し、初めて東部人の食卓に好個の麵包を上らしめ、有無交換の途能く洞通して東西の利害を一髪の如き溝水中に調訂するイリー運河の如きあり。其他天然の運河カシッキアレー河の如きあり。

天然の運河カシッキアレー
河と交通、運搬

米内陸の中心と北部海岸とを連絡するカシッキアレー河系とオリノコ河系とを連絡し、引きて南之れを要するに、河は其の所在の陸上には交通の便に資し、水上には船舶を往還せしめ、河口は錨泊に供へ、更に運河に疏導して運搬の用を擴充し、以て東西を連絡し、南北を結串し、各都邑の間を縫ひ、異風土の際を繋ぎ寒地と熱地とを統率し、利害の衝突を調訂し、有形上、無形上に世局の進運を振興するもの、或は曰ふ、近代鐵道大に開け、交通の機關茲に完備す、復た河運の用あるなけんと。焉んぞ知らんや、河運は賃料の低廉なるが故に需用遂に止まず、利根、北上、淀の漕船運賃は漕車より下り、多惱河の漕船運賃亦た漕車より下り、ミシッピー河の如きは、漕船運賃實に漕車の三分の一に過ぎざるが上に、一隻の曳き船にして三十二隻の小舟を後に率ひ、無慮二萬噸の荷物を一回に搭載し來るに至る、假りに之れを漕車を以てせんか、十

嘔入りの荷物車二十輛を連れたる列車一百行を要するもの、宜べなり其の航行季節八個月間の運漕高は、沿域に開通せる三條の鐵道幹線の合計運輸高より多量なることを知れ、河運は補助的交通機關として鴻利ある のみならず、亦た鐵道會社をして運輸上の利益を壟斷せしめず、競爭の爲めに瀛車の賃料を愈〻引き下げしめ、以て社會交通の途を安排せることを。

假令此河をして帶の如くならしむるも、河運の用と功は遂に廢せず。

大空にあらぬものからかはみに
　星かと見ゆるかゝり火の影　貫之
わたり來て來たと〳〵し筑波かは
　伊佐々の橋に暮るゝ夕くれ　道興
さしわたす小舟よふなる聲ばかり
　のこりて暮るゝ淀の川つら　蒿蹊
浪花津に諸國の米や冬こもり　津富

竹添光鴻北支那に遊び日ふ論下て曰ふ「灌漑之制。千古治水之要。亦千古治田之要也。（中略）若使溝洫縱橫相接。高下相承。洩則以供灌。涸則以灌洫。洫則挑起以資糞。土厚水淺者可使深。深者可使厚之。薄資糞。養水者可使淺。淺者可使深。要之。識洫者。識灌洫。識灌洫者。識支那。識支那。識及シリヤ。識小亞細亞。識アルメニヤ。識亞拉比亞。識亞拉比亞人。識亞拉比亞之灌洫。識亞拉比亞人側山起段階。如層々而上。最下方宅編

（五）河は灌漑に資す

古井田之制。夫間有遂。十夫有洫。百夫有溝。千夫有澮。萬夫有川。川者水之滙也。萬夫之所恃賴也。旱則川之水。可由澮以入於洫。由洫以入於溝。由溝以入於遂。而田不病燥。溢則遂之水可達於溝。溝之水可達於洫。洫之水可達於澮。澮之水可達於川。而田不病濕。秦人盡壞其制。後世莫能復（中略）。水利不興。則地實不登。即有蠲來牟穆黍諸旱穀。而所入不足。以應長吏之追呼。於是有棄田不求直。而無一人受者。而欲募民墾荒興水利。其誰應之哉。　清許承宣

と、河水を引き秩序的に灌漑の用に資するは二千五百年前の支那周代より然り。獨り支那のみならんや、太古埃及、シリヤ、小亞細亞の諸邦往々之れを施行し、特にバレスチンは、因りて以て雄富の疆土と瞻仰せられ、猶太人の此國を征服するに至りて溝渠を毀ち溜池を埋め爾來灌漑の制を廢弛せしより、遂に赤裸々の瘠土と凌夷せしとは古史の稱ふる所、其他アルメニヤの如き躁暴なる降雨季節の外は降雨絶無なる地方、亞拉比亞の如き降雨極少なる地方にありては古來此制亦た最も行はれぬ。印度は農作物

に云ふ「梯田。磐山鑿爲階級一ど。序起如三才圖會、錄畫錄亦た「梯田」の語あり、周亮工閩小記の「磴田」亦た同意、即ち古支那にも來より此法ある事を識る。

英語のタレイスカルチュアー亦た是れ

印度の灌漑

西班牙の灌漑

伊太利の灌漑

兩三種ありしのみ、而かも近代に到り、古來の溝渠を興復修理し、ガンヂス、ジュムナの兩河水を疏導して灌漑に資せしより、諸般の農作物は優に長育し、今や本國英吉利の無量なる需用に供給し餘りて之れを外國に輸出し、最貧薄最貧瘦の州郡すら五六十年前より頓に地力を蘇生し、新都邑村落の勃々として興起するに至る。西班牙は羅馬人占領の頃よりエブロ河の流水を灌漑の用に資し、亞拉比亞人占領の間亦た專ら力を之れに用ひ、降りて現今に到るまで最も秩序的に行ひ來り、毎日早天、用水の所有主は競賣を以て農夫に汲み渡し、農夫は前金を以て當日入用丈ケの水を得るを恒例とするに至る。聞く此國の米、桑、蜜柑、果物類、花樹類の豐肥を以て四隣に鳴るは全然灌漑の力にあり、國内一方里の平均人口は二百十人に過ぎざるも、灌漑法の完成せる地方には四千二百十人ありと。伊太利は灌漑に賴りて潤利せし國土の隨一にして、ロムバルデヤ州の如き、何等の農作物と雖も悉く之れが恩惠に潤はざるなく、ピーモント州の如き、灌漑の制あ

る地方と制なき地方とは人口の增殖二十年間の平均毎一萬人に付百三

十九人と八十一人との差あるに至る。ルーメリヤには、土壤輕鬆の所は乾燥して荒沙一帶に敷き、濕潤の所は雨潦停滯して時疫盛行し、四面耕種の施すべきなく、無人の境たりし二州ありしも、大溝渠を鑿ちて河水灌漑の制を設けしより、往時の空原曠澤も今や全歐洲中なる豐饒の部分、人口稠密の部分と化醇しぬ。濠太利亦た灌漑の恩眷を受けたる所、豈に外國のみならんや、日本の如き米產國にては、灌漑の用特に偉大深厚なるを見る。想ふ肥料の用は地味の缺點を補充するにあり、灌漑の用は氣候の缺點即ち雨量の不足を補充するにあるもの、之れを要するに河水を疏導し灌漑に資せんか、(一)水の供給殊に整齊恰好に、不時の增減あるなきを以て、雨量の多々なる地方に於てすら猶ほ且つ農作物の收穫を增殖する事、(二)河水は一般に雨水より營養物を多量に含有し、且つ之れを適度に配布するを以て、多量の肥料を施さいるも、收穫を增殖する事、印度にては同一の地方にて灌漑するとせざるとにて、收穫に劃然一倍の增減あるが如き即ち是れ、(三)水の汎濫に依り土壤中の有害分を洗脫し、地味を改善し得る事、(四)劣

ルーメリヤの灌漑

濠太利の灌漑

日本の灌漑

灌漑の用

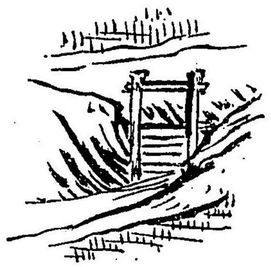
灌漑の利益

灌漑の間接の利益

等にして利益少き農産物しか長育せざる所に多利多益なる物を生産し得る事、(五)氣候にして適宜なりせば、灌漑せる地方には終歳耕種收穫し得る事、即ち米國カリフォルニヤ州の南部、アリゾナ州の西部にては、一個年に二月間の外は耕種收穫し得、能く一季間に五回苜蓿を苅取り穫るに至り、亞弗利加のアルヂェリーにては馬鈴薯の收穫一年三回あるに至るが如き即ち是れ。其他間接の利益に至りては溝渠あるが爲めに水の排注宜きを得、爲めに(一)濕潤なる所は轉ち乾燥せしむべく、以て舊來一回の米作に止る所は、秋收の後更に畑地となし、冬春の播殖に供へ得べき事、(二)濕地を乾燥するを以て有害瓦斯の發上を杜絶し、所在民人の衛生を益善する事、是れなり。河水灌漑用の利潤や亦た大。

はつせ川なかるゝ水の潮をはやみ　よみ人
井てこす涙の音のさやけさ　まらす

麥田菜隴倚河畔。無限春風暑僮消。綠蔭夾路墓村遠。人騎駱駝過小橋。埃及雜吟　中井櫻洲



(六) 河は水力利用に供す

河を引きて水力を利用するは、人生經濟の一途たり。若し夫れ小は水郷の人家、桔槹の聲起り、一上一下、以て日々に一二俵の米を搗く所より、大は雷震霆疾せる幾百丈の瀑布を拉して巨萬馬力の電氣を霍發するに至るまで、効能の絶大なる寧ろ測るべからず。東京の城北、玉川上水附近の各村邑たる、灌漑の餘水を引きて水車を設け、就中拜島村の如きは、幅僅に六尺未滿の小溝渠流通するに過ぎず、水車の直徑亦た八九尺を出でず、而かも或は三間に一を架し、或は十間に二を架し、其數幾多、能く水力を利用するの結果は、圖村の富裕を致し、關東の「金持ヂ村」と稱へらるゝに至る。水力利用の効能絶大なるは渾圓球上皆然りと雖も、特に日本の如きに至りては國土の地勢幅狹く丈ヶ長く、而して巍峨たる山系は國の中央に連亘すれば、到る處に瀑布、瀬溜騰沸し、河水の流勢亦た猛烈雄快に、乃ち頻に水力を利用して大工業を恢弘するに足るもの、論ずる者あり（水力學專門家清水政次郎氏に據る）

水力使用の簡便なる、費用の低廉なる、蒸瀉力使用に比すれば、少なき

は十分の一より、多きも三分の一に過ぎず、而して水力使用は、其費用の廉なるにも拘はらず、反つて費用多き瀝力使用に優る點五つあり、

一、瀝力使用の如く瀝罐破裂するが如き危險なきこと
二、機關手火夫を要せざること
三、黒煙を吹き散らし近傍に迷惑を及ぼさゞること
四、石炭を要せざること
五、機械運轉を始めさするも、或は之れを止むるも、只水門の手柄を一二轉せば、直ちに意の儘にするを得、瀝力使用の如く、動力を得る迄時間と金とを要せざるなり。

我國の地形を按ずるに、全國到る所水力を利用し得べき箇所に富めるは、歐米各國に多く其比を見ざる所、實に將來殖産興業上の天賚と謂つべきなり。

今其一班を示せば、我國中に放棄しある瀑布河川等の水力を利用せば、大略三百萬馬力位を發生せしめ得るは蓋し容易なり、而して若し瀝力を以て同一の馬力を發生せしめん乎、其石炭代のみにても、一晝夜五拾四萬圓、一ヶ年にては實に壹億九千七百拾萬圓の巨額を消費せざるを得ず（今一馬力に付一晝夜要する石炭平均六十ポンドとし而して石炭壹萬斤の代價を參拾圓と見積り算せり）其他瀝力を使用せば、機關手火夫等の給料を算入するときは、三百萬馬力を發生せしむるには少くも一ヶ年三億萬圓以上の巨額を要すべし、而して之れに反し、水力を使用せば、上陳の如き費用殆んど皆無なり、以て水力使用の利益ある一班を窺ふに足るべし。

日本立國の大根本

和關宮壁の根本

蓋し水力利用は地勢上、遂に日本立國の大根本たるや必然、而して今やと。到る處に瀑布、河流、湖水の力を利用するの事起り、漸く一世の大趨勢たらんとす、想へば和關や、歐西に偏在せる礦爾の國土を以て、能く五大洲に無數の領國を占有する根本は、全く水力の利用に歸因すとせば、誰か水力利用の絶大効能に感激せざる者あらんや。

落花深處蹈車忙、抖得溝渠水亦香、始識南州風土異、田疇三月已分秧。

佐賀途上。

河は諸般の生業を授く
菱採り
藻苅り
日本の淡水漁業
北米太平洋岸の鮭漁業
北米の白魚漁業
魚類に食料を供給す

(七) 河は諸般の生業を授く

此の柳蔭の下に小艇の蘆藻するは菱(食料用)を採るもの、彼の蘆花の側に短舟の上下するは藻(肥料用)を苅るもの、其他河は捕魚の爲めに萬千の民人に生業を授與する所。日本の如き淡水漁船の數五間以上の者二百五十、三間以上の者四千百、三間以下の者三萬六千五百、合計四萬有餘に至り、鮭の漁獲たる鹽製にしたるものゝみすら一個年時に四百六十萬貫、鱒の鹽製二百二十七萬貫に上るあり。北米太平洋岸にては、コロムビヤ河(合衆國にサクラメント河(仝上)に、フレーザー河(英領コロムビヤ)に、到る處鮭の漁獲多大、罐詰メ製造高一個年に四ダース入りの函一百萬個に至る。北米合衆國、加奈太の諸河、亦た白魚の漁獲無慮、凍冰して之れを遠土に輸送する額亦た無慮。既に然り、河は諸般の生業を授與するのみならず、粉碎若くは燻敗せる有機物を抱容して流下し之れを洋海中に注ぎ入れ、千年萬年、遂に洋海の水分をして自から肉汁一樣と成さしめ、以て無量の魚類に無量の食料を供給し來る。其の人生の生業に直接間接の利益ある眞個に大。

河は其他雜多の便宜あり

(八) 河は其他雜多の便宜あり

河や、或は氣候を調訂し、或は土壤を潤澤し、或は濕地を乾燥す、其他飲料として用ふべく、眺めて以て氣宇を清爽恢弘せしむ、其の便宜や悉くすべからず。

若鮎やかく變る潮に住ならひ　巻阿
藻刈舟筏の葉ほとに見ゆる哉　鷺水
いし川や瀬見の小川のきよければ
月も流れをたつねてそすむ　長明
富士かはのゆさけの水に我のみは
すましとかすむ春の夜の月　契沖
漁翁夜傍西巖宿。曉汲清湘燃楚竹。煙消日出不見人。欸乃一聲山水綠。廻看天際下中流。巖上無心雲相逐。漁翁　唐柳宗元

(六) 日本史

天孫と大淀河系

鴻荒の世、天孫瓊瓊杵尊、日向の大淀川上流に宮居す、河は九州の太平洋岸なる隨一の巨流にして、上流には沖積層の肥沃なる平地を開展し、延綿して南は直ちに薩田川の沖積溪谷に連り、西は薩摩の國府平原と相接し、九州の南部に於ける最大平原を闢き、地形優勝、東の方日向灘よりと、南の方有明灣よりと、西の方鹿兒島灣よりと、三方よりの中心に所在し、赤道海流の感化を享け、氣候殊に和煦温暖なるが上に、其の地質は霑敗せる火山灰の沖積より構成するを以て、膏腴無比、眞個の天府たり、天孫の裔、此所に蕃殖し、此所に雄富を稱へたるもの偶爾にあらず(此所より南に出で有明灣に到れば、檳榔樹の亭々として亂生する檳榔島あり、宛たる熱帶の風物)。既に然り、天孫大淀河系に孳殖して雄富を稱へ、方除ありて雄心落々たり、尊の皇孫彦火火出見尊、英邁にして濶達の量あり、是に於てか中原を裁定し大に政道を弘恢せんとす、乃ち族衆を率ゐ東しするや、當時陸上には行軍

神武帝の東征

瀬戸内海は大河の如し

中原の裁定

橿原の奠都

平城即ち奈良

平安の奠都

の道路とてあるなく、加ふるに所在草昧に屬し、粮餉を得べきもの絶少、尊の舟師を率ゐて東し玉ひたるもの、亦た以て雄略の一班を證左するに足る、舟師進みて瀬戸内海に入る、内海は山陽、四國の間に開き、丈ケ長くして幅狹く、海角は兩岸より四射八出し、島嶼は内に點綴し、さなきだに幅狹きに愈〻狹まり、勢頗として大河の觀あり、當時の幼稚なる船舶を以て恙なく渡行しゝは、亦た地勢の與りて然らしむる所。既にして陸に上り、八十梟師を斬り、長髓彦を亡ぼし、裁定の事成るや、中原の大河系たる大和河系と、紀川河系との中央たる橿原に奠都し、以て天壤無窮の丕基を鞏立す、宜べなり神武の尊謚や。

爾來一千三百七十年、元明天皇の和銅三年、都を平城(奈良)に遷しゝまで、歴代の天皇宮居を遷徙されしこと頻々、而かも其の所在や、淀大和の兩大河系の外に出づるもの一二而して平城左右の京坊、亦た這般兩河系の構成せし沖積層の上に跨てたるもの。奈良の都たる八十四年。桓武天皇、天授聰達、頗る事宜の大體に通じ、不易の都を山城の平安城(京都)に奠す、城は淀河

國府の所在

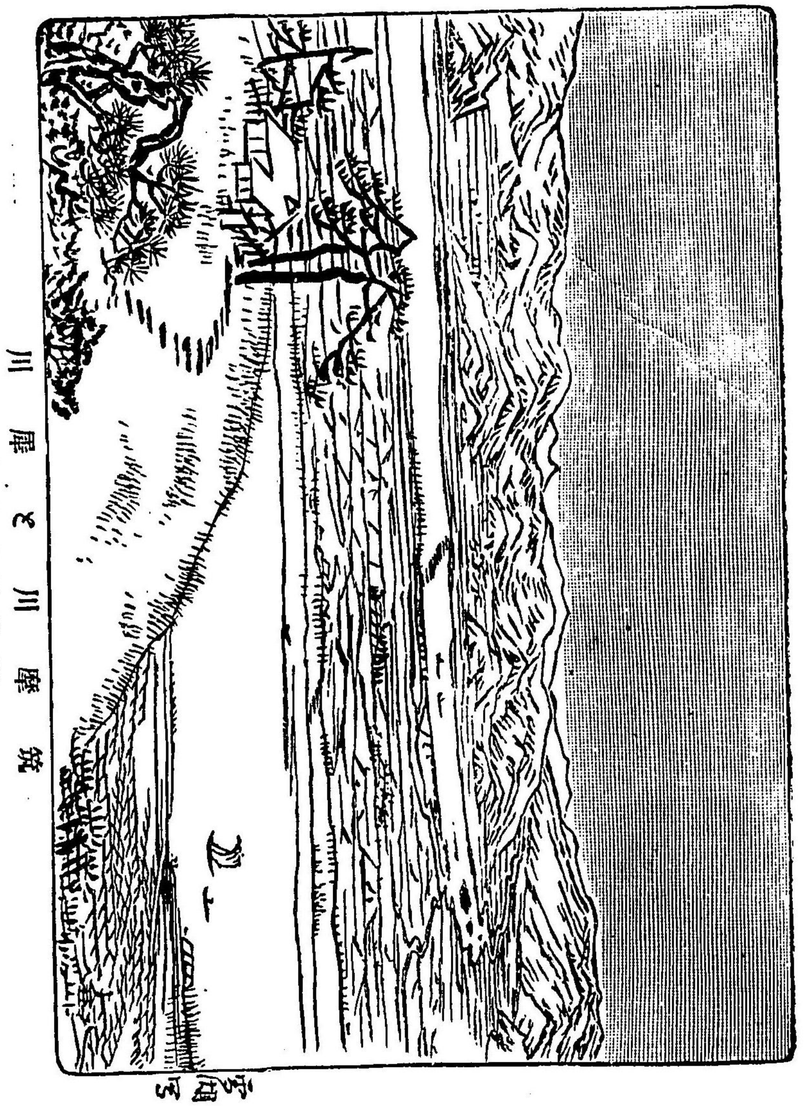
利根河系と國府

戰國英雄の根據地

系の平地に立ち、南日本を控掣するに好個の處。豈に帝都の河系上に建つのみならんや、地方政廳の所在たる國造、國司の治所(國府)も亦た悉く河系上に建ち、就中利根河系の如き、上野、下野、下總、常陸の四國府を其上に立基せしめぬ。要するに日本の上古史、中古史は河の歷史なり。

戰國史も亦た河の歷史なり、戰國群雄の根據地は齊しく河畔にあり。

馬淵川	南部氏。	岩木川	津輕氏。
北上川	秋田氏。	最上川	最上氏。伊達氏。
御物川	佐竹氏。	平久里川	里見氏。
久慈川	宇都宮氏。上杉氏(管領)。千葉氏。結城氏。里見氏。北條氏。		
那珂川	村上氏。眞田氏。	犀川	小笠原氏。
利根川	木曾氏。齋藤氏。織田氏。	神通川	神保氏。
筑摩川	朝倉氏。	酒匂川	北條氏。
木曾川	武田氏。	安倍川	今川氏。
九頭龍川	德川氏。	雲出川	北畠氏。
富士川	京極氏。淺井氏。	市川	赤松氏。
矢矧川	宇喜多氏。	千代川	山名氏。
姉川			
旭川			



川犀と川摩筑

(島中川國濃信)

富士三

木曾矢矧兩河系の沖積地と織田、豐臣、德川三氏

江戸

東京

能義川　尼子氏。
吉野川　三好氏。
大分川　大友氏。
菊地川　菊地氏。
吉田川、太田川、那珂川、御笠川　毛利氏。
筑後川　小貳氏。
甲突川　龍城寺氏。
島津氏。

の如し。既にして本州の中央に延緣せる廣大肥沃の平原、即ち木曾、矢矧の兩大河系の構成せし美濃、尾張、參河の沖積層地を根據としける織田氏、豐臣氏、德川氏は、其の勢力を膨脹し得べき範圍や、他の小河系の構成せし平原より特に廣大なるを以て、能く群雄を芟取して中原を控掣し、遂に日本一統の丕基を成就す。織、豐、德三氏の天下を獲たるは、河の力に因る多し。後、德川氏、日本の最廣大最肥沃の平原即ち利根及び幾多河系の構成せし關東平原の上に府を開きて幕政を敷き、三百年の覇圖此所に成る、所謂江戸是れ。明治中興の當初、今上皇帝、鳳輦を江戸に遷させられ、稱を東京と改め、大に聖謨を宏廓し玉ふ、以來日本帝國の國都となり、政治上、社交上の中心となり、東洋恢弘の原動地たらんとす。日本史は即ち河の歷史なり。

朝鮮史は六大江の歴史なり

大同江
檀君
平壤
東史に云ふ「夏禹十八年。會諸侯於塗山。檀君遣子解扶婁朝焉」と
箕子

(七) 朝鮮史

長白の連山は宛如たるアルプス山系、白頭山脈は宛如たるアペニン山脈、朝鮮半島の白頭山脈に頼りて建設さるゝは、猶ほ伊太利のアペニン山脈に頼るに匹似す。羅馬歴代の興亡隆替は伊太利半島の大河チベル、アルノ、ポーの邊畔に裁定しき、乃ち朝鮮史の鴨綠、豆滿、大同、漢、錦、洛東の六大江に交渉する宜べなり。北より指點せんか、白頭山系の西に駛り黄海に注ぐものは鴨綠江、大同江、漢江、錦江たり、東に流れ日本海に入るものは豆滿江、洛東江たり、檀君以來朝鮮三千年の生命は全く這般六江の畔にあり。

東國通鑑に曰ふ、「東方初無君長。有神人。降于檀木下。立爲君。是爲檀君。國號朝鮮」と、三國遺事に曰ふ、「檀君都平壤」と、平壤一名王儉城、大同江畔にあり。

大同江水浸烟蕪。王儉春城似畫圖。萬里塗山來執玉。佳兒尚憶解扶婁。

柳惠風

と。周(支那)武王、殷を滅するや、殷の族子箕子を朝鮮に封ず、一族及び殷の民

衛滿氏
樂浪郡
扶餘族
高句麗

從ふ者五千人と、箕子の子孫亦た平壤に都し、大同江畔の沖積平原に孳殖す、所謂「耕種殷人七十田」とは是れ。箕子東遷より五百二十餘年、四十一世の孫準否に至る、時に支那に秦末漢興の亂あり、燕人衛滿なる者、亂に乘じて起り、其黨千餘人と朝鮮に入り、準否を亡して國を奪ひ、平壤に都する八十七年、孫右渠に至り、漢武帝に亡され、漢、朝鮮を樂浪郡となし、十八縣に別ち統治する九十餘年、所謂「樂浪城外水悠悠。誰識萩苴漢代侯」是れなり、樂浪城とは平壤、水とは即ち大同江。是より先き北狄に扶餘なる一族あり、長白山系の南麓に雄富を稱ふ、酋長朱蒙大志あり、其初め鴨綠江上流に居り、南下して大同江河系の沸流水上に都し(日本紀元六百二十四年)、頻りに四方を呑噬し、版圖膨脹して黄海より日本海に跨り、孫類利に至り國を高句麗と號ふ、東川王に至り都を平壤に移し、北狄の朝廷大同江の平原に覇を稱ふる數百年、後、唐及び新羅の同盟軍に敗られ、高句麗七百五年にして亡ぶ。大同江の朝鮮の古史に干預する此の如し、宜べなり彼土の詩人、江畔に低徊して古今伏仰の感に禁へざるが如きあるを、而して平壤は宛も我が京都

政治上社交上産業上の中心

錦江

益山
馬韓

温祚

百濟

の觀ある所。豈に獨り歴史上の干預のみならんや、大同江平原は實に朝鮮北部の政治上、社交上、産業上の中心となり、半島の主産物たる人參、大豆、牛皮は此の平原より出づ、大同江や朝鮮の生命の大部分を構成す。

大同江平原の主權者箕準否の衞滿に亡さるゝや、涙を揮ひて六百年間の墳墓國を去り、其衆數千人と共に南に下る、愈〻下るや、氣候益〻和暄となり、風物人に可に、遂に今の忠清、全羅二道の間に到れば、錦江の平原は蒼莽として眼前に開展し、鳥歡び花咲ひ、土産も亦た饒多なり、輙ち復た故の墳墓國を懷はず、居を河系上の益山(全羅道)に定め、馬韓を攻めて之れを破り、自立して韓王となり、所謂馬韓五十四國は錦江の河系に盛榮を盡くすこと百七十六年。時に扶餘の一族中に温祚なる者あり、南に下りて錦江畔の熊津(忠清道公州)に居る、熊津は錦江平原の中央にあり、形勝雄偉、以て覇を稱ふるに足る、乃ち馬韓を擊ちて亡し、國を建てゝ百濟と號へ、江上に城き石壁の周圍一萬三千六尺、其形半月の如し、半月城に都し國を建つる六百七十七年、義慈王に至り、唐及び新羅の同盟軍に破られ、花の如き宮女數百奔逃

朝鮮西南方の富源

木浦の開港

洛東江

辰韓
新羅

三國史に云ふ「甄萱猝入新羅王都時王與夫人嬪御出遊鮑石亭。置酒娛樂。賊至狼狽不知所爲。侍從臣僚及宮女伶官皆陷沒」

釜山

して江上の斷崖に登り、大巖の上より自から墜ちて死す、「落花巖」とは即ち是れ、所謂「雨冷風凄去國愁。巖花落盡水悠悠」たる處千古無限の詩料を遺して百濟茲に亡ぶ。要するに馬韓、百濟の歴史は錦江の歴史なり、豈に史料、詩料に富膽なるのみならんや、朝鮮西南方の富は全く此の江畔に集積し、而して木浦は全羅道西南の海上にあり、新に木浦を開港しゝは實に朝鮮南方の富庫たる錦江平原、靈山江平原の物産を利導せんとするもの。

朝鮮の南方は慶尙道あるを以て重し、慶尙道は洛東江あるを以て重し、朝鮮南方の政治、社交、産業の中心は全く江上にあり。古昔、辰韓、新羅の二國河系上に興り、新羅一千年間、覇業に、政治に、宗教に、建築物に、半島の最も光輝ある歴史は此の江畔に演出せられ、今日新羅の故都を訪ふ者は唯だ「三月初旬去踏青。蛟川花柳鎖冥冥。流觴曲水傷心事。休上春風鮑石亭」の句を歌ふに過ぎざるも、朝鮮歴世の政治家、文人、詩客は齊しく此所より起り、商業貿易の活動も亦た此所に敏捷を極む、釜山は實に江口附近の海上にあり、其の開港場として東洋に重きをなすは洛東江あるが爲めなり。

漢江
王逌
高麗松都
李成桂
朝鮮漢城
鴨綠江と對清問題
豆滿江と對露問題

八道の中央に漢江あり、漢江の沖積平原は眞個の天府正に朝鮮の中原たり、河系上の松嶽(京畿道開城府)に王逌なる者あり、百濟、高句麗、新羅三國を破り、半島を一統し、國を高麗と號へ、松嶽に都(「松都」)する四百七十四年、三十二世恭讓王、性柔懦積代の疲憊遂に腎すべからず、其將李成桂、豪俠にして聲望一代を籠蓋す、遂に自立して國を朝鮮と號へ、漢江の中游たる漢城に都す(我紀元二千五十二年)、現代の王室即ち是れ。半島の現在に於ける政治上、社交上の中心は此の江上に據在す。

鴨綠江は支那との境界に馳る、故に過去に於ける支那との交涉問題は常に此の江上を舞臺としき、豆滿江は露西亞との境界に流る、故に未來に於ける露西亞との交涉問題は定めて此の江上より湧出す。過去、現在、未來共に朝鮮の活動は六大江上にあり、朝鮮史は全然河の歷史なり、朝鮮を研究せんと欲せば、先づ其の河の形勢を指點せんか。

白頭山石磨刀盡鴨綠江水飮馬無。

男兒三十未平國、後世誰稱大丈夫。　南將軍

(八) 支那史

黃河の河系十萬方里、楊子江の河系十二萬五千方里、既に日本國の面積に九倍し、歐羅巴の列國、瑞典及諾威、丁抹、埃地利及匈牙利、獨逸、瑞西、伊太利、和蘭、比耳義、佛蘭西、西班牙、葡萄牙と地中海中の諸島嶼の合計面積に等しからんとす。人或は支那を以て亞細亞太陸の一隅に偏局せる一邦國となす、而かも廣袤の絕大なる、戶口の饒多なる、歷代治亂興廢の頻劇なる、之れを歐羅巴太陸全躰と比擬する何ぞ過當なりとせんや。春秋左氏傳、戰國史、三國史、南北史、五代史に於ける列國の分立抗衡に匹似す。唯だ支那の歐羅巴太陸の如くに長へに邦國個々に分立せずして遂に一邦國を構造するは前者は山嶽交錯縱橫して其間に溪谷を開き、此所に個々邦國を發達して自から分立自治に便宜なるも、後者は莽々たる黃河楊子江の兩河系無邊無涯、遂に一統渾融に利する所あるを以てのみ。夫の數邦國に分立するを以て西洋史に重を置き、一邦

黄河と楊子江

南北に流るゝ河と東西に駛る河

支那史は黄河楊子江兩河系の破綻史なり

黄河と楊子江と風土の殊差

國を構造するを以て支那史を輕看するは畢竟瞶々の徒のみ。

支那は黄河、楊子江の兩大河系延緣するを以て一統渾融に利あり、而かも兩河や、實に南北に流れずして、東西に駛る。蓋し南北に流るゝ河は、熱氣候の地方と寒氣候の地方とを結串し、異物産の間を連絡し、能く利害の衝突を調訂す、東西に駛る河に至りては然らず、唯だ同一の氣候、同一の物産、同一の利害を包容し得るのみ、遂に異風土の間を結串連絡する能はず、爲めに利害の衝突を調訂すべからず、故に支那や、歐羅巴太陸の如く長へに邦國個々分立せずして遂に一邦國を構造するも、機に臨み變に應じて黄河楊子江兩河系の間に利害の衝突を來たし、歷史上の破綻を時々瞥見す。支那史を立論せんとせば、先づ兩河系の風土を稽査せざるべからず。

黄河は支那北方の代表者なり、所謂「北方之强者居之」なり。楊子江は南方の代表者なり、所謂「君子居之」なり。「雁度寒雲。馬嘶古道。崇山峻嶺。陡開大陽。曠野平林。煙火攢簇。樵斧耕鋤隱約在目」と、是れ北地の太觀なり。「蝦房蟹舍。採菱捕魚小舟。蘆漾來往濃陰之下。柳堤花塢盡在春光蕩駘之中。水鄉人家。桔槔聲起。

黄河河系の風物

北人

牛背笛聲。兩々歸來。此耕田鑿井餘風」と、是れ江南の風物なり。黄河河系は窮盧の如き天蒼々として四際に低れ、極目千里、高粱を植え、日は高粱より出でゝ高粱に沒し、大行の山色微かに地平線を限りて餘嵐遠く中原を照し、會〻白楊の水畔に斑點するも、他に植物の看るべきなく、風物單調一樣、時に之れを破るものは土人の穴居のみ、氣候は純乎たる太陸的にして、無涯の黄風塵を捲きて朔北より來り、乾燥にして些の水分なく、流水黄濁、飲むべからず又た洗滌の用に供すべからず、故に百多の事物華潔ならず、清雅ならず、生産は勞力の寡單なるもの耕種の簡易なるものゝみを撰擇し、生民貧窶困厄し、「北部省城の殷繁は、南部一府城と比すべく、或は時に之より下るものあり。北部府城の繁庶は、南部一縣城と比すべく、北部縣城の繁庶は、南部一鎭と相比すべし」、既に此の如く自然に逆遇せらる、故に北人は意思强烈豪健にして容易に屈せず下らず、實行を主として想像力に乏しく、燕趙悲歌、事を斷ずるや爲す。有らずんば遂に已まず、骨相亦た長大にして隆準肉角、眼釣り眉昂がり、面貌黄黧にして鬚髯髦々、宛として北方之强を顯

揚子江河系の風物

表す。揚子江畔は坦々たる平原延縁すと雖も、江は古生紀、中生紀地層の間を流駛し、江岸時に懸崖斗壁を見、翠巒碧巌處々に點綴して、風物單調ならず、氣候亦た和煦潤濕にして草樹鬱蓊とし、生産饒多、加ふるに流水清洌なるを以て、百多の事物華潔に、家屋も雅趣多く、人物瀟洒纖巧に、且つ理想に富み、多感多恨、色白く、肉痩せ、雨眼細く平かにして、髪髯多からず、短身にして、音吐清朗なる處、正に南人の異面目を現示す。

南人

黄河河系の黄都

黄河、楊子江兩河系の風土や、甚だ殊差あり、其の歴史に殊差ある知るべきのみ。蓋し太塊上、原人の發生地は亞細亞太陸の中部にあり、漢族亦た崑崙山下の祖國を出で、楊子江上流は崇巒峻巌重疊するを以て之れを避け、地利上輙ち黄河の流に沿ひて東下し、歴代の帝王太抵は黄河河系に奠都す。

代	都	所在	黄河河系
太昊伏羲氏	陳	河南省陳州府	蔡河の岸にあり、蔡河は淤黄河に入る
三皇 炎帝神農氏	曲阜	山東省兗州府曲阜縣	泗水の南、洙水の北
黄帝軒轅氏	涿鹿	直隷省順天府涿州	拒馬河の右岸にあり、拒馬は白溝河に入り雄淀を經て白河に入る。古地圖を按ずれば這般の諸河は皆

少昊金天氏	窮桑	山東省兗州府	泗水の傍近
顓頊高陽氏	帝丘	直隷省大名府顓頊城	黄河の古金堤の傍近
五帝 帝嚳高辛氏	平陽	河南省河南府偃師縣	伊河の岸にあり、伊河は洛河に入り洛河は黄河に入る
帝堯陶唐氏	蒲坂	山西省平陽府	汾河の左岸、平水の北
帝舜有虞氏	安邑	山西省蒲州府	嬀汭水の傍
夏后氏禹	斟	山西省解州安邑縣	東永河の傍
殷	亳	河南省歸徳府	黄河、楊子江の間、淤黄河の南にあり
周	洛	河南省河南府洛陽縣	洛河の北即ち左岸
秦	咸陽	陝西省西安府咸陽縣	渭水の北即ち左岸
漢 西漢	長安	陝西省西安府長安縣	渭水の南即ち右岸
漢 東漢	洛	河南省河南府洛陽縣	前漢は四の方長安に都す故に西漢の名あり。後漢は東の方洛陽に都す故に東漢の名あり
三國の一 魏	洛	河南省河南府洛陽縣	東漢の末、魏の曹氏、呉の孫氏、蜀の劉氏、三國鼎立し、呉は楊子江下流の建業に都し、蜀は上流の成都に都す
西晋	洛	河南省河南府洛陽縣	前晋は洛に都す故に西晋の名あり。後晋は楊子江下流の建康に都す故に東晋の名あり
隋	長安	陝西省西安府長安縣	四晋亡びてより隋に至る二百七十二年間、東晋、宋、齊、梁、陳の五代興り皆楊子江中流の建康に都し、黄河河系の建都史は此間中絶す

代	都	所在
明 南宋	臨安	浙江省杭州府
江蘇省江寧府		所謂南京

（明統錄）

天都ある江南四具斷の支柳蒸隋柔る楚楊府す神口の百餘勝名那葉城お亦に成子江北六層ありに中八眼に十の渡はり於因王江恋十のりに十の禁酌文お森金り（献納に六上ミ隨寺兵へ留替り流人金國のに年に雖見、奨ざ多にら、流石去ゑ也なの燈埋金南す、ゑも、少羅し、の頭る江。心は旦。むの腹即の糧ミ雖仙は南燈前

故之ゑ右匹岸に金なきに隋鎮王お城す氣のゑ、低穴む口に

太宗の永樂十九延

揚子江河系の特色

揚子江河系は即ち是れなり。蓋し黄河河系に於ける王覇歴代の窮都せしは、南方に綿綿たる綺麗局勢清秀江南春暁の山を聴く如く、其の外界の現象に風動せられ規模雄大局勢荘濶、実に黄河系に據在せるの氣其間に窮歴代や、其の外界の現象に支那此の特色

揚子江河系の支那史

乾坤を一轉して揚子江河系に見んか。揚子江上に窮都せしむる者は、

代	都	所在
北京（大梁）	洛陽縣	河南省河南府洛陽縣
北京（大梁）	長安縣	陝西省西安府長安縣

（年晉滅洛陽に河陽により亡ぶ、後梁に却かされ都た）

黄河系の支那史

に黄河系に據在せるも、其の氣宇は、尚ほ北京の初め故土金に北方に流亡の子時、江南四具斷の支柳蒸隋柔る楚楊府す神口の百餘勝名那葉城お亦に成子江北六層ありに中八眼に十の渡はり於因王江恋十のりに十の禁酌文お森金り（献納に六上ミ隨寺兵へ留替り流人金國のに年に雖見、奨ざ多にら、流石去ゑ也なの燈埋金南す、ゑも、少羅し、の頭る江。心は旦。むの腹即の糧ミ雖仙は南燈前

故之ゑ右匹岸に金なきに隋鎮王お城す氣のゑ、低穴む口に

太宗の永樂十九延

老子莊子の學風氣の離騷、浮屠の法談、程朱の學亦た啓發す

北人將た北狄と南人との確執

を展ぶるに似、所謂「六朝の雅致」、「晋時の清談」、「南朝の風流」、「南宋の纖巧」、「明代の瀟洒」、皆此所にあり、夫の建安七子の文、駢儷四六の躰、此間に啓發せしもの自然たり。君や若し夫れ楊子江河系歷史の眞面目を悟了せんと欲せば、月明秦淮の畫樓上、水晶簾外に琵琶を彈く人に向ひて問へ、琵琶を彈く彼女自身こそ楊子江河系歷史の權化なれ。

黃河河系と楊子江河系と百多の風土、歷史に太差ある此の如し、故に兩々の間動もすれば輙ち相容れず、北人南人と抵排し、破綻又破綻せしもの偶爾にあらず。既に然り、支那二十二代歷史の多分は北人將た北狄と南人との間なる確執史なり、夫の「書足以記姓名而已。劍一人敵不足學。學萬人敵」と、乃ち呉中の兵八千人を擧げて秦を攻めたる項羽の英爽、「倉卒蕪蔞亭豆粥。滹沱河麥飯」を嘗め、荆天棘地の間を衝きて漢の遺業を恢復せし光武の俊邁より、張睢陽の齒、顏常山の舌、胡澹庵の文、岳飛の武、文天祥の節、方孝孺の義、鄭成功の俠に至るまで、畢竟是れ皆北人將た北狄と南人との確執中に發せる意氣に過ぎず。然れども黃河河系の沖積平原は直ちに楊子江河系

支那の一統的傾向

河は境界を作す能はず

隋の一統

の沖積平原に連り、他の山脈縱橫して列國獨立に適宜せるが如くならず、要するに山は界國分治を促すも、河は遂に境域藩籬を作す能はず、夫の陳の孔範が「長江天塹。豈能飛渡」とて只管楊子江に恃賴し隋兵の來るを冷笑せしも、言未だ畢らざるに隋の將軍賀若弼は廣漢より江を渡り、韓檎虎は橫江より夜渡り、進みて陳の都建康(南京)に入り、陳主自から妃嬪と井中に投じて國玆に亡び、隋遂に南北朝の列國を混同して支那を一統せしが如き即ち是れ。隋天下を獲るや、通濟、永濟の兩渠を開き、南は楊子江南より北は黃河北に到り、即ち江河を縱絕して南より北に流駛する人爲の一大河系を鑿ちたるが爲め、江河兩系は自から連絡し來り、玆に愈々益々一統的の趨向を致しぬ、特に隋の南北兩派の學を併せ取りたるが如きは最も江河兩系開化の一統を促したる所、蓋し東漢の鄭玄は孟子以後の大儒と仰望されたる者、後魏の王肅起りて之れと拮頡するや、學風南北兩派に區劃し、南北朝の頃に至るや、北方には深厚縝密なる鄭玄等の學盛行し、南方には簡易綺靡なる王肅等の風自から好尙に投じ、爲めに南北間の思想界に巨

唐の一統

溝を劃し、黄河河系と揚子江河系と人々の習氣趣味を頻りに分隔せしも、其の勉めて南北派を併せ取りたるは、南北を連絡する大運河の開鑿と共に、最も一統の氣運を呵成せしもの唐興るや、隋の遺業を繼紹し、兼ねて新鋭創業の風雲に際會し、愈〻益〻一統の氣運を勃發し、太宗英邁の資は早くも思想界の一統は即ち天下を一統する第一策たるを看破し、首として南北學風の折衷を計り、孔穎達、顔師古等に命じ五經正義を撰ばしめ、易は王弼の注、書は孔安國の傳、詩は毛萇の傳、禮は鄭玄の注、左傳は杜預の注を取り、併せて諸家の一疏釋を加へ、天下をして據る所を知らしめたるより、思想界の根柢茲に鞏立す、後幾何ならず、陳子昂、楊子江の上游に生れ、黄河河系に倦留し、唐初の四大家、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王)が尚ほ未だ南文(六朝以來の駢儷四六文)の臭味を洗脱する能はざるを屑しとせず、慨然獨り自奮して北人の思想(周漢時代の古文、即ち黄河河系の思想)を此間に注入せんと銳意し、李白、楊子江河系の上游に生れ、黄河河系に來りて發達し、其の詩たる、才分高く、趨向正く、能く建安以後の綺麗を斥攘し八代の衰を起すを以て

五代

宋

元

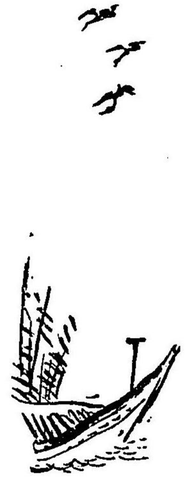
自から任し、韓愈(字退之)江河兩系の中間地に人と爲り、淮南人を以て黄河河系の長安に上り、雄厚博大の才を揮ひて古文を復興し、柳宗元(字子厚)黄河河畔より起りて之れと志を同くし、足より先き音樂の如き、太宗の時、祖孝孫出でゝ南北の兩樂を折衷し、且つ古樂を酌取して大唐の雅樂を制定し、書風も亦た虞世南、歐陽詢、顔眞卿、柳公權、李北海の徒起りて能く南北兩派を包容し、別機軸を出して各〻一家を作し、是に至りて有形上に、無形上に、黄河河系と揚子江河系との渾融一統は斐然として大成す、蓋し支那四千年の歷史中、江河兩系の微妙に調和神契して一國となり一國家となり一社會となりたるもの唐を以て第一に推す、唐亡びて五十二年、五代列國の亂あり、梁、唐、晋、漢、周、北漢は黄河河系に起り、吳、前蜀、楚、荆南、後蜀、南唐、湖南は揚子江河系に國を建て、群雄所在に割據し、虎呑狼噬、江河兩系の大破綻を來す、宋興りて五代列國を一統し、曾らく江河兩系を渾融せしも、長へに之れを保全するの大力なく、北狄たる契丹、金、元の爲めに交も〳〵窘蹙せられ、國亡びて、元之れに代はり、楊子江

明

清　黃河河系と露西亞的　楊子江河系と英吉利的

河系の民人は屏息して生氣なく、詩人の金陵(南京)を過ぐる者、「玉樹後庭花不見。北人租地種茴香」の感懷あり。既にして明楊子江上より起り、北狄たる元を倒し、稍々江河兩系を一統せしも、僅に兩系の破綻を彌縫するに過ぎずして眞成に渾融し得ず、文物特に見るに足るものなく、後遂に北狄たる清に亡さる。清國を建つる今に二百四十年、而して遂に江河兩系の混同を大成せず、將來或は黃河河系の露西亞的となり、楊子江河系の英吉利的と化成するや未だ知るべからずとなす。「支那史」を立論し了り、是に至り筆を擱き、西望して太陸將來の風雲を窺ふこと良久しく、海を隔てゝ其の前途をトすること爾り。

雁落平沙一雨收。淡烟日斜荻花洲。
憑誰與作王摩詰。爲寫江南水墨秋。
秋日渡江　宋黃極



支那の三大河の文學

黃河、楊子江の文學の殊差

黃河

雄渾懸壯

雄渾の中、情致あり

愁怨の情あるも亦た豪宕

今を傷み古を

(九) 支那の三大河の文學

支那の黃河、楊子江の開化や、個々各々殊差ありとせば、個々の文學亦た各々殊差なかるべからず、而して果然之れを視る、請ふ先づ兩大河江に交渉せる詩賦、歌謠を諷誦せんか。

(一) 黃河

白草原頭望京師。黃河水流無盡時。秋天曠野行人絕。馬首東來知是誰。出塞行　唐　王昌齡

黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。涼州詞　王之渙

一上高城萬里愁。蒹葭楊柳似汀洲。溪雲初起日沉閣。山雨欲來風滿樓。鳥下綠蕪秦苑夕。蟬鳴黃葉漢宮秋。行人莫問當年事。故國東來渭水流。咸陽城東樓　許渾

經過此地無窮事。一望凄然感廢興。渭水故都秦二世。咸陽秋草漢諸陵。天

空絕塞聞邊鴈。葉盡孤村見夜燈。風景蒼蒼多少恨。寒山半出白雲層。成暘

悵古

樓外風煙接紫垣。樓頭客子動歸魂。蕭蕭髮鬢驚秋色。狼藉麻衣涴酒痕。天

塹波光搖落日。太行山色照中原。誰知滄海橫流意。獨倚牛車哭孝孫。汴梁

雜詩

孤亭突兀揷飛流。氣壓元龍百尺樓。萬里風濤接瀛海。千年豪傑壯山邱。疎

星澹月魚龍夜。老木清霜鴻鴈秋。倚劍長歌一杯酒。浮雲西北是神州。橫波

亭

荊門城上月婆娑。玉笛誰爲出塞歌。君自客中聽不得。秋風吹落小黄河。寄

元美

野曠天低日欲西。北風吹雪鴈行低。黄河波口行人少。一片寒沙沒馬蹄。渡

黄河

暮雲黯澹壓邊樓。雪滿黄河凍不流。野燒連山胡馬絕。何人月下唱凉州。塞

上曲

悵ふ、而かも規模雄大

悲涼蒼莽、沈鬱豪健、北方之強の氣象あり

突兀橫絕、遺山自ら一北人不拾江西唾一と謂ふ、眞然

情緒潤遒

氣局開闊

慨然遠望

武關は分水嶺の絕頂にあり

と。而かも一たび分水嶺を超え、

遠別秦城萬里遊。亂山商下入商州。關門不鎖寒溪水。一夜潺湲送客愁。宿

武關

の如く、

(二) 楊子江

に入るや、即ち

江南可採蓮。蓮葉何田田。魚戲蓮葉間。魚戲蓮葉東。魚遊蓮葉西。魚戲蓮葉

南。魚戲蓮葉北。江南 漢樂府

桃葉復桃葉。渡江不用楫。但渡無所苦。我自來迎接。桃葉歌

晉王獻之

汀洲採白蘋。日落江南春。洞庭有歸客。瀟湘逢故人。故人何不返。春花復應

晚。不道新知樂。只言行路遠。江南曲

梁柳惲

茨菰葉烟別西灣。遂子花開猶未還。妾夢不離江上水。人傳郎在鳳凰山。江

南行

唐張潮

當時の晉人宛如たる末代の羅馬人

情思回折

黄河にありては發し得ざる處

爽俊

太白飄逸、而かゝる句あり

自から楊子江上の羈情

掻漉

悲婉而かも温雅

伏仰感慨

惑情は沅湘の水より深し

萬里辭家事鼓鼙。金陵驛路楚雲西。江春不肯留行客。草色青青送馬蹄。送李列官之涧州行營　劉長卿

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。蘇臺覽古　李白

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。楓橋夜泊　張繼

九月湘江水漫流。沙邊唯覺月華秋。金風浦上吹黃葉。一夜紛紛滿客舟。宿湘江　戎昱

傷心欲問前朝事。唯見江流去不回。日暮東風春草綠。鷓鴣飛上越王臺。南遊感興　竇鞏

吳王舊國水煙空。香逕無人蘭葉紅。春色似憐歌舞地。年年先發館娃宮。吳城覽古　陳羽

盧橘花開楓葉衰。出門何處望京師。沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時。湘南即事　戴叔倫

人事蕭條、江山俯仰、感慨無限

多感なる樂天、如き人、天涯の邊に流謫せられ、地角の邊に謫せられ、合客を送るの際、萬里長安の娼妓を聞くや、女郎、亦淪落の人、人、相憐れむ、情、境、微妙に調、以て合し來り、以て此の大曲を產む、千古の絶唱、而も脚色に映して參林に發せしむるは、多趣なる舞臺の實に最も趣ある楊子江頭にあるのみ以てのみ

清人陳、全體を佛蘭西語に

偶向江邊採白蘋。還隨女伴賽江神。衆中不敢分明語。暗擲金錢卜遠人。江南曲　于鵠

山圍故國周遭在。潮拍空城寂寞回。淮水東邊舊時月。夜深還過一女牆來。石頭城　劉禹錫

海陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移舟相近邀相見。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲。未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思。似訴平生不得志。低眉信手續續彈。說盡心中無限事。輕攏慢撚抹復挑。初爲霓裳後六么。大絃嘈嘈如急雨。小絃切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑。幽咽泉流水下灘。水泉冷澁絃凝絕。凝絕不通聲暫歇。別有幽愁闇恨生。此時無聲勝有聲。銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀鎗鳴。曲終收撥當心畫。四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。沈吟放撥插絃中。整頓衣裳起斂容。自言本是京城女。家在蝦

飜譯す、佛京の交際社會噴嚏として傳誦す、自から佛人の好に適ふもの、正に是れ楊子江文學

楊子江文學の模範

蘷陵下住。十三學得琵琶成。名屬敎坊第一部。曲罷長敎善才服。粧成每被秋娘妒。五陵年少爭纏頭。一曲紅綃不知數。鈿頭銀篦擊節碎。血色羅裙翻酒汚。今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走從軍阿姨死。暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。商人重利輕別離。前月浮梁買茶去。去來江口守空船。遶船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼妝淚紅闌干。我聞琵琶已嘆息。又聞此語重唧唧。同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。潯陽地僻無音樂。終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕。黃蘆苦竹遶宅生。其間旦暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜。往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。嘔啞嘲哳難爲聽。今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。感我此言良久立。卻坐促絃絃轉急。凄凄不似向前聲。滿坐重聞皆掩泣。座中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。琵琶行　白居易

煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。金谷園　杜牧

吳中の情、吳中の景

凄婉人を悶絕す

黃河河上故人に別るゝ處と異なり

山谷の此詩、一部楊子江沖積層平原の地理書

黃葉、水流、風急、人語、鷄聲合せ來る、叫囂なるに似て而かも清穩眞畫景

情韵雙び到る

蓮渚愁紅蕩碧波。吳娃齊唱採蓮歌。橫塘一別千餘里。蘆葦蕭蕭風雨多。夜泊永樂有懷　許渾

江雨霏霏江草齊。六朝如夢鳥空啼。無情最是臺城柳。依舊煙籠十里堤。過金陵　韋莊

楊子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。數聲風笛離亭晚。君向瀟湘我向秦。淮上與友人別　鄭谷

十月江南未得霜。高林殘水下寒塘。飯香獵戶分熊白。酒熟漁家擘蟹黃。橘摘金包隨驛使。米舂玉粒送宮倉。踏歌夜結田神社。遊女多隨陌上郎。戲詠江南風土　宋黃庭堅

黃葉西陂水漫流。蘧篨風急滯扁舟。夕陽暝色來千里。人語鷄聲共一邱。泊吳門　寇國賓

數間茅屋水邊村。楊柳依依綠映門。渡口喚船人獨立。一蓑煙雨濕黃昏。吳門道中　孫覿

南歸北去路茫茫。不是行人也斷腸。可惜湘江春夜月。落花時節照離觴。清

風塵外の趣

湘驛送王柳州南歸　范成大

來時秋雨滿江樓。歸日春風度客舟。回首荊南天一角。月明吹笛下楊州。

南別宜制香東歸　鄭震

骨董珊瑚

畫欄目斷楚雲西。芳草連天客思迷。家在江南煙雨裏。落花時節杜鵑啼。

春雜興　葛起耕

三山雲海幾千里。十幅蒲帆掛秋水。吳中過客莫思家。江南畫船如屋裏。蘆芽短短穿碧沙。船頭鯉魚吹浪花。吳姬蕩槳入城去。細雨小寨生綠紗。我歌水調無人續。江上月凉吹紫竹。春風一曲鷓鴣詞。花落鶯啼滿城綠。過嘉興

姑蘇城外短長橋。煙雨空濛又晚潮。載酒曾經此行樂。醉乘江月臥吹簫。煙雨中過石湖　倪瓚

楊子津頭風色起。郎帆一開三百里。江橋水柵多酒壚。女兒解歌山鷓鴣。武昌西上巴陵道。聞郎處處經過好。櫻桃熟時郎不歸。客中誰爲縫春衣。陌頭空問琵琶卜。欲歸不歸在郎足。郎心重利輕風波。在家日少行路多。妾今能

楊子津、青郎、頭に在り、故に名あり、黒紅の字あり、一に江橋の碧紗の如し、せんと。

風塵外の趣

匣門又た波淮即事　楊子江

點點衝帆過。雙雙掠水流。燕子飛上船頭。人不得。間對綠蓑衣。

骨董珊瑚

風景を眺むるのみならず、亦た理想の題目

句あり

使烏頭白。不能使郎休作客。憶遠曲　明高啓

多致

館娃宮外繫蘭橈。何處鐘聲月上潮。露落臺空春樹暗。隔江漁火照楓橋。夜宿姑蘇

穠致あり、其個の彩筆、逼り來りて人を惱殺す

湖州溪水穿城郭。傍水人家起樓閣。春風垂柳綠軒窓。細雨飛花濕簾幙。四月五月南風來。當門處處菱荷開。吳姬晝舫小於斛。蕩槳出城沿月回。拭浦浪深迷白紵。有時隔花聞笑語。鯉魚風起燕飛斜。菱歌聲入鷺鷥渚。湖州樂　孫蕡

風神天然

日暮東塘正落潮。孤蓬泊處雨瀟瀟。疎鐘夜火寒山寺。記過吳楓第幾橋。夜雨題寒山寺寄西樵禮吉　清王士禛

清脉

水驛迢遙望不分。愁心落葉共紛紛。扁舟一夜搖江月。入夢吳歌斷續聞。吳江舟夜　汪洋度

情致纏綿

六代江山久寂寥。勝朝宮闕亦湮銷。秖餘燕子憐春色。依舊銜泥過內橋。秦淮雜詠　沈德潛

清麗

垂楊垂柳滿長堤。薄霧輕煙晚更迷。三十六灣春草綠。鷓鴣聲裏夕陽低。湘

何等の清澗　中雜興　　王元勳

一幅水墨の畫　臺城秋草暮雲殘。六代興亡雁影寒。無限傷心金粉地。憑君寄出與人看。送玉石谷遊金陵　　陳珊

幽艷人を動かす　船頭風靜白鷗雙。萍葉隨潮也渡江。沽酒自尋京口驛。六朝山影在蓬窓。晩泊鎭江京口驛　　張問陶

媚雲藍采句小影　桃葉桃根付玉簫。秦淮秋影上寒潮。分明丁字簾前水。一片斜陽送六朝。自題雲藍采句小影　　陣文述

娟淨愛すべし　施家灘上泊舟時。落盡楊花聽子規。山靜江深天在水。一痕新月小於眉。泊施家灘　　日本竹添光鴻

岷江

楊子江に交渉せる詩賦、歌謠は此の如し。江の上游なる大支流に

(三)岷江

あり。岷江や滔々北より來り、北東には劒門の塞あり、東には巴山の群嶺透迤として曳き、南には峩眉の群峯突兀として立ち、西には大雪山系奔馬の如くし、山水襟束の間、一大野の蒼莽として開き、風土に、氣候に、歷史に、社會に、獨立の別天地を作すものを蜀(四川)となす。既に獨立の別天地を作す、其の文學も亦た別天地を作し、自から青山綠水、白雲黃樹に風化せられ、神仙の氣ありて人間の染癖少く、而して蜀以著作衰漠唐宋。風氣之盛。天下翕然宗之。雖千百年迄於今不衰」と云ふ。夫の漢には子虛上林賦を著はし武帝をして「飄飄有凌雲意」と品評せしめたる司馬相如の如き、甘泉、河東、校獵、長楊の四賦を奏し太玄經を著しゝ揚雄の如きを孕み出し、唐には「謫仙人」てふ李白を孕み出し、當時杜甫、白居易(樂天)、羅隱、鄭谷の諸人長へに此間に流寓し、宋には「晴空鳥跡。水面風痕。自有天地以來一人而已」てふ蘇軾(東坡)及び蘇氏一家の如き、「莊之後千有餘歲の一人たる張愈の如きを孕み出し、仙風道骨の黃庭堅(山谷)亦た久しく俺留し、明には青蘿山に隱れ「人不見其面十三年」てふ宋濂を孕み出し、清には禪門の大有德たる破山禪師を孕み出したるが如き即ち是れ。試みに此間の風土を咏ずる一二を吟ぜんか、

蜀　　都曲

岷江文學の特色　錦水近西煙水綠。新雨山頭荔枝熟。萬里橋邊多酒家。遊人愛向誰家宿。成　　張藉

岷江の文人

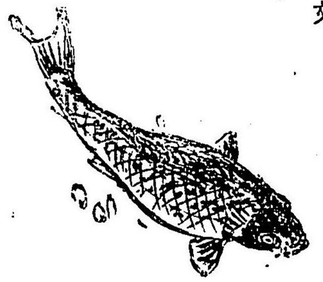
二詩是れ蜀中の地理書

馬頭春向鹿頭關。遠樹平蕪一望閒。雪下文君沽酒市。雲藏李白讀書山。江樓客恨黃梅後。村落人過紫芋間。堤月橘煙好風景。淡庭無事不征蠻。蜀中作　鄭谷

蜀の四圍や、山嶺重疊、中に大江汪洋として屈折す、是を以て江上より蒸上せる多量の水氣は、四圍の山嶺に撞撃し、縹渺として白雲となり、凝結して陰雨となり、七月五日六日七日皆雨。自入蜀雨常居十之九。詢之。曰。每歲夏天陰雨連綿。范記云。蜀中無梅雨。未必然也。)と、實にや蜀中の文學は、宛として雲の如く雨に似たる氣象あることを。

萬壑樹參天。千山響杜鵑。山中一半雨。樹杪萬重泉。漢女輸橦布。巴人訟芋田。文翁翻敎授。不敢倚先賢。梓州李使君　唐　王維

灩澦如堆瞿塘深。魚復陣圖江水深。大昌鹽船出巫峽。十日沂流無信音。夔州竹枝　宋　范成大



（一〇）西洋史

白哲人種の國を述て初めて儼然たる史紀を後昆に垂るゝものを埃及（エヂプト）となす。埃及はナイル河の下游にあり、河は亞弗利加太陸の中心より來り、歲歲月時を定めて汎濫し、所在に膏腴なる沙泥を沖積す、是を以て土味肥沃を極め、復た糞養を要せず、棗樹自然に亂生して其の果實は民人の常食料に供へ、加ふるにドゥーラと稱ふる黍は、寡單なる器械と勞力とを以て播種の一に對する二百四十の收穫を博し、生計の經費爲めに低廉に、昔時一小兒を壯年まで成育するに二十ドラマ即ち日本銀貨六圓を要するに過ぎざりしとなん（千九百年前埃及を旅行せし希臘史家デオドルス・シクールスに據る）。太古民人の此所に孳殖して、一社會を構造せしもの偶爾にあらず。既に然り、食料は法外に低廉なり、故に民人は法外に孳殖し、隨て勞力低廉に且つ餘剩あり、是を以て太古の建築物たる、夫の巍然天を衝くの三角塔（ピラミッド）に、半身の九地に埋却せる女神（スフィンクス）像に、突乎たる石柱（オベリスク）に、巨濶なる石殿に、魁偉なる刻像に、皆瑰麗詳雅ならず

棗樹（デート・パーム）　ドゥーラは一株に四五個の穗を生じ、一穗に穀三千を結ぶことあり

勞力の過剩と大建築物

バビロニヤ

チグリス河とユーフラーツ河

所謂「天に達せんとするバベルの高塔」はバビロニヤ人の建つる所

と雖も、齊しく雄大跌宕若くは壯宏崇高にして、今日此間を低徊する者をして轉た肅敬と畏驚の念を勃發せしむ。這般の建築物に使用する一石にして重量四十三貫餘に至るものあり、運搬するに二千の人夫を三年間使役せしことあり、以て民人の過剩と勢力の低廉なりしを徵するに足る、而して是れ皆ナイルの一水に總因し來り、ナイルなくんば埃及なく、又た世界最古の大史紀なし、眞個に「埃及はナイル河の恩賚なり」。

太古の邦國中、埃及に亞ぐをバビロニヤとなす。バビロニヤは、波斯灣に注入する雙兒河チグリス、ユーフラーツの沖積せし地層上に國を建つ。チグリス、ユーフラーツの兩河系は四千餘年後の今日に至るまで世界の寶庫と稱へられ、土味の肥沃なる古今に冠絕し、渾圓球上、麥の土生なる個所は獨り這般の河系上のみ、加ふるに棗樹は太古より宇內第一等の名あり、其他葡萄に諸果物類に饒々として生產し、河水亦た百多の魚類に富む、バビロニヤの太古富雄を以て鳴り、星學に、建築物に、貿易航運に、金、鐵、寶玉の使用に、大發達を作したるもの自から其故あり。既にしてアッシュリヤなるも

アッシュリヤ

たる、文學は埃及に及ばず、文學理學はバビロニヤに及ばざるも、建築及び其他の開化に至りては、太古の世界に獨歩するのみならず、今世の者も及ばざる所あり

後バビロニヤ

懸空の庭園

後バビロニヤの人文

のチグリス河の中游に興り、河畔のニチヴェに宏濶無邊なる都城を起し、遂にバビロニヤを亡ぼし、基督紀元前一千二百五十年より仝六百二十五年に至る六百年の間、唯一絕大の帝國として覇圖太古の世界を蓋ひ、其の民人は當時早く玻璃及び透鏡を發明し、弧の原則を悟了し、隧道、水道、排水道の開鑿術を知悉し、金屬の鑲嵌、鍍キ、光滑の方法に巧練に、槓桿、滑車、轉機の仕用に習熟し、特に建築法に至りては、未だ希臘式の太妙に達せずと雖も、一種絕特なるアッシュリヤ式を造詣し、壯大、威儼、放膽、豪宕の四力を兼ね、獅子狩りなど如き雄快奇健なる圖畫を浮彫にして建築物に刻しき。紀元前六百二十五年、バビロニヤ亡國の人民、アッシュリヤを滅して獨立し、復た國をチグリス、ユーフラーツの兩河系に建つ、是れを後バビロニヤとなす。國都バビロンは今日其の遺趾を測定するも宛如我が東京市の廣袤に十倍し、王子ブカドチザル盛んに土木を興し、飛閣輪奐其勝を極め、所謂「懸空の庭園」の如き世界七奇の一たり。後バビロニヤは星學、數理學の啓發を以て名あり、後世希臘人の如きすら理學に至りては此國より知得せりと自白

波斯　黑水

ハルース河

波斯の人文

信度河

樂殺水

するに至る、貿易亦た大に進暢し、「通商國」、「商人府」として遠近に鳴り、其の特有製造品たる花氈、綿紗を輸出し、以て大食(Tazi 又 Tajik、亞拉比亞)の乳香、フヱニキヤの錫、銅、身毒(印度)の眞珠、寶玉、遠東諸國の絹、羊毛、金、象牙等と交換しぬ。建國八十七年、遂に波斯人の爲めに亡さる。

波斯はチグリス河源、ザグロス山系の東麓に開展せる黑水河系の平野より起り、王クールス(サイラス)武幹あり、紀元前五百五十八年即位の初め、メヂヤの古王國を亡ぼし、雄名大古に薫灼す。波斯の西にレデヤ國あり、ハルース河(今のキヂル・イルマック河)を以て境とす、而かも河は到底境域を作すの能はざるもの、クールス擧ちてレデヤを破り、舉げて其の國土を幷有す、乃ち西顧の患なきを以て、頻りに東の方安息(Asiak 又 Parthia.)、大夏(Dalia 又 Bactriana.)、康居(Sogdiana.)を平げ、領土遂に信度河(インドゥス河)に達し、北は大宛(今の露領中央亞細亞 Fergiana 即ち費爾干)を略取し、進みて藥殺水(希臘語の Jaxartes、今の Sir Dariu.)に到り、太古の世界に隨一の大帝國を恢弘す。蓋し波斯人はアッシュリヤ、バビロニヤの人文を繼承し、且つ自己の國粹

アッシュリヤの人文支那に入る

波斯の宗教支那に入る

を以て之を陶冶鎔鑄し、間ゝ一頭地を出し、宮殿石室の構造、彫刻の如きは、埃及式、アッシュリヤ式の未入室より希臘式の太妙に到る渡過の心影は歷々として徵し得。想ふにアッシュリヤの人文は波斯之れを繼承し、波斯の羽威膨脹と共に安息、大夏、大宛の諸國之れを輸入し、安息、大夏、大宛の間より之れを支那南北朝の魏、齊、周に傳へ、遂に隋、唐に波及せしもの、山東省紫雲山武梁祠なる石刻の古物中に歷然たるアッシュリヤ式のもの現存し、ネストリヤ派の基督傳道師の唐に入り布敎せし際に建立せし基督敎の石碑も亦た此の祠中に儼立するが如き(明治廿六年中美術探究の爲め支那に旅行、文學士岡倉覺三氏に據る)遼東半島海城南門の壁上に唐代の遺物としてアッシュリヤの獅子狩りを浮彫りにせしものを見るが如き(明治二十八年中人類學探究の爲め遼東半島に旅行せし斯學專攻家鳥居龍藏氏に據る)、隋代の古製造として日本大和法隆寺の「四天王紋錦旗」にアッシュリヤの獅子狩りを織り畫き、孝謙天皇の御褥にアッシュリヤの球の花の變形を織り畫きたるが如き(人類學專攻家三宅米吉氏及び千住製造所技師工學士大竹多氣氏に據る)炳然として、アッシュリヤ式の支那に傳播せしを悟了し得。蓋し波斯の「拜火敎」は「祆敎」と稱へ

アッシュリヤ派の基督教支那に入る

南北朝の世、業既に魏、齊、周の間に盛行し、唐に入り太宗の貞觀五年(西暦六百三十一年、佛教の百濟より日本に傳來せし八十年後)、長安に祆寺を立てて波斯寺と名けたることあり。摩尼教も亦た拜火教の一種にして、祆教に先ちて早く支那に入り、遂に唐憲宗の元和二年(西暦八百七年、白樂天全盛の時代)回鶻(ウヰグル)人(Uigur、今の中央亞細亞に邑居せるKirghiz民族の祖先)の請を許し、河南府大原府に摩尼寺を建てたることあり。基督教亦た上代より支那に入り、唐太宗の貞觀十年(西暦六百三十六年)ネストリヤ派(アッシュリヤ派)の傳道師阿羅本(チロブン)等長安に來り、太宗特に房玄齡をして之れを迎へしめ、大秦寺(支那にては羅馬を「大秦」と呼ぶ)を立てゝ其經を飜譯せしむ、所謂「景教」是れなり、尋で唐一代の間は此教大に盛行し、郭子儀の如き地を捨てて景寺を立つるに至れり。アッシュリヤ、波斯の思想文物は支那に入り、支那の思想文物も亦た西域の諸邦に傳はり、西洋史と東洋史との連絡は緊然として裂くべからず、チグリス、ユーフラーツ二水と黄河、楊子江二水とは無形上に混同合流する此の如きものあり、而かも、歐米の史家なる者、西洋

東西歴史の連絡

大史筆の材料

史と東洋史との間に劃然たる畛域を築き、以て兩々を別々にし來る、何等迂疎の見ぞや、誰か千秋の大史筆を揮ひて東西の二水を混同合流するの新識見を發表する者ぞ、日本の史家が名を世界に成すは此所にあり、予輩志餘ありて力足らず、一念此所に到る毎に感慨無量。

河湖地名考

參考

漢書、隋書、唐書、大唐西域記、北史、元史、西域見聞錄、清人の著述及び釋典等に散見する河湖の現名

アム・ダリヤ河

◉嬀水(漢書)　烏滸水(隋書)　縛芻(大唐西域記)……Amu Daria(波斯語、daria は「河」の義)、Oxus(希臘語)、Vak-shu(印度語)、Ak-su(キルギヅ語「白水」の義、蓋し"Oxus"、"Vak-shu"「縛芻」は皆Ak-suの轉訛)、Jihun(亞拉比亞語)。

シル・ダリヤ河

◉藥殺水(北史)　賽芬(元史)……Sir Daria(波斯語「魁首の水」の義)、Jaxartes(希臘語、「藥殺」は蓋し"Jaxartes"の轉訛)、Sihun(亞拉比亞語「賽芬」は蓋し"Sihun"の轉訛)。

ゼラファッシャン河

◉那密水(唐書)……Zerafshan(「金の分配者」の義、沙金あると灌漑の利あるに因る)。

タラス湖

◉恒邏斯(唐書)……Talas。

ロブ湖

◉鹽澤(漢書)　羅布湖(清人)……Lob Nor(羅布湖(ロブノル)即ち是れ)。

ガンヂス河

◉恒河　恒伽　强伽　殑伽　競伽　福水……Ganges(普通語)、Ganga(印度語、「恒

河」「恒伽」「恒河」「殑伽」「殑伽」は並し“Ganga”の轉訛)°

◉信•度　信•河　辛•面　新•面　臏•河(唐書大唐西域記)　臏•河……Indus又Sind(梵語「信度」「信河」「辛面」「新面」は並し“Sind”の轉訛)′Sindhou(西藏語)′Sidda又Childa(藏古語)°

◉◉斡•羅•得•河(唐書)……Euphrates(梵語)′Shatt el Suwari(亞拉比亞語)′

◉◉阿•得•水……Volga(梵語)′Atel(「阿得」は並し“Atel”の轉訛)°

◉◉北•海(漢書臨海唐書)……Lake Baikal°

◉◉西•海(漢書)……Lake Balkash 或はAral Sea(並しLake Balkashも近し)°

◉◉花•剌•子•模(元史)……Aral Sea°

◉◉阿•勒•沈•拉(清人)……Lake Ala Kul(キルギス語「雜色なる海」の意)°

◉◉熱•海　特•穆•爾•圖•泊……Lake Issik Kul(キルギス語「暖湖」の義故に漢人「熱海」と稱ふ′Temurt Nor(藏古語「特穆爾圖泊」即ち是れ)°

◉大•龍•池(大唐西域記)　図•格•達(釋典)　哈•剌•庫•爾(清人)……Kara Kul(キルギス語「哈剌庫爾」即ち是れ)°

漢書の「郁�feng超°狙甘奕°使大秦(東羅馬)°抵條支(Tajik.)°臨大海°欲度安息(Parthia.)西•海°船人語奕曰°海水廣大°往來者°逢善風°三月乃得度°若遇迅風°亦有二歲者°」とある「西海」はLake Balkash又はAral Seaにあらずして實し今の地•中•海°

し二河の行路に沿ひつゝ順ひつゝして茲に雄魁洪濶たる帝國を挾弘せしゝ頻

羅巴に蹈跼せし呼得(Goths)′スラヴ等の諸民族を征服し只管二河に沿ひて東下し以て東部歐

ヂニール′日耳曼の各民族を裁定し多•瑙•河に順ひて東下し以て東部歐羅巴の中原に割據せしゝ頻

威勃々遂にラ•イ•ン•河に沿ひて北下し以て歐羅巴の中心の大河たるチ•ベ•リ•ス•河の邊畔を根據地となし羅馬•を攻略し屢ゝ其の都府を侵掠し

羅馬•は伊太利半島の一國にして初めアルカデヤ二國は「ア•ル•フ•ヌ•ス」河に特瓶して獨立せしも這般の變ずるに希臘•ス•パ•ル•ヒ•ニ•ヤ•リ•ド•に開

ラ•タ•は「ト•リ•ニ•ヤ•ウ•ラ•タ•ス•」に立並し其他アエトリヤ國はラ•コ•ニ•カの首都ラ•ケ•ダ•ヘ•ヌ•ア•ル•カ•デ•ヤ二國の首都ア•テ•ナ•ニ(所謂雅典)は「ケ•フ•ヒ•ソ•ス•」河上に迄ち國の盟主なす羅馬•の如きに至れり

希臘•は列國時代に根據地の一なりし羅馬•は列國時代に根據地の一なりし

希臘•は列國時代に根據地の一なりし羅馬•は列國時代に根據地の一なりし

なり三多島迄の行路イ

なり三多島迄の行路ロ

イ　ンデュス河
ロ　ユーフラテート
ハ　カスピ海
ニ　アラル湖
ホ　バイカル湖
ヘ　バルカシ湖
ト　アラル湖
チ　イシク・クル湖
リ　カラ・クル湖

なり四海は地中海

希臘

お續希臘羅馬は列國時代に根

の、知り得たり羅馬史も亦た河の歴史なることを、更に河の遂に境界を作す能はざる事や羅馬史最も分明に顯示す、蓋し羅馬はルビコン河を以て本國と外藩との境界となし、是を以て千古不易の法度となせしも、カエザル(シーザー)の叛するや鞭を揚げて「骰子は投げられたり」と絶叫し、快馬一躍、馳せて河を渡り、本國に入りて國都を陷れ、遂に大統領に自立せしが如き、後世多惱河を以て本國と蠻人との境界と劃定したるも、呼得民族は幾度か此の勿來關を渡り、輒ち本國の疆内に闖入し、遂に官軍を破りて皇帝ヴァレンスを斬り河南の各地に瀰漫せしが如き、即ち是れ。

カエザル、ルビコン河を渡る、河は伊太利の北部に流れアドリヤチック海に注ぐ

ゴット民族多惱河を渡る

多惱河と西洋史

亞細亞より各種民族の歐陸に遷徙する大衝路

歐羅巴の歴史に、河の絶大なる感化を附與せしものを多惱ラインの二水となす、多惱は元史の禿納なり、其の流勢たる西の方歐陸の中原より東の方亞細亞太陸に向ひて馳り、東歐の全躰を灌注して黒海に入るもの、而して黒海は裏海(元史の寛定吉思海)に近接し、直ちに亞細亞太陸と連接するを以て、自から各種民族の亞細亞より歐陸に遷徙する大衝路となり、特に中央亞細亞なる今のアム・ダリヤ河が現時の如くアラル海に入らずして

裏海に注ぎたる世代にありては、中央亞細亞に瀰漫せし百多の民族は大抵アム・ダリヤ河に沿ひて西下し、裏海黒海を過ぎりて多惱河口に到り、遂に河を西上して歐陸に闖入せしもの、上古ケルト民族に、テウトン民族に、皆亞細亞より來りて多惱河系に散住し、部落相互に排擠し鬪爭し、千年遂に寧日なかりしも、羅馬の覇威膨脹と共に其の吏民兵士等此間に雜居し來り、漸く蠻人の俗を移して化に向はしめ、蠻野剛健なる素質に禮數文雅の分子を鎔冶し、遂に今の歐陸中原なる幾多強邦の原子を成す、後、スラヴ民族も亦た河に頼りて入り來り、蒙古種たる匈奴(Huns)、馬札兒(Magyars)、突厥(Turki)の諸族も河の兩岸に國を興立しき、既にして當初亞細亞より各民族の西上して歐陸に闖入するの大衝路たりし此の河系は、後代に到り亦た歐陸より亞細亞に東下するの大衝路となり、歐陸全躰の絶大運動たる十字軍の如きも實に多惱河系を東に下りて長驅し、軍了るや亞細亞の文物機器を携へつゝ亦た此の河系に頼りて歐陸に歸陣しき、此く歴史上の大衝路たり、是を以て千秋の間生存競爭の活舞臺となり、戎馬馭驅、百多

ケルト、テウトン民族の遷徙

スラヴ、匈奴、馬札兒、突厥の遷徙

十字軍の進路

生存競爭の活舞臺

萬國自由航行

東方問題の焦點

ライン河

の民族朝に興り夕に亡び、宗社邱墟の感多少、而して今日上游にはヴルトテムベルヒ、バエルンの二王國建ち、中游には墺地利帝國、匈牙利王國雄據し、下游には塞爾維(セルヴィア)、勃爾俄利(ブルガリア)、羅馬尼(ルマニア)の三國分立し、河口より中游の「鐵門」に到るまでは萬國の自由航行に一任し、航行に關する百般の制規は墺匈帝國、塞爾維、勃爾俄利、羅馬尼の四國より各一人の委員を特派して之れを料理することとなるも、四國の間動もすれば議協はず、爲めに外交上の問題を紛出するのみならず、特に下游は東方問題の焦點となり、歐陸近代期の外交事件の妖室となる、世の東方問題を叫び外交論を揣摩する者先づ雙眸を多惱河に向ひて照らせ。

「ライン」と一たび聞かば、海山萬里の日本人をしてすら輒ち其の銀の如き江水と兩岸の故城殘壘と葡萄の美酒とを懷に浮ばしめ、幾捌の詩思は滾滾として湧き來らしむ、何ぞ況んや獨逸人をしてをや、獨逸人は歷史上に、風土上に、物產上に、景色上に、千古萬古其の感化と慈悲とに沐浴する者、宜べなり嘆頌して「父ライン」と喚ぶことや、豈に獨り獨逸人に關はるのみならんや、河は上代ゴール、日耳曼各民族の間を流れ、中古以降、瑞西、佛蘭西、獨逸、フランデルス(和蘭、比耳義)の際を縱橫し、專ら歐陸中原の興廢消長に干預し、列國均勢の原動となり、由來歷史上の大勢力たり、蓋し多惱は東に向ひて流れ、亞細亞洲に對し口を開くを以て、亞細亞より各種民族の歐陸に入り來る門戶となり、西上するの大衝路となる、而して多惱に賴りて歐陸の中原に層至せる各種民族は、此所に來りて會、ライン河系の北と西に向ひて馳るに順ひ、輒ち北下又た西下して歐陸の北部、西部、バルチック海岸、北海岸に思ひ〳〵に遷徙せしもの、要するに多惱の東流し、ライン(ノルド)の北流、西流するは、歐陸に於ける人種配布上に絕大無二の職責を果したる所、而して甲は東部歐羅巴全躰の政治上、經濟上の中心となり、乙は地中海より北海、バルチック海に到る間の活殺機を掌握し、歐陸中原の政治上、經濟上の覇主たり、他の北獨逸諸河たるヴェーゼル、エルベ、オーデル、フヴスチュラが北の方バルチック海上に於けるサクセン民族と、西の方シェルド(比耳義)、セイン、ロアー(佛蘭西)の諸河上に於けるサリック・フランク民族とを連絡し、又た北

歐陸中原列國均勢の原動力

多惱、ライン二河の大職責

多惱、ライン二河の大勢力

北獨逸諸河の所以

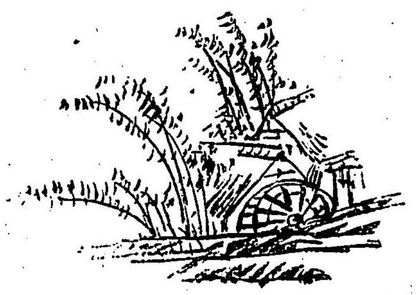
佛蘭西の河流の勢力、西班牙、葡萄牙の河流の勢力

ヘブライ人は最も理學的觀念に缺く者、而して此の純らく理學に適合するの詩を作す、河の理學は這般四句の中に盡く

天地間の一大莊觀

の方丁抹(デンマルク)、瑞典、諸威所在なるアングル民族、サクセン民族と、東方に散在せしスラヴ民族とを聯繫し、以て歐羅巴の歷史に幾多の關係を附與せしことあるも、遂に多惱、ライン二水の爲す所の半にすら至らず、何ぞ況んや佛蘭西の諸河流は、其の關係する所佛蘭西の範圍のみにしか及ばず、西班牙、葡萄牙の諸河流は、西班牙、葡萄牙の境地の內に交涉する所あるのみ。歐羅巴の歷史を討査せんと欲せば、多惱、ラインの歷史を討査せば可なり。

"And surely the mountain falling cometh to naught
And the rock is removed out of its place,
The waters wear the stones,
The overflowings thereof wash away the dust of the earth."
—Hebrew poem.



"The great rivers which move like God's Eternity."

太西洋に注入する河は口を開きて歐人の移住を迎ふ

(一一) 米國史

米國史の行路は單に河の行路のみ。太西洋に注入する河(即ちアレガニー山東の諸流)は西より東に流れ、河口は歐羅巴に向ひて開き、歐人を招き其の移住を迎ふるものゝ如くす。是を以て歐人の新世界に移住する者は、這般の河口より直ちに內陸に闖入し、家を建て畑を起し都邑を創基するは自然の勢なり。此の如くして英人の植民地はジェームス河(今のヴァーヂニヤ州)、カネクチカット河(今の新英蘭(ニューイングランド)各州の開祖)、サスクエハンナ河(今のペンシルヴェーニヤ州)の畔に建ちぬ、和蘭人の植民地はハッズン河畔(今の新約克(ニューヨルク)州)に建ちぬ、瑞典人の植民地はデレウェヤー河畔(今のデレウェヤー州)に建ちぬ、佛蘭西新教徒ウグノー派の植民地はサンテー河畔(今の南カロライナ州)に建ちぬ。既にして這般の各州は連盟倚賴して本國英吉利の苛政に抵排し、蹀血七年、獨立して北米合衆國の基礎を肇定す。

太西洋岸の各州人口漸く孳殖し、移住の徒乃ちアレガニー山脈を西に超

ミシッピー河と米國史の眞面目

所謂「ユニオン」を大成する原動力

ゆるや、ミシッピー河の大野は蒼莽として眼前に開展す、時に大野の強半は佛蘭西に屬す、合衆國政府之れを買收するや、無限の寶庫は戸を開きて待ち、絶大の農業は肥沃なる此の河系に興起し、米國膨脹史の新世紀は此に始まれり、米國の版圖斯く膨脹するや、北と南と相距ること遠く、多雪嚴寒の部分より椰樹の亂生せる地方に到り、風土、氣候、百般の國外物の殊異と共に利害の衝突は此間に起生し、聯邦の礎柱を動かすもの少きにあらず、而かも南北を結び南北を連絡し、合衆國の眞面目を保維せしむるものをミシッピー河となす、ミシッピー河や、北より南の間を流駛し、灌域縱橫、幹流支流の舟行し得るもの無慮一萬二千里、以て南北各州を結び且つ連絡す、後河系に沿ひて鐵道線を蜘蛛の絲の如くに敷き、以て東西を繫ぎ、南北を縫ひ、遂に聯邦を破綻する能はざらしむ、獨り是れのみならず、國の東西の地勢齊しく中央に向ひて低下し、此の低下する所にミシッピー河汪洋として流れ、東西の百川悉く此の河王に朝宗すれば、地勢上、亦た以て聯邦をして離分裂する能はざらしむるもの。

太平洋に注入する河は口を開きて歐人の移住を迎ふ

既にして墨西哥との戰役後、太平洋岸一帶の合衆國に入ると同時に、カリフォルニヤ州に黃金の發見あり、時に太陸を橫絕する鐵道なく、太西洋岸若くはロッキー山東の各州との連絡は杜絕せしを以て、カリフォルニヤに到る者は洋路を經て來る、而かも太平洋に注入する河は東より西に流れ、河口は固より洋に面し、太西洋岸若くは歐洲より移住する者を招き且つ迎ふるものゝ如くす、是を以てか太西洋岸若くは歐洲より移住する者、此の河口より直ちに內陸に闖入し、黃金熱の醒めたる後、此所に葡萄園を開き、麥疇を起し、果樹を栽培し、通邑興り大都建ち、太平洋岸各州の基礎全く成り、其の勢力の膨脹と共に、此所に停滯せず、餘勢滔々、奔りて太平洋中に入り、布哇に波及し、遂に日本の鎖國を開き、サモア群島のチュチュイラを占領し、フィリッピン群島を兼併し、且つグアム島を獲、更に進みて亞細亞大陸に上り、漸く歐洲の列強と伍して支那に競爭せんとす、想ふに米國は前に太平洋北なるアラスカの大方土を露西亞より購求し、而して近年北太平洋の南なる布哇、グアム、フィリッピン群島を占有し、北太平洋は米國の領土を以て環

米國の將來と更に大なる河湖の力

河の創業的功蹟と守成的効能

百萬以上の都市は新約克、シカゴ、フヰラデルフヰヤ、ブルークリン五十萬以上はセント・ルイ、ボーチモアー二十萬以上はボストン、シンシナチー、桑港、バフェロー、クリーヴランド、デトロイト、華盛頓、新オルレアン、ピツツバーグ、ミルウォーキー、ニューアーク、ルヰスヴヰル

聖ローレンス フレーザー二

珠の如く連絡しゝを以て、北太平洋は正に『米國の湖』と化成せんとするものあり、是に於てか米國は河湖の力に依りて其の過去の歴史を作くり、其の富強を累ね、而して將來は更に大なる河湖の力即ち太平洋の力に依りて大に其の威勢を世界に顯彰すべきか。蓋し太西洋岸の河は西より東に流れ、太平洋岸の河は東より西に流れ、共に門戸を開きて歐人の來住を歡び迎へ以て各〻創業的の功蹟を成就し、而してミシッピー河其間を南北に屈折し以て守成的の大効能を果たしぬ。想ふに合衆國中、人口百萬以上の都市四、其内三は河口に據り、一は湖上に枕す、五十萬以上の都市二、其内一はミシッピー幹流に瀕し、一は江港たり、二十萬以上の都市十二、其内四はミシッピー河系に瀕し、一はボトマック河に瀕し四は湖に枕し、三は江港たり、十萬以上の都市十七、其内八はミシッピー河系に瀕し、六は他の河系に瀕し、一は湖に枕し、二は江港たり。米人曰ふ「ローチェスターの大邑を興せしは一瀑布の力なり」と、合衆國の富強は太概は河湖の力なり。

合衆國以外にありては、聖ローレンス河(太西洋岸)が加奈太過去の開化を

河と加奈太の開化

合衆國、加奈太の農業國たる所因

ミシッピー、聖ローレンス二河の灌域と湖水とにて北亞米利加太陸の三分の一を形成す

墨西哥の開化と湖

南亞米利加とアマゾン、ラ・プラタ二河

二河の灌域にて南亞米利加太陸の半面以上を形成す

裨補し、フレーザー河(太平洋岸)が其の將來の開化に資せんとするや量るべからず、二水の開化や合流混同して加奈太の開化始めて大成するもの。蓋し合衆國に、加奈太に、純乎たる太陸國たり、故に氣候乾燥を盡くして農耕に適はざるの地方多大ならざるべからず、而かも乾濕適宜に到る處農耕に可に、儼たる農業國と化成したるは、實に洪渺たる湖水と汪洋たる河流の縱横迂曲し、甚だ氣候を和ぐるものあるを以てのみ。

墨西哥は、歐洲移住前の開化としては正に湖畔より起り、後、歐人も亦た此の湖畔に移住し、遂に今の墨西哥國を建てたるもの、墨西哥の建國は實に湖の力多きに居る。

南亞米利加に至りては、アマゾン、河系は北にありて横に流れ、ラ・プラタ河系は南にありて縱に駛り、二大河系正に四疏八通し、要するに南亞米利加の勢力、活氣、精粹は、鍾りて此の二河系に存す。「渾圓球上、羅甸民族(西班牙人、葡萄牙人、伊太利人)の大國は將來何の邊に興るや」と問ふ者あらば、斷として豫言す、必らずアマゾン、ラ・プラタ二水の上にあらんと。

（一二）濠洲史

青山以東の開化

濠太利（アウストレリヤ）太陸の最舊植民地シドニー（ニユー、サウス）（新南ウエールス州の首都、太平洋に瀕す）の西十六七里、峻嶒たる山系の太平洋岸と駢行して屏立連亘するあり、青山（Blue Mountain.）即ち是れ。青山の麓を繞りて東流するものをホークスベリー、ハンターの二大河系となす。二河系共に源を此山中に發し、灌域の沖積土は膏腴肥沃、能く菽麥果樹に適し、特に零陵香（ルーサーン）の培殖に好し、零陵香は家畜飼養の最良滋養物たり、英吉利及び歐羅巴の各邦にては、此草の收穫や一年兩三回に過ぎざるも、此の方土にては優に六回乃至八回の收穫あり、濠洲の牧畜に頼りて富昌を致しゝもの偶爾にあらず。然れどもホークスベリー、ハンターの灌域たる、西、青山を限り、東、太平洋に沿ひ、其幅狹き所は十四五里、廣きも四十里に過ぎず、故に此の限りある猫額大の土壤は未だ以てアングロ・サクソン民族が落々たる雄心を飽かしむるに足らざりき。シドニー桑創より二十有五年、西暦千八百十三年に至り、英國移民は

零陵香と牧畜

ラクラン河の發見

青山以西の開化、即ち濠洲史の第一段落

マラムビッジー河の發見

始めて青山の西四五里にして一望沓渺たる曠原あるを發見し、越えて二年、始めて一大江の汪々として此の曠原を貫流しつゝ西馳するものあるを發見す、ラクラン河是れなり。此の曠原や、此の灌域や、瀰茫千里、西の方遙かに地平線を限り、眞個にジョン・ブルが曠世の企業心を飽かしむに足る處、唯だ此の方土より東の方シドニー及び太平洋岸に出でんとせば、青山三十里の嶮峻を超えざるべからず、故に青山や實に濠洲內陸の開發を防碍する堅牢なる堡壁の如くなりき。既にして榛荊を芟り、巉巖を鑿ち、橋を湍水に架し、漸く青山に道路を開通せしりより、英國の移民は陸續として內陸に入り、ラクラン河の灌域に下りて千里の曠原を拓き、盛んに牧羊の事業を興し、遂に濠洲富昌の大根本を成就す。想ふにラクラン河の發見と、是より由來せる青山の道路開鑿とは實に灼として濠洲啓發史の第一段落をなすもの。

千八百十九年、年少の好膽子ヒュームなる者、糧を裹み獨り青山を超えて西南行し、宿莽を披きて深く洪荒の間に入り、先づマラムビッジー河を發見し、

モーレー河の發見

仝二十四年、モーレイ河を發見し、進みてフィリップ灣（メルボルンの現在する處）に達し、遂に南極洋の煙波を看て返へる。仝三十一年、甲比丹ストアートなる者、ラクランマラムヒッヂーの兩河を交る〳〵沿ひて下り、二河の共にモーレイ河に入ることを發見し、愈〻下るやダーリングの大河も亦た同じくモーレイに入ることを發見し、益〻下るや青山以西なる濠太陸の千川萬流は悉く深注して齊しくモーレイに朝宗することを悟り、遂に西南行して

濠太利のミシッピー大平原

遠くモーレイの河口なるアレキザンドリナ湖に到り、以て曠世の大探檢を果たす。是に於てかモーレイ・ミシッピー河及びミシッピー大平原は英國移民の眼前に開展し來り、相踵ぎて此間に闖入し、千古萬古未だ曾て斧斤を入れざるユーカリプチュス林中頻りに丁々の音を聽き、伐木の劇甚なる、流石の悠寛なるエミュー鳥をしてすら坐ろに驚殺せしめしものありき。仝三十六年、少佐ミッチェル、モーレイ河を南に渡りてウォムメラ、ロッドンの二河を發見し、遂に濠陸の膏腴肥沃第一等の方面を探檢して、自ら天賚の富饒なるに浩嘆し、所在を「濠太利樂土」（Australia Felix、即ち今のヴィクトリヤ州）と名けて返へる。「濠太利樂土」發見の報一たび傳はるや移民は相率ゐて此所に來り、盛んに農耕牧畜を經營し、樂土生産物の天然的門口たるフィリップ灣にも亦た人民自ら聚合し、漸く灣の北頭に市街を作す、濠陸第一の大都市たる今のメルボルンの桑創即ち是れ。實にモーレイ河の大平原及び「濠太利樂土」に英國移民の永住して南半球大帝國の基址を鞏立せしは是れ濠洲啓發史の第二段落なりとす。

メルボルン市の桑創濠洲史の第二段落

既にして千八百五十一年、「濠太利樂土」に黃金の發見あり、忽ちにして渾圓球上なる功利の徒は、英國よりし歐洲よりし米國よりし支那よりし競奔して此所に蟻集蠅合し、人口は頓に四五倍して、爲めに濠陸の歷史上に新生面を開けり。然れども黃金の産出多大なる間は、人民暴かに富を致すを以て、沒德、破廉耻、罪劫相尋ぎ、且つ資本を濫用し、社交上に經濟上に無限の惡感化を撒布し來り、而かも産出減却するや、一時の暴富を謀る山師流なる者、志氣の懦弱なる者、流離産を破りたる者は取次に率ゐて去り、要するに黃金發見以後の十數年間は、社會を擧げて狡僞相殘し憤怨相激し惘々

黃金の發見と其の結果

濠洲史の第三段落、即ち現時の形勢

濠洲史と米國史

として復た定むべからざりき。是時に當り、唯だ志氣の剛烈なる者、深慮遠識なる者、順逆炎涼に迷はざる者のみ終局の勝利を博するは、猶ほ北米カリフォルニヤ黄金發見後の先例に異るなけんとす。此輩や黄金熱の一醒後、四圍を顧みて風土の洵美なると天賚の厚渥なるとに感悟し、乃ち江河の濱に來りて農耕牧畜を經營し、勵精力行の後初めて農耕牧畜の黄金採堀より更に貴重に且つ多利なるを覺り、所在漸く清整して風敎亦た行はれ、資本浪用の弊自から変除して、人々樸實敦厚を尚び遂に眞成なる濠太利「樂土」を創立せしもの是れを濠洲啓發史の第三段落となす。現代の濠陸及び新西蘭の形勢即ち是れ。

想ふ濠太利は最新世界なり、第二の亞米利加なり、而して其の啓發の行路や宛として米國史に四似す。蓋し濠陸植民地の第一期即ち太平洋に沿ひ西青山山脈（ブルー・マウンテン）を限とせし世代は、猶ほ米國十三植民地の第一期即ち太西洋に沿ひ西アレガニー山脈を限とせし世代に酷類す。後此の青山を超えて西の方に太平原あるを發見し、尋でモーレイ河系の濕域に人民の移植滋殖して第二期世代を開展せしは、猶ほ彼のアレガニー山脈を超え西の方ミシヂピー河濕域の大平原に人民の移植滋殖して第二期世代を開展せしに酷類す。次で此のヴヰクトリヤ州に黄金の發見あるや、世界の人民此所に蟻集蠅合し、恟々擾々の餘、改頭易面し、天賚を徐ろに利用して農牧を經營し、却て樸實敦厚なる第三期世代を創立したるは、猶ほ彼のカリフォルニヤ州に黄金の發見あるや、世界の人民太平洋岸に蟻集蠅合し、恟々擾々の餘、改頭易面し、天賚を徐ろに利用して農牧を經營し、却て樸實敦厚なる第三期世代を創立せしたるに酷類す。唯だ此のモーレイ河たる彼のミシッピー河に對比せば、濕域廣大ならず、水量も亦た些少、概するに濠陸は北半球の各陸に對比せば雨量些少なるを以て、河の水量も些少に、且つ幹流支流共に兩岸高くして水面低く、以て輙ち濕潤に資すべからず、加ふるに酷熱の季節到れば、流水處々に涸れ、時に河底を露はすことあり。濠陸の江河たる短所あるや此の如し、而かも曰ふ「必要は發明の母なり」と、水力利用の事は却て頻りに發達し、新工夫を以て河水を濕潤用に引き、其の効果や嘆服すべ

北半球の河と濠陸の河の短所

濠洲の水利問題

き、も、の、お、り、加之、丙、陸、の、大、漠、に、は、如、何、に、し、て、水、を、得、べ、き、や、との問題は夙に起り、刻下濠陸の有識社會の考究資料となり、考究の結果、丙陸の大部分は熱帶圏裡に屈折し、北流せんかの見のみ、濠陸大河系は今の如く南流すれば、これ若し夫れ北に向へ、又明かに、然も温帶の間を縦横すると、雖も、干預あるを、認むるに、吝ならざるなり、

濠洲の歴史所の河南流に對する皿の盲向に對する

社會に對するを以てなり、其個に濠陸大河系の北流せざるを惜むと、然れば、温熱地方に對し、舊世界に對し、生靈と物産の饒多なる方土に對し、又明かに、北に向へば、南極の凛寒浩渺たる太洋の大なる一屋々ならん、何となれば南に向へば、南極の凛寒浩渺たる太洋の大なる一屋々ならん、何となれば南に向ひて流駛せん、北に向ひて流駛せんか、其の濠陸の啓發を利稗するに對するのみにして、民人の棲住せる方土を見ざるも、若し夫れ北に向へ、又明かに、温熱地方に對し、舊世界に對し、生靈と物産の饒多なる方土に對し、又明かに、北に向へば、南極の凛寒浩渺たる太洋の大なる一屋々ならん、何となれば南に向へば、南極の凛寒浩渺たる太洋の大なる一屋々ならん、何となれば南に向ひて流駛せず

（一三）河と破壊

河と破壊

河の破壊的發作

日本の洪患

太陸の洪患

河、天地の經濟に妙用あるは之れを說く、人生を利裨するは之れを謂ふ、其の建設的の効能は此の如く偉大なるありと雖も、而かも時に破壊的の發作なきにあらず。暴漲や漲溢し、怒り、狂ひ、洶涌澎湃、其の威力を恣にせんか、家を流し、畜を溺らし、人を殺し、貨財、田圃を蕩盡し、慘毒の極を盡くすことも少しとせず。日本の如きは、分水脊を構成せる山勢は近く海に瀕し、爲めに河底の傾斜劇甚なるが上に、八洲を環れる太瀛の水は始終蒸發して、含濕の空氣は常に莫々浮動し、山嶽に搏擊して忽ち雨となり、其量多大、是に於てか此の多量の雨は此の傾斜の劇甚なる河底を一往直下し、洪患を見ること特に頻々となす、即ち最近十五年間に年々平均一千五百萬圓宛の損害あるに至る、慘も亦た極れる哉。獨り日本の如き島國のみならず、太陸の巨水黃河、ミシシッピーの如き亦た汎濫して幾度か洪患を見るありとす。河の破壊的發作の猖狂なる此の如し、而かも河を驅りて此に至らしむる罪は河にあらずして實は人にあり、人にして若し天然の妙用を悟り、順然として其の法則を奉守せば、河焉んぞ破壊力を逞用せんや、唯だ今代の人、遠識深慮なく、一時の利を謀り、暫且の小康を博せんとし、自然の妙用を破り法則を壞る、是を以てか河を驅りて却て猖狂を恣にせしむ、試みに指點せんか、今代の人或は河畔に姑息的の隄防を築き、或は甲所を防禦せんが爲めに乙所に水の潰決を速くが如き隄防を造り、或は低水工事のみに力を盡くして高水工事を忽せにし、或は高水工事のみに偏して低水工事を顧みず、或は河畔尺寸の剩地を吝みて田圃を興し河幅をして狹からしむるが如き、要するに統一的なる治水の大策を遺却するに是れ齊しく洪患を誘致するの原因たり、特に山林の荒廢は幾多源因中の主要なるもの。

河の破壊力を逞用するは其人にあり

洪患の源因

山林と治水の關係

蓋し森林は降雨全量の平均二割四分を枝葉の間に留め、特に濶葉樹の如きは七割弱を支ふに至る、且つや樹下の落葉、蘚苔は能く一立方米突に付き一石五斗五升の雨水を吸收し、厚サ一寸六分五厘にして一坪に九斗即ち一町に付き無慮二千七百石の雨水を收吸し得、況んや根株は、山面の雨

水を支障して其の流下する勢を緩慢ならしめ、兼ねて無數の小支流に岐ちて勢を減殺せしめ、加ふるに樹根の盤蟠するが爲めに山嶽の崩壞を扞止し、地面の洗瀝を防遏し、土砂の流出を阻滯し、此くの如くして以て能く洪患を未前に過止し來る。要するに山林は眞個の蓄水塘なり、水の調度者なり。是を以て王覇の歷代厚く意を林制に體し、今を距る〻千九十年前、嵯峨天皇の弘仁十二年(811 A.D.)太政官符を下して曰く、

山林は蓄水塘なり、水の調度者なり

弘仁年間の太政官符

一應禁制所損水邊山林。產業之務。非只堰池浸潤之本。水木相生。則水邊山林必須鬱茂。大河之源。其山鬱然。小川之流。其岳童焉。爰知流之細大隨山生。夫山出雲雨。河潤九里。山童毛盡。谿流涸乾。五畿七道諸國山川海江濱野林原等。一切收入公私共之。但山岳之體。或於國爲禮事。須蕃茂勿令伐損(中略)大堰之岳。專有禁制。小川之山。不在禁限。因百姓憚遠貪近。川上山林任意伐採。至有旱年。漑乏苗焦。動遭損害。職此由也。望請川谿泉源溝池等。縱漑田水邊山林。藪澤。不問公私。悉加禁制。並莫伐損

と、先王の河源涵養の道に心を用ひしもの深く且つ遠し。降りて德川氏の

覇府を開くや、第四世家綱初めて敎令を發してより、累世の將軍齊しく山林保護の事を四民に諭告しき。家綱の敎令(寬文六年二月、1666 A.D.即ち二百三十餘年前)に曰く、

近來は山々草木の根株に至るまで之を掘取り風雨の時土砂川中に流れ出て水路滯るを以て自今草木の根を掘取ること停止たるべし」川上左右の山々樹木なき所は土砂の流れ落ちざるが爲め苗木を植ふべし

從前川に沿ひたる原野等に田畑を新開し或は竹木葭萱を植ゑ堤防を新築し川路を狹小ならしむ可らず但山中の燒畑も新に起す可らず

と。第七世吉宗の敎令(寬保二年二月、1742 A.D.即ち百六十年前)に曰く、

河邊の官林及ひ百姓所有の山林を斬伐して新畑に開墾す可らず已むを得ず斬伐する時は其跡地は心を用ひて林となすべし山中の官林大木良材は殘置き其外は百姓願に因り斬伐し跡地は開墾せしむ

列藩の林制及び治水

べし

と。獨り覇府のみならんや、列藩の侯伯、士大夫亦た其の封提内なる林制と治水との關係に最も留意し、儒士熊澤蕃山が備前領の河源に松樹を培植して洪患を預防せしが如きは、今に至るまで人々の飽說する所となす。其間或は山腹に黍粟を播種して禽獸を招誘し、土昧を奬養し、以て雜草樹の蕃茂を計りたるが如き、或は隄上に禹廟を建立し、士民をして土沙を之れに褰せしめ、以て有形上に無形上に隄防の鞏固ならんことを期圖せしが如き、古人が經營苦心の處、今や擧げて顧みず、眼を放てば赤裸々の山嶽相連亘し、禿頂赭頭累々たるが上に、揭てゝ加へて姑息一時の隄防を築造す、洪患の來らざらんとするも豈に得んや、人自から水災を速くに非ずして何ぞ。同一の河流のみ而かも山林の形勢如何は分明に洪患の有無に繫累するあるを見る、木曾川の如き、信濃、美濃の國境以北(信濃)即ち上流所在には、草樹鬱葱翠色滴らんとし、所謂木曾の山林に屬するを以て、古往今來居民未だ曾て洪患の何たるを知らず、且つ山腹より土沙の崩壞するなきを

同一河流にして洪患の有無木曾川の實例

以て流水清洌昌明、人をして坐ろに爽然たらしむものあるも、國境以南(美濃)即ち中流所在は森林を伐採し盡くし、些の大樹喬木あるなきを以て、頻年幾度か洪患に罹り、居民復た生を聊せず、流離して他邦土に移住する者あるに至る、更に下流所在(美濃、尾張)に至りては、洪患殊に劇甚に、所謂岐阜、愛知の大水災なるもの即ち是れ、同一地方の各河流のみ而かも山林の形勢如何は亦た分明に洪患の有無に繫累するあるを見る、羽後の三大河能代川、御物川、子吉川の如き、御物、子吉の二河は所在の森林を濫伐せしを以て、頻年來灌域の居民間、洪患に罹ることあるも、獨り北部の能代川のみは舊藩以來の林制を儼守し、所在の森林を濫りに伐採せざりしを以て、今に絶えて水災を知らざるなり。乃ち知る、森林は山水の經緯なり、先づ經緯を破壞す、山水を大に破壞するものの尊で來るは自然の數なり、洪患や遂に以て河伯、水神の盛德を累はすに足らず、之れを警しむるは全く人にあり。我れ君と共に河伯、水神を怨まず、却て自から發り自から警め以て造林の事を周旋せんか。

同地方の各河と洪患の有無羽後の三大川の實例

洪患は河の德を累はすに足らず

（一四）湖及澤

湖
澤
湖の起生

●湖は陸地に圍繞されたる水の部分即ち是れ、切言せば河の、膨脹せるもの、又たは、幅、太き、河と假定し、而して百多の觀察を下せば可なり。

●澤は湖の淺きもの、即ち、幅、太く、底、淺き、河と假定して可なり。

湖の起生

湖の起生を大別して八となす、

(一) 雨潦、野水などの此所彼所より滙注し、一個所に溜りて起生せしもの。這般の湖は、太抵底淺くして澤をなす。雨潦、野水などの運搬し來れる沙泥は堆積して這般の澤の爲めに緣邊を構造するや、澤は愈、深み益、大となる。加賀、越後の日本海岸に點綴せる潟即ち是れ。

(二) 地震、伏流等に因り、地層の陷沒するや、陷沒所に水の湛え、若くは底より泉の噴き出でゝ起生せしもの。琵琶湖即ち是れ。

(三) 地盤の高低不同あるが爲めに、低所には水自から溜りて、高所は自から緣邊をなして起生せしもの。這般の湖は到る處に多々。

(四) 氷河（グレシャー）に因り穿鑿されたる窪所に雨潦、野水などの滙溜せしもの。這般の湖は英吉利、歐羅巴、北亞米利加に多きも、日本には絶無なり。

(五) 鎭火山の噴出口に雨潦の滙溜せしもの、若くは噴出口の底より泉水の湧出して起生せしもの、所謂火口湖即ち是れ。磨周湖に、恐山湖に、伊香保沼に、乘鞍山巓の大池に、其他日本の火山の「御池」と稱ふもの皆然り。

(六) 巖石の崩落、地辷（ぢすべ）りし、若くは溶岩、火山灰の堆積等に因り、河道を遮塞し、以て起生せしもの。磐梯山下の三新湖の如き即ち是れ。

(七) 舊河道の新河道より撰離分隔して遂に湖と化成せしもの。利根河畔に這般の湖散在す。

(八) 太地の其の初め水面下にありしもの、漸く昇起して乾陸となり、而かも其間の窪所丈ケには依然水の殘留して湖をなすもの。常陸、下總の境上にある霞浦、手賀沼等の如き即ち是れ。

湖の主要なる用二あり、(一)湖に注入したる川河の水を淸淨にして再び之れを排出せしむること、即ち濾淨用、(二)川河の爲めに地塘と爲り其の水量

の出入を齊整すること、即ち衡平用。

湖の區分

湖を大別して三となす、

交與湖

(一) 交與湖は河を受容し又た之れを排出するもの。琵琶湖の如き、横田川、仁保川、愛知川、姉川、安曇川等の河を受容し、而して又た宇治川なる大なる出口を求めて攝海に注ぐが如き即ち是れ。

排出湖

(二) 排出湖は河を受容せず、然れども湖底より泉水湧出し、以て河の源をなすもの。諏訪湖の如き、或は一二小河を受容するも、其の水分の太概は湖底より湧出する泉水に由り、而かも天龍川を排去するが如き即ち是れ。

受容湖

(三) 受容湖は河を受容するのみにして出口なく、之れを排去せざるもの。此の如き湖にては淡水のみ終始蒸發して鹽分漸く殘留し、幾萬千年の久しき遂に鹹湖となる。アラル海、裏海、死海、北米合衆國の鹹湖の如き即ち是れ。

鹹湖

所在に依る湖の區分

所在に依り湖を大別して二となす、

山湖

(一) 山湖は氷河に因り穿鑿せられたる窪所に雨水の溜まりしもの、若くは火口湖に多し。此種の湖は太抵底深く、沿岸は嶮峻にして不規律に、其形長細く、風光は絶佳。

平地にある湖

(二) 平地にある湖は川河の幅太まりたるものより生じたるもの多し。此種の湖は太抵底淺く、沿岸は緩慢なる斜面をなし、單一にして規律正しく、其形は廣大にして、所在の風光は佳ならず。

湖は平和の代表者なり、水の絶愛すべきもの此所にあり。唯だ謂ふ勿れ、澤は陰鬱の代表者なりと。慈姑は此所に甘脆なる根莖を太らし、端正なる燈心草は昂乎として起り、萍蓬草は嬌然として此所に媚び、雪の如き白鷺は魚を窺ひて此所に悄立す、誰か謂ふ、陰鬱の代表者なりと。

湖の利便

陸放翁鏡湖の詩

（一五）湖と人生

湖は河の膨脹せるものなるのみ、河の長きものなるのみ、河や業に既に人文の消長、世運の推移に太關鎖を繫ぐありとせば、湖も亦た人生に干預するの巨多なるは固より然り。湖は舟楫の便あり、灌漑に資するに足り、水は甘洌にして飲むべく、加ふるに「柳姑、廟前魚作市、道士莊畔菱爲租」の利あり、沿岸は太抵沖積層より成りて扁平に膏腴に、況んや「朝暉夕陰、氣象萬千」の景を現はすおや、人の湖を愛するは自然なり、湖の所在に聚合するは數勢なり、一方土の人生に對する求心力は湖畔にありとす。蓋し湖は平和の代表者なり、而かも平和の代表者や時に風濤の爲めに攪亂せられざるにあらず、是時に當り湖の幅員たる元と海の如くに開大せざるを以て、風濤の力は小範圍の内に緊蹙せられ拘束せられ、之れが爲めに怒り猛けること海よりも一倍劇甚なる容姿あるも、畢竟是れ一時の事、暫旦の行動に過ぎず、猶ほ湘娥が二十五絃を洞庭の夜月に彈じ清怨に勝えずして却て遣る

「湖住者」

瑞西の「湖住者」

能はず、自から嗚呼し嗟嘆し懊惱淹悶して遂に暴燥するが如きのみ、忽ちにして其の本善に反へるや、原來の天眞は舊に倍し嫣然として可憐絶愛すべきを見る、人の湖を愛して其の所在に聚合するは偶爾にあらず。

歐羅巴洲原人世界に「湖住者」なる者あり。甲は湖岸に沿ひ水中に幾多の木杭を打ち込み、杭の上に板を平げに敷き列べ、以て家屋を造くり、屋の後面は直ちに水に入り、前面には橋を架して陸と相連絡し、内に家族の團欒として安居するのみならず、牛馬の類さへ飼養し、朝に湖を汲み夕に湖に漁して人畜共に飲食し（古代希臘の史家ヘロドチュスに據る）、嬉々雍々、人をして坐ろに凌波の仙境を想起せしむるものあり。ヘロドチュスの記述せる古代のペヲニヤ人及び世に顯著せる瑞西の「湖住者」の如き皆な此に屬し、瑞西の大湖ツーリッヒ、ボーデン（コンスタンス）、ヂェンフ（ヂェネーヴ）、ニューシャーテル、ビエン、モラット、セムパーホ等の、沿岸は固より、其の小湖インクヴヰル、ブフェッフヰコン、モージードルフ、ルイスゼル等に至るまで、齊しく「湖住者」の遺趾や今に徵すべく、其の現代までに發見せられしもの、ビエン湖畔には部落二十、ヂェンフ湖畔に

は二十四、ボーデン湖畔には三十二、ニューシャーテル湖畔には四十九其他合計二百有餘に上る。這般の部落たる、時に鐵器時代、羅馬時代にまで存在せし考證ありと雖も、太抵は石器時代、青銅器時代に屬し、近世考古學上の一大資料たり（ラボック氏の「先史時代」に據る）而して這般「湖住者」の戸口や饒多、ヂュンフ湖畔の一大部落たるモルヂには戸數三百十一、毎戸平均家族四人宛とせば一千二百四十四人あり、ニューシャーテル湖畔には五千人あり、青銅器時代の六十八部落には四萬二千五百人あり、青銅器時代以前には三萬一千八百七十五人あり（トロワーヨン氏の計算に據る）以て當時の繁庶を知るに足る。乙は所謂「クランノーヂ」なるもの、土石を湖水に投じ木杭を打ち込みて之れを堡障し、人爲の小島を構造し、此上に據在して自から守りし愛蘭（アイルランド）古代の酋長の如きあり。之れを要するに甲種や太抵は有史期以前に係り、乙種は甲より後時代に係るも、共に太古民人の湖畔に聚合せしを證左するに足る。其他蘇格蘭（コットランド）南部の一湖畔、北部の一湖畔に、伊太利ガルダ湖畔のペッシーラに「湖住者」の遺趾存在するを聞く。豈に太古の民人のみならんや、現代と雖も渾圓球上

「クランノーヂ」

現時の「湖住者」

隨處に「湖住者」を見、土耳其のプラシアス湖畔の漁人、上印度のガロ人、ボクシァ人、南印度のカニカル人等悪く是れに屬し、特に南亞米利加太洲北部の土人（ヴェネヅエラの印度人其最たり）東印度諸島の土人（婆寧（ボルネオ）の土人其最たり）、南洋諸島（ニュー・ギニー、セレベス、セラム、スールー、ミンダナオ等）の如き「湖住者」の異に多々、旅行家をして宛として眼前に瑞西太古の「湖住者」を實觀せしむるの感あらしむ。

想ふ「湖住者」たる、前世界の原人若くは現代の土蕃のみに限れるも、而かも民人の湖畔に聚合して生意を經營するは、現代と雖も益々盛んなり。瑞西の大都市たるヂェネーヴ、ルーセルン、ツリヒ等は齊しく同名の湖上に枕す。北亞米利加にありては、シャムプレイン湖上にはヴァーモント州の首都モントペリヤ市枕し、チンタリオ湖上には人口二十萬以上の都市二、五萬以上の都市二、十五萬以上の都市二あり、イリー湖上には三十五萬以上の都市二、十五萬以上の都市一、三萬以上の都市一枕し、ヒューロン湖上には三十萬以上の都市一、四萬以上の都市一枕し、ミシガン湖上には二

歐米に於ける湖と人生
廿萬以上ローチェスター、トロント
三十五萬以上バフェロー、クレヴランド
三十萬以上デトロイト
二百萬以上シカゴ
廿五萬以上ミルウヲーキー

支那に於ける湖と人生

百萬以上の都市一、二十五萬以上の　市一、三萬以上の都市四枕し、スーペリヲ湖上には六萬以上の都市一枕し、鹹湖上に五萬以上の都市一枕す。北米合衆國及び加那太の英靈は全く湖上に磅礴し、特に合衆國の大湖系地方は國內人口の焦點にして、此の沿岸に生息する者無慮四百萬、合衆國全土の人口十九分の一を衣食せしむ、湖の恩賚や眞個に大なる哉。

支那にありては、戶口の最も饒多、物產の最も富贍なる部分は、實に洞庭湖と其の附近なる松陽、黃蓋、官、沙、斧頭、金、梁子、赤野、三台、白泥、紅馬、三、太白、三崗等の諸湖畔にあり。江西省の富庫たる九江(開港場)、南康、饒州の三府治は鄱陽湖に枕し、南昌府(人口六十萬)亦た湖に近し。鄱陽湖の西に鵝湖あり、夫の

鵝湖山下稻粱肥。豚柵鷄塒半掩扉。桑柘影斜秋社散。家家扶得醉人歸。

唐王駕

と、太平豐年の氣象躍如たるもの偶爾ならんや。太湖は禹貢の震澤、史記の五湖(范蠡舟を浮ぶ處)、其の支那の人文、歷史に干預するの絕大なる史家の稱ふる所、而して江蘇省の蘇州府は湖北に、浙江省の湖南府は湖南に據在

日本に於ける湖と人生

し、精粹正に此の湖上に鍾まる。以上の諸湖や皆中部以東に開展するもの、而かも以西にせんか、雲南の元氣は全く滇池、洱海の二湖畔にあり、雲南府滇池に瀕して傍近耕地の灌漑悉く此湖に賴り、歲時の豐歛は只管湖口の通塞如何に因り、大理府は洱海の西にあり、緬甸と通商の中心市場たり。

日本は細、長き島國たり、故に大湖なし、而かも湖岸は實に人生經營の焦點たり。細長き島國に於てすら此の如し、況んや太陸に於てをや。

湖	所在	周圍	湖附近の人口	記事
八郎潟	羽後	一五里	四一、八〇〇	湖の西岸と日本海とは甚だ近接し、湖と海との間に小片の陸地あるに過ぎず、故に人口は比較的に多からず。
猪苗代湖	岩代	一六里二一町	二二、三〇〇	湖の北岸に沿緣せる沖積層の平原上に猪苗代町(人口二、五〇〇)あり。若松町(人口二五、〇〇〇)の繁庶をなせるは此湖に賴るもの多し、然れども此町の所在は湖と稍〻隔離するを以て其の人口は上項に算入せず。
河北沼	加賀	六里二〇町	二五、二〇〇	湖の東岸に沿緣せる沖積層の平原上に津幡町(人口三、六〇〇)あり。金澤市(人口八六、〇〇〇)を距る南二里程市より日本海に到る荷物運漕は此湖に賴るもの多く、市の爲めに港をなせる上金石町(七、〇〇〇)も亦た湖の河となり日本海に注ぐ所にあり、然れども金澤市の所在は上金石町と共に湖と稍〻隔離するを以て其の人口は上項に算入せず。

霞浦　常陸　三六里　一二七、五〇〇

湖南の小片は下總に瀕す。
湖北に石岡町（人口一二、〇〇〇）、高濱町（三、〇〇〇）、小川町（四、〇〇〇）あり。
湖東に上造町（人口二、五〇〇）、麻生町（三、五〇〇）、潮來町（五、〇〇〇）あり。
湖南に江戸崎町（人口三、〇〇〇）あり。
湖西に土浦町（人口一一、〇〇〇）、眞鍋町（三、〇〇〇）あり。

印旛沼　下總　一二里　四三、三〇〇

湖の北方、河となりて利根川に注ぐ所に安食町（人口四、七〇〇）あり。
湖の南岸に沿緣せる沖積層の平原の上に佐倉町（人口八、〇〇〇）、臼井町（三、七〇〇）あり。

琵琶湖　近江　五九里三二町　四二七、五〇〇

湖東（人口三二二、〇〇〇）。
栗太郡（人口三三、五〇〇）、野洲郡（四〇、〇〇〇）、蒲生郡（四六、〇〇〇）、神崎郡（二八、〇〇〇）、愛知郡（二二、〇〇〇）、犬上郡（五〇、〇〇〇）、坂田郡（五一、〇〇〇）、東淺井郡（二八、五〇〇）、伊香郡（二三、〇〇〇）。
草津町（人口五、〇〇〇）、八幡町（七、五〇〇）、八日市町（五、〇〇〇）、彦根町（二〇、〇〇〇）、長濱町（一〇、〇〇〇）あり。
湖西（人口一〇六、〇〇〇）。
滋賀郡（人口六五、〇〇〇）、高島郡（四一、〇〇〇）。
大津市（人口三二、〇〇〇）あり。

中海　出雲　一六里一一町
宍道湖　一三里　二町　一四七、〇〇〇

中海の東岸は伯耆に瀕す。
中海の河となりて日本海に注ぐ所に境町（人口五、〇〇〇）あり。東南端に米子町（人口一八、〇〇〇）あり、共に伯耆に屬し山陰道中の重要なる港たり。
中海の南岸に安來町（人口五、〇〇〇）あり。
中海、宍道湖の中間なる沖積層上に松江市（人口三四、〇〇〇）あり。

（一六）風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

（一）日暮れんとす、柳蔭、渡を喚ぶ、水聲人語を亂し、篙師輙ち來らず。
（二）敗荷狼藉、白霜、枯蒲の根を囓み、澤上の將軍廟荒れ果てゝ覇氣銷沈す。
（三）岸に登り漁戸を叩きて鯉を買ふ、秋高くして肉肥え長サ三尺。
（四）板橋の霜早く消え、隄上の南枝香動かんとす。
（五）村女瓶を挈げて柳外に蛙聲を汲む、五月の月夕。
（六）一棹花を穿つこと十里、落英水を織り、杳然として仙路の遠からざるを覺ゆ（大和月ヶ瀬）。
（七）湖の全面晶々として鏡の新に磨けるが如く、湖西に當り水に臙脂（ベニ）を流しゝが如き空連り、其下に亭々たる長松兩三株聳立す。
（八）菫草（スミレ）野水に沿ひて咲ひ、落花の雪、水に浮ぶ二三片。
（九）夕陽地平線の上にあり、落霞飛鳧、垂楊疎荻の間に隱閃す（常陸霞浦）。
（十）蜻蛉野水に點ず、村童芒（スヽキ）を拂ひ之れを捕へんとして忽ち飛び去る。

風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

(一) 雁聲櫓語を枕上に聞く、澱江江上の客亭（山城）。
(二) 水に臨むの亭榭百尺、涼風洒然として來り、爽氣衣を吹き徹す。
(三) 櫻の花吹雪亂れて水面を布く處、香魚すゝ肥ゆ。
(三) 水禽棲を尋ねて、漁舟火を點じ、一彎の新月、筑波の峯尖に懸る。
(一四) 竹籬の外、一泓の溪水、石に隨ひて曲折し、涓々として耳を洗ひ去る。
(一五) 夕照千里、碧雲一色。　長煙一空、皎月千里（琵琶湖）。
(一六) 村娘野花を髻上に插み、溪水に照らして幾度か影を偸み看る。
(一七) 棚を溫上に列ね、流を汲みて新茶を煎る、君も我も塵外の人。
(一八) 春雨初めて霽れ、湖岸一抹の淡靄斷く外、水面拭ふが如く洗ふに似。
(一九) 野水に沿ひて村あり、茅屋簇々三十餘、花竹之れを繞ぐり、垂柳其の
(二〇) 七八を遮蔽す（山城木津の途上）。
(三) 水色澄澈、小魚の來往數ふべし、一、二、三、四、五。
(三) 曉煙對岸を籠む、炭を載する牝馬、渡より舟に上り、斷聲霜天に清し。
(三) 木曾の旗亭、溪聲脚下に轟く、俯して窺へば、斷崖峭立、深サを知らず。

(二四) 芳野瀑布櫻。數十樹附緣巖肩。自下望之。如銀河倒落（齋藤拙堂）。
(二五) 漁郎棹歌を歌ひ荻花を押し割けて漕ぐ處、花面を拂ひて雪の如し。
(二六) 亂石林立、飛湍上より墮ち、下、石と鬪ひ、山風横さまに射り來り、水沫
(二七) 舟人の袖を打つ（薩摩川內川の上流）。
(二八) 長橋層塔、煙波渺然、澁田河上の黃昏（東京吾妻橋の北）。
六花繽紛、上流（東蒲原郡の山中）より薪を載するの舟、市に達する五
里の處に到り膠して前まず、舟人潮の來るを待ち、蓬窓の下に横笛
(二九) を吹く、其聲朗廊（越後阿賀川）。
黃雲野に布き、銀の如き一水其間を曲折し、岸上家あり、蓑笠戸に在
(三〇) り（肥前佐賀の郊外）。
(三一) 桔槹空に聳る（肥前佐賀の郊外）。
(三二) 水涸れ、沙長く、兩岸の蘆花雪の如し、香魚瘦せ去ること一寸。
(三三) 過綱步。有二十餘家。在夕陽高柳中。短籬晒晉。小艇往來。正如畫圖所見。
過東場。並水皆茂竹高林。隄淨如掃。鷄犬閒暇。鳧鴨浮沒。人往來林樾間。
亦有臨渡喚船者。使人怳然如造異境（以上二項陸放翁）。

風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

霞浦　常陸　三六里　一二七、五〇〇

湖南の小片は下總に瀕す。
湖北に石岡町(人口一二、〇〇〇)、高濱町(三、〇〇〇)、小川町(四、〇〇〇)あり。
湖東に上造町(人口二、五〇〇)、麻生町(三、五〇〇)、潮來町(五、〇〇〇)あり。
湖南に江戸崎町(人口三、〇〇〇)あり。
湖西に土浦町(人口一一、〇〇〇)、眞鍋町(三、〇〇〇)あり。

印旛沼　下總　一二里　四三、三〇〇

湖の北方、河となりて利根川に注ぐ所に安食町(人口四、七〇〇)あり。
湖の南岸に沿縁せる沖積層の平原の上に佐倉町(人口八、〇〇〇)、臼井町(三、七〇〇)あり。

琵琶湖　近江　五九里三二町　四二七、五〇〇

湖東(人口三二二、〇〇〇)。
栗太郡(人口三三、五〇〇)、野洲郡(四〇、〇〇〇)、蒲生郡(四六、〇〇〇)、神崎郡(二八、〇〇〇)、愛知郡(二二、〇〇〇)、犬上郡(五〇、〇〇〇)、坂田郡(五一、〇〇〇)、東淺井郡(二八、五〇〇)、伊香郡(二三、〇〇〇)。
草津町(人口五、〇〇〇)、八幡町(七、五〇〇)、八日市町(五、〇〇〇)、彦根町(二〇、〇〇〇)、長濱町(一〇、〇〇〇)あり。
湖西(人口一〇六、〇〇〇)。
滋賀郡(人口六五、〇〇〇)、高島郡(四一、〇〇〇)。
大津市(人口三二、〇〇〇)あり。

中海　出雲　一六里一一町
宍道湖　出雲　一三里二町　一四七、〇〇〇

中海の東岸は伯耆に瀕す。
中海の河となりて日本海に注ぐ所に境町(人口五、〇〇〇)あり。東南端に米子町(人口一八、〇〇〇)あり、共に伯耆に屬し山陰道中の重要なる港たり。
中海の南岸に安來町(人口五、〇〇〇)あり。
中海、宍道湖の中間なる沖積層上に松江市(人口三四、〇〇〇)あり。

(一六) 風景 (河、湖、澤。詩、歌、畫の材料)

(一) 日暮れんとす、柳蔭、渡を喚ぶ、水聲人語を亂し、篙師輙ち來らず。
(二) 敗荷狼藉、白霜、枯蒲の根を囓み、澤上の將軍廟荒れ果てゝ覇氣銷沈す。
(三) 岸に登り漁戸を叩きて鯉を買ふ、秋高くして肉肥え長サ三尺。
(四) 板橋の霜早く消え、隄上の南枝香動かんとす。
(五) 村女瓶を挈げて柳外に蛙聲を汲む、五月の月夕。
(六) 一棹花を穿つこと十里、落英水を織り、杳然として仙路の遠からざるを覺ゆ(大和月ヶ瀬)。
(七) 湖の全面晶々として鏡の新に磨けるが如く、湖西に當り水に臙脂(ベニ)を流しゝが如き空連り、其下に亭々たる長松兩三株聳立す。
(八) 菫草(スミレ)野水に沿ひて咲ひ、落花の雪、水に浮ぶ二三片。
(九) 夕陽地平線の上にあり、落霞飛鳧、垂楊疎荻の間に隱閃す(常陸霞浦)。
(十) 蜻蛉野水に點ず、村童芒(スヽキ)を拂ひ之れを捕へんとして忽ち飛び去る。

風景　（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

(一一)雁聲櫓語を枕上に聞く、澱江江上の客亭（山城）。

(一二)水に臨むの亭榭百尺、涼風洒然として來り、爽氣衣を吹き徹す。

(一三)櫻の花吹雪、亂れて水面を布く處、香魚寸々肥ゆ。

(一四)水禽棲を尋ねて、漁舟火を點じ、一彎の新月、筑波の峯尖に懸る。

(一五)竹籬の外、一泓の溪水、石に隨ひて曲折し、涓々として耳を洗ひ去る。

(一六)夕照千里、碧雲一色。　長煙一空、皎月千里（琵琶湖）。

(一七)村娘野花を髻上に挿み、溪水に照らして幾度か影を偸み看る。

(一八)榻を湍上に列ね、流を汲みて新茶を煎る、君も我も塵外の人。

(一九)春雨初めて霽れ、湖岸一抹の淡靄靉く外、水面拭ふが如く洗ふに似。

(二〇)野水に沿ひて村あり、茅屋簇々三十餘、花竹之れを繞ぐり、垂柳其の七八を遮蔽す（山城木津の途上）。

(二一)水色澄澈、小魚の來往數ふべし、一、二、三、四、五。

(二二)曉煙對岸を籠む、炭を載する牝馬、渡より舟に上り、斷聲霜天に清し。

(二三)木曾の旗亭、溪聲脚下に轟く、俯して窺へば、斷崖峭立、深サを知らず。

(二四)芳野瀑布櫻。數十樹附緣巖肩。自下望之。如銀河倒落（齋藤拙堂）。

(二五)漁郎棹歌を歌ひ荻花を押し割けて漕ぐ處、花、面を拂ひて雪の如し。

(二六)亂石林立、飛湍上より墮ち、下、石と鬪ひ、山風横さまに射り來り、水沫舟人の袖を打つ（薩摩川內川の上流）。

(二七)長橋層塔、煙波渺然、澁田河上の黃昏（東京吾妻橋の北）。

(二八)六花繽紛、上流（東蒲原郡の山中）より薪を載するの舟、市に達する五里の處に到り膠して前まず、舟人潮の來るを待ち、蓬窓の下に横笛を吹く、其聲朗廓（越後阿賀川）。

(二九)黃雲野に布き、銀の如き一水其間を曲折し、岸上家あり、蓑笠戸に在り、桔槔（ハネツルベ）空に懸る（肥前佐賀の郊外）。

(三〇)水涸れ、沙長く、兩岸の蘆花雪の如し、香魚瘦せ去ること一寸。

(三一)過綱步。有二十餘家。在夕陽高柳中。短籬晒罾（ヨツデアミ）。小艇往來。正如畫圖所見。

(三二)過東場。並水皆茂竹高林。隄淨如掃。鷄犬閒暇。鳧鴨浮沒。人往來林樾間。亦有臨渡喚船者。使人怳然如造異境（以上二項陸放翁）。

風景　（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

（三三）苜蓿、チモシー、レッド・トップ等、無數名を知らざるの牧草は咲き亂れ、直徑五尺許の流水は其間を駛りて清冽玉の如し、會〻一牛二羊、岸上の楡（ニレ）樹々蔭に就きて水を飲む（石狩札幌の近郊）。

（三四）麥浪千頃、滿眸皆翠色、突兀として瀛笛兩三聲、煤煙一抹其間より起る（常陸、下總の境上、利根川）。

（三五）春潮雨を帶びて晩來急に、鱸魚網に上る穴道（シンヂ）湖の東（出雲）。

（三六）北上の河心、孤棹波底の月を穿ち來る（陸中）。

（三七）余自金陵月堂。謁蔣帝祠。初出北門。始辨色。行平野中。時暮春。人家桃李未謝。西望城壁。壕水或絕或流。多鵁鶄白鷺。迤邐近山。風物天秀。如行錦繡圖畫中（張文潛）。

（三八）煙雨空濛、漁人石に依りて四ッ手網を曳く、獲たり、鯽（フナ）、タナゴ三四枚。

（三九）西潭水流。傾沫成白簾。濶可七八尺。冉冉下注。滑而無聲。兩傍石崖峭立。苔蝕蘚暈。時有水珠毿毿滴下（宋濂）。

（四〇）黃金色の夕陽江面を射り、牛、隄上の草を貪りて徐行し、野老叱々す。

（四一）水伯即ち河靈の理想畫（時に暴烈、而かも常に平和、時に破壞、而かも常に建設、而して全躰よりせば人類の大恩主）。

（四二）未開墾地の沮澤、野生の燕子花、染むるが如き紫葩を狼藉と開き、水深き處、一群の淡紅なる桃花魚（ウぐひ）喩喁す（石狩）。

（四三）鎭火山の絕頂、火口湖の四圍に峭壁水より起り、湖底深くして測るべからず、水色澄徹にして藍靛の如く、四顧萬籟悉く絕ち、天地死するが如く沈寂に、物凄きまでに大平和を現はす處。

（四四）鱸鄉蟹舍說豐年。秔稻東湖熟最先。一雨新晴纔幾日。家家門外送租船。

（四五）筑波男女の雙峰、淡く紫嵐を纏ひ、相並びて仙姿を霞浦の水鏡に鑑す。

（四六）「上帝の無量壽の如くに汪々悠々と大河の流れ行く」處。

（四七）熊笹の中を分けてセン澤と云ふ所の上に至る溪を隔てゝ一つの瀑あり高さ數十丈半は霧となりて下る行過ぎむとする傍に長ヶ四尺餘りにして枝細く目なれぬ木あり（大山蓮花）白き花の色極めて

(四八) 鮮にして其形も香も蓮に同じ(信濃、上野境上の轟野又佐久間象山)。

(四九) 宿雨露れ、蘆芽抽きて滴らんとし、舟人相顧みれば翠眉悉く絲なり。

(五〇) 隄上、一杯の江水を酌みて酒に代へ、南朝名將の墳に酹し來る。

(五一) 舟行者皃、忽又無際(柳子厚)。

(五二) 千仞の斷崖、江面より突と起り、崖上古城あり、月黑くして孤梟鳴く。

"At the water's edge flowers are especially varied and luxuriant, so that the banks of a river are a long natural garden of tall and graceful grasses and sedges, the Meadow Sweet, the Flowering Rush, the Sweet Flag, the Bull Rush, Purple Loosestrife, Hemp Agrimony, Dewberry, Forget-me-not, and a hundred more, backed by Willows, Alders, Poplars, and other trees.

The Animal world, if less conspicuous to the eye, is quite as fascinating to the imagination. Here and there a speckled Trout may be detected(rather by the shadow than the substance) suspended in the clear water, or darting across a shallow; if we are quiet we may see Water Hens or Wild Ducks swimming among the lilies, a Kingfisher sitting on a branch or flushing away like a gleam of light; a solemn Heron stands maybe at the water's edge,

or slowly rises flapping his great wings; Water Rats, neat and clean little creatures, very different from their coarse brown namesakes of the land, are abundant everywhere; nor need we even get quite despair of seeing the Otter himself" — Sir J. Lubbock.

(五三) 濱に曁人の家居ありて前の杭に網をかけほし磯邊に小舟引きすてて物さびたる住居のさまげによく繪にも似たりけり(中略)半時斗りして雨風やみ名殘の雲も晴わたりて空も見るがうちにきよらかに日影の見えけるに岸の蘆の葉にかゝれる露をばら〳〵と風の吹みだすさま涼しさいやまさりぬ(北利根川の口)(鹿島道記)。

(五四) 天女廟外、一痕の皎月、神に褰するの少女群は暮潮を踏みて行く。

(五五) 對岸皆な梅、一道の香風、落花の片々を飄へしつゝ水を渡り來る。

(五六) いたこ出島の十二の橋を行きつもどりつ思案橋(常陸)(潮來曲)。

(五七) 艣を捕るアイノ人の劍木舟は火山(江庭嶽)の下を漕ぎて去り、湖面寂寞、會、眉の如き新月、岸上なる棋楠樹叢の間に懸る(勝振千歲湖)。

風景（河、湖、湾。詩、歌、畫の材料）

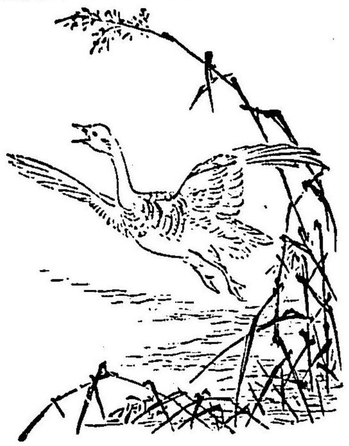
(五八) 水力の理想畫。

(五九) 角倉了以、剃髪道服、石塁を手にして大堰川の疏水工事を指揮する處。

(六〇) カエザル「戮」子は投げられたり」と絶叫し、鞭を揚げてルビコン川を渡る處。　魏文帝、楊子江に臨みて大に兵を觀、波濤の洶湧するを見て、「此固天之所以限南北也」と嘆じ歸る處。　晋祖狄、楊子江の中流を渡るに及び、楫を擊ちて「不清中原、而復濟者、有如大江」と誓ふ處。

(六一) 試掲逢而眺。不知爲何地。平流渺瀰。寒星涵影。見村燈數點於水木間。時有鐘聲。度江而來。宿雁磔磔驚起。羈思爲之悽愴。篙師云。是流山驛也。

(六二) 西岸翠松白沙。茅屋參差。富士峯已受旭光。如紅芙蓉。東岸赤壁劃立。老松偃蹇。是爲國府臺。（万根川）（以上二項安積艮齋）



（一七）日本の地質と衆議院議員選擧區

日本の地質と衆議院議員撰擧區

最近生紀日本衆議院議員撰擧者の椎所

山惟に峙ちて河惟に駛る、是に於てか流水は多量の沙泥を運搬して漸く幾分を所在に沈積せしめ、隨處に沖積層を化成し來り、尋で海洋に注がんとするや、河口に到れば河水流駛の速力は頓に減殺し、且つ海潮に壓倒せられ、爲めに運搬し來れる沙泥を海洋中に流出する能はず、遂に河口に沖積す、而して河流は沖積せし沙泥に障碍せられ、自由不羈に駛走する能はず、乃ち之れを避け、兩岐して海洋中に入る。是に於てか這般の沖積沙泥は三角洲を作る。實に沖積層と三角洲とは最近生紀日本の成素なり。

既に然り、最近生紀日本は沖積層と三角洲とに因りて成れり、沖積層と三角洲とは沙泥に因りて成れり、川河の流域に沿ひて延綿せり、即ち平坦なり、肥沃なり、灌漑に便なり、貨物の運搬に利なり、即ち上米の產所なり、富饒なる農家の在所なり、高貴なる地價を所有する者の寓所なり、即ち衆議院

議員選擧者の棲所なりとす。別に最近生紀日本が多數なる衆議院議員選擧者の棲所たる重要の理由あり。蓋し植物の最良肥料は實に該當植物を成立する物質を供給するにあり、即ち馬鈴薯には馬鈴薯を喰用せし者の排泄物を供給するを最も適切となす。日本人の主要なる喰用物は米穀なり、故に日本人の排泄物は即ち米穀の肥料に最も適切なるもの、日本立國の經濟たる米産は、日本人の喰料、日本人の排泄物と相互に密接なる關係を有つものとす。既に然り、日本の農業世界には牧畜の業未だ啓發せず、故に動物肥料を施用する絶少に、化學的肥料を施用することも絶少に、加ふるに運搬の利便も容易ならざるを以て魚類肥料を施用することさへ絶少なれば、他の歐米の農業世界と全然肥料を異にし、只管人糞に依頼して耕作物を營養する、是れ當代の現象なりとす。人糞の供給何の所にか饒多なる、人民の繁庶なる所即ち是れなり、人民の繁庶なる所何の邊にかある、沖積層の所在と三角洲の所在即ち是れなり。是に於てか知る、沖積層の所在と三角洲の所在とは、獨

り天然の幾多利便存するが爲めのみならず、特に米産國たる日本にては、米穀肥料の關係上、富饒なる農家の在所なるを、即ち衆議院議員選擧者の寓所なるを、高貴なる地價を所有する者の寓所なるを。語を略して謂へば、最近生紀日本は日本當代の衆議院議員選擧者の棲所なるを。語を略して謂へば、太古生紀日本、古生紀日本は峨々たり、蠢々たり、土壤の生産力は殊に痩薄たり、勞力を以て生産力の痩薄を補加せんか、人民は最近生紀日本にのみ聚合して、太古生紀日本と古生紀日本に寡少なるを如何せん。肥料を以て生産力の痩薄を補加せんか、人糞供給者の少きと、動物肥料、化學的肥料の絶少なると、運搬の不利不便にして魚類肥料を容易に分配す能はざるを如何せん。森林を所有せんか、材木を販賣するに市場の隔遠なると、運搬の不利便なるを如何せん、他の歐米諸國に比較すれば材木の價値殊に薄くして利潤の豐かならざるを如何せん、森林複産物の少くして得益の更に少きを如何せん。要するに太古生紀日本、古生紀日本は最近生紀日本に比較すれば、富饒なる農家の在所にあらざるを、高貴なる地價を所有する者

の寓所にあらざるを、即ち衆議院議員選擧者の棲所にあらず。

日本國の地形たる、細く長くして、中央には嵯峨たる大山系(即ち太古生紀日本若くは古生紀日本)の海岸線に幷行して連亘するあり。是を以て衆議院議員選擧區は、其の區劃の結果、太平洋岸にては太概一選擧區の北部は太古生紀日本若くは古生紀日本に屬して、南部は最近生紀日本を成立し、日本海岸にては强半一選擧區の南部は太古生紀日本若くは古生紀日本に屬して、北部は最近生紀日本を成立す。故に太平洋岸にては太概一撰擧區の北部にある者は南部にある者の爲めに控制せられ、日本海岸にては强半一撰擧區の南部に起る者は北部に起る者の爲めに壓倒せらる。

然れども日本の農業世界に牧畜にして啓發せば、太古生紀、古生紀の日本と雖も動物肥料を得べし。理化學にして啓發せば化學的肥料を得べし。森林複産物を多出し得べし、道路の開鑿、鐵道の敷設は運搬の利便を增進し、輙ち魚類肥料を得べし。森林材木の新販路を發見し得べし、以て此等の不平均は漸く消滅せんのみ、何ぞ憂慮するに足らんや。(鄙著「地理學講義」抜萃)

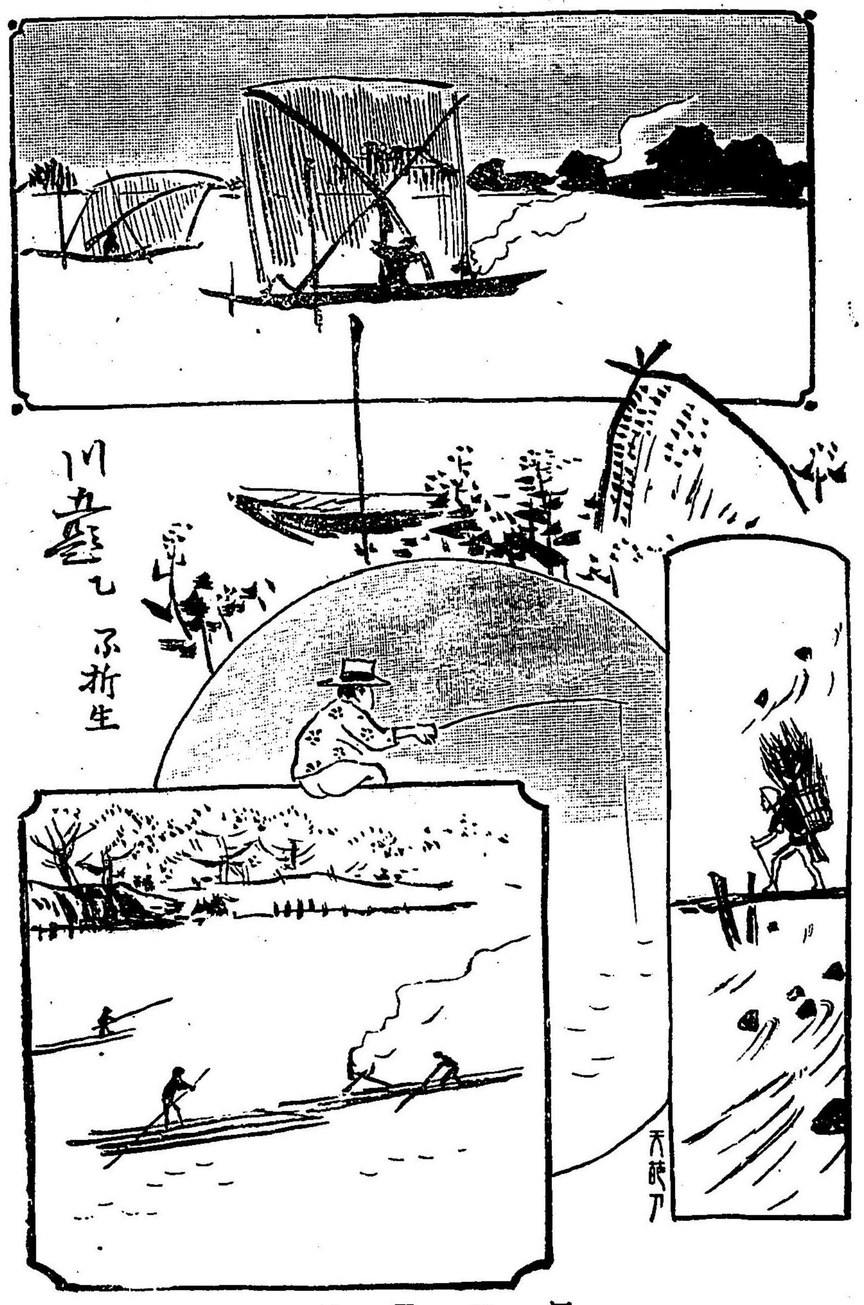
(一八) 印旛沼

一百年前、曠世の天才佐藤信淵(1769—1840 A.D.)、日本島の北陬より起り、其の大頭腦より穀蔬倍稔法、農政論、甲斐府養蠶の振作、高知府捕鯨の興起、江戸の遷都、蝦夷の開拓案、フヰリッピン群島の拓殖、滿洲經略の方針、銀行及び保險の工夫を發揮するや、其の立言する所極めて新創、而かも悉く冷靜なる科學と完然たる常識より造詣したるを以て、些も淺學者流の空疎蕪大なる見に陷らず、今に至るまで專門學家をして往々嘆服に堪へざらしむるものあり。唯だ何れの世を問はず、時に勢力ある者は膸々たる多數の俗衆なり、自己が頭腦の矮少なるに任せて他の大頭腦を理解する能はず、時流に超絶せる信淵の立言は冷嘲と熱罵との間に埋却せられ、其の身骨も亦た江戸淺草の古寺、寒草小碣の下に埋却せられ、以て古今東西に普通なる天才の末後を遂ぐ、而かも其の心神や遂に埋却せられず、後數十年、明治維新に到り國初の人豪齊しく信淵の遺著を讀み、大久保利通の江戸遷都の

印旛沼の開鑿
印旛沼遂に開疏せざるべからず

議、岩倉具視の蝦夷開拓論、西郷隆盛の征韓の案、皆な信淵の立言に據り、今の全國農區の分配論亦た信淵より胚胎し來り、農政に關する明治年間唯一の大作たるドクトル新渡戸稻造氏の著述亦た信淵に負ふ所少しとせず、而して印旛沼開鑿の方案亦た信淵の頭腦より孕み來る。

信淵謂へらく、日本の威信をして世界に顯彰せしめんとせば、先づ大に富力を增殖せざるべからず(理財論)、而して之れが順序は格物に據らざるべからず(理化學應用論)、既にして國富み兵强くなるとも(信淵は軍國の方針には水師即ち海軍に重きを置けり)、政權にして歸一せず、王覇各々分岐するが如きは、畢竟國家の大を致す所因にあらず、宜しく天津日嗣の皇孫をして政權の實行者たらしめ(政權統一論)、而かも皇孫にして政權の實行者たる以上は、京師の如き加茂河畔に跼蹐せる內陸の一渓谷は以て開發的の國都と仰ぐに足らず、乃ち都を江戸に遷移するを要す(江戸遷都論)、既に江戸に遷都せし以上は、江戸の背部たる奧州、蝦夷の不毛を開き(北海道開拓論)、更に其の前面なる伊豆七島、南洋諸島、フヰリッピン群島を經營せざるべ



河の風景

急湍の危橋　四ツ手網曳キ　渡シ場　鵜魚(すき)釣リ　筏流シ

「内洋經緯記」

印旛沼

からず(南洋經營論)、特に國都たる江戸を經營せんとせば、盛に内洋(東京灣)を經緯するを要す、内洋の水面は毎百年間に數町宛埋沒するの趨勢あるを以て、宜しく土木工事に依り一は浚渫して大艦巨舶の呑吐に利便ならしめ(東京灣築港工事)、一は新たに陸地を作りて生靈の棲息に資せしむべしと(東京灣埋立工事)、更に其の「内洋經緯記」に立論して曰く、

下總は元來凹陷の地多く水利宜しからず、大なる泥沼數所あり、年々水「災」に困める村落少なからず、然るに其近傍の河川を深くし滿水を落す時は其沼は皆自ら就きて肥良なる土地となり、此一國に於て凡そ十萬餘石の新田起るのみならず(新田開鑿)、水損の患を免るべし(水害除去)、其沼の最も大なるは印旛沼なり、同國の西濱檢見川の邊より漸々堀上りて沼に至り三十間以上の大河を作り利根川に通じ内洋より直に東海に出づるの水路となし(總房半島を迂回せざる爲めの横斷運河工事)、奥羽及び諸州より回船運漕の便を與ふるときは海舶風波の患難を免れ、不虞の變あるときは軍用及び都下人民の穀米に

印旛沼

缺乏なからしむべし(今の陸軍參謀部及び海軍水路部の太平洋と東京との內陸連絡論)

と、千古の活識なる哉。

水野越前守の印旛沼開疏

獨り信淵の立言に止らず、天明年間、德川幕府の閣老田沼主殿頭、印旛沼の開疏を起工し、土功四年、水路三分の二を成就し、而かも群毀の府となり、閣老を罷められ、工も亦た廢絕す。天保十四年、閣老水野越前守、更に沼の開疏を起工し、勇斷事に當り、土功の必成を期せしも、「仕事をすれば必らず反對を招く」との喩言に違はず、越前守も亦た凡衆庸俗の毀謗に中てられ、落成するに垂んとして其職を褫はれ、工も亦た即ち罷む。爾後印旛沼の開疏は事物の成就せざることの謎となり、俚諺に「しくぢり大名に堀らせたい」と歌ひ(此の短歌宛として嫉妬深き島國根性を代表す)遂に印旛沼の開疏は今に不能事と爲り了れり。然れども印旛沼の開疏は、一、運輸の利便上に、二、國都の經營上に、三、軍事上に、四、新田の開鑿上に、五、水害の除去上に、遂に起工せざるべからず、況んや測量及び土木學の啓發せし今日に當りて之れ

田沼主殿頭の印旛沼開疏

を成就するは然まての難事にあらざるをや。聞く治水協會、此沼の開疏を主倡し、常總の有力家亦た起工の事を謀り、政府も亦た帝國議會に利根河口改修工事案を提出し、尋て印旛沼開疏にも意ありと傳ふ。信淵の立言の現行せらるゝもの蓋し期すべけんか。

三十三年十一月初旬、大日本農會及水產會聯合品評會の當事者を以て印旛沼畔に淹留すること數日。同六日、篙師友吉を質し舟を沼上に泛べて遂に佐倉町に入る。友吉篙を中游に停め、喟然として曰く、奴、此沼畔に生れ沼畔に人と爲る玆に四十有五歲、利根の河水漲溢すれば沼輙ち溢れて田園を汎濫し、而かも平時に水淺くして巨舟を泛ぶべからず、魚屬も亦た少くして味自から佳ならず、沼は有れども畢竟用なきのみ、若し夫れ開疏の工事成り、沼畔に十萬石の新田を得ば、沼畔民人の樂福果して如何ぞや、奴の如きは輙ち舟人を停めて撫々たる農夫たらんのみと。會、山水を四顧し坐ろに指點するに、平原湖の本然として蜿岸の兀立するなく、巉巖の磊磈たるなく、山嘴の斗出するなく、平々凡々にして些の奇警なく、唯だ萩花狼藉

として濁浪其根を噛み、澤上の將門山荒れ果てゝ霸氣の銷沈するを見るのみ、乃ち友吉を顧みて曰く、若し夫れ開疏の工事成り、田疇洞然として海の如く、黃雲二十里、底深き運河其間に流れ、白帆片々往き又た來り、其上より紫を籠めたる筑波の峯尖突兀と露はれ、黃色、白色、紫色の相映發するに至らば、今の、平凡一奇なきに比べ見て果して如何ぞやと、友吉掌を拍ちて之れを讃す。蓋し土工水利を起すや、必ずや其の所在の風光を破壞す、利、美と相調和せざるは今の通患たり、而かも此沼の開疏は獨り利を加ふるのみにあらずして亦た美を添ふるもの果して玆にあり、遂に筆を沼畔に呵して印旛沼開疏の記を作る。

日碑に曰ふ印旛沼の開疏を初めて計畫しゝは平親王將門なりと。江戸及び關東地方の俚語に、愚なる事、無益なる事を指し、印旛沼埋もネー」と言ふ、乃ち科學の力に依り、沼を開疏し埋立て、以て此の如き俚語を掃蕩せざるべからず。

外敎支那に入るの行路

景教の入來

（一九）景教及摩尼教

西洋史の所謂國民的組織の淵源たるユーフラーツ河（唐書の大食國之弗利剌河）が今の如く全然と北よりして南に向ひて流れず、古代には略ぼ西よりして東に向ひて馳り、今のアム・ダリヤ河（漢書の嗢水、隋書の烏滸水、大唐西域記の縛芻）が今日の如くアラル湖に注がずして直ちに裏海に入りたる時代に當りては、西方の人種、文物、貿品は、此の二河の流域に沿ひて東方に入り來り、漢書、唐書の安息（Parthia.）大夏（Bactriana.）康居（Sogdiana.）の平原を經、遂に支那に入りたるもの甚だ多し、景敎、摩尼敎の如き實に是れなり。

景敎即ちネストリヤ派（基督敎の新義派）の支那に入りしは東漢の末、三國の頃なりと云ふ（250A.D.）然れども支那史書の以て之れを考證するに足るものなく、泰西の史書にも亦た極めて資料に乏しく、亞剌比亞史家の零碎せる紀事に據るの外は東西の史乘ともに些も考證すべきもののわらず。唯だ泰西の史乘に明記せるは、ネストリヤ派の一僧が支那より竊かに蠶

卵を携へてコンスタンチノープル即ち後漢書、唐書の大秦國に歸來せしと云ふ一事是れなり(550A.D.)。即ち基督教の傳道師は當時早く既に支那に入りたることを證するに足る。爾來大秦國即ち東羅馬若くはシリヤより基督教徒の支那に入る者漸く相踵ぎ、遂に唐の太宗の貞觀九年(635A.D.)シリヤなるネストリヤ派の傳道師阿羅本(Olopun.)が、バイブルを携へて支那に入り來るに至りて、景教即ち基督教の新義が支那に傳來せし事實は最も顯著となれり。一千年の後、明の熹宗の天啓年間(1625A.D.)、陝西省西安府(古の長安、即ち唐の帝都)なる崇仁寺の境内に發掘されたる碑文に曰く、

其惟我三一妙身(Trinity.)無元眞主阿羅訶(Eloah.)歟判十字(Cross.)以定四方鼓元風而生二氣……素蕩之心本無希嗜洎乎沙殫(Satan.)施妄鈿飾純精間平大於此是之中……於是我三一分身景尊彌施訶(Messiah即ち Saviour.)戢隱眞威同人出代神天宣慶室女(Virgin Maria.)誕聖於大秦(Syria.)景宿告祥波斯賭耀以來貢(バイブル中の故典歷々として見ゆ)……太宗(唐)文皇帝光華啓運明聖臨人大秦國有上德曰阿羅本(Olopun.)占青雲而

唐太宗と景教

祆教

高宗と景教

載眞經望風律以馳艱險貞觀九紀(635A.D.)至於長安帝使宰臣房公元齡摠仗西郊賓迎入內翻經內殿問道禁闈深知天眞特使傳授貞觀十有二年秋七月(938 A.D.)詔曰……濟物利人宜行天下所司即於京義寧坊造大秦寺一所度僧二十一人

と、以て唐の太宗のネストリヤ派を賓迎せしを知るに足れり。蓋し太宗は絕代の天才なり、度量寬宏にして淸濁を併せ呑み、創業的の天才に加ふるに守成的の天才を兼有せし者、太宗や此の如き豁達英邁の資なるを以て、基督教到れば輙ち之れを容れ、是より先き貞觀五年(631A.D.)ゾロアステリズムの波斯より到るや、輙ち亦た容れて祆教と名づけぬ。蓋し西方なる文物思想の支那に入り而かも亦た支那の文物思想の東西に波及せしこと唐代の如く盛んなるはなし、宜べなり支那人自らも將た外國人も今に至るまで支那を艶稱して「唐土」と稱へ、其の人民を「唐人」と喚ぶことを。

唐太宗の崩じ、高宗繼ぐや(650—83 A.D.)、亦た基督教を奬勵す、碑文に曰く、

高宗大宗克恭纘祖潤色眞宗而於諸州各置景寺(Church.)仍崇阿羅本爲鎭

國大法主

玄宗と景教

と。唐玄宗(713—55A.D.)も亦た基督教徒を賓迎せり、曰く、

元宗至道皇帝令寧國等五王親臨福宇建立壇場……天寶初令大將軍高力士送五聖寫眞寺南安置賜絹百匹奉慶睿圖

肅宗と景教

とあり。唐の肅宗(756—62A.D.)も亦た基督教を輕視せず、

肅宗文明皇帝於靈武等五郡重立景寺

代宗と景教

とあり。唐の代宗(763—79A.D.)に及びては、實に

代宗文武皇帝恢張聖運從事無爲每於降誕之辰錫天香以告成功頒御饌光景衆(Nestorians.)

德宗と景教

の如きに至れり。唐の德宗(780—805A.D.)も亦た然り、曰く、

建中聖神文武皇帝(德宗)披八政以黜陟幽明闡九疇以維新景命……大施主金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯(Issac.)……中書令汾陽郡王郭公子儀初總戎於朔方也肅宗俾之(伊斯)從邁雖見親於大內不自異於行間爲公爪牙作君耳目(後段は伊斯の事績を頌揚せしものなり)

郭子儀と景教

と、以て有名なる郭子儀も亦た基督教に歸依せしことを知る、其の伊斯を尊信するや此の如し、宜べなり地を捨てゝ此教の爲めに寺を造りしことを。基督教の古代なる支那に盛行せし事實を記銘するの碑即ち「太秦景教流行中國碑」は、唐の建中二年(781A.D.)即ち郭子儀死するの年、ネストリヤ派の傳道師景淨(原名Adam.)の長安に建つるものに係る、其の文辭の古勁なる其の字躰の遒嚴なる(我國の書家に碑文の摺本に依りて古字躰を習ふ者あり)、唐代に建立せしものたるや疑なく、且つ歐洲なるワイリス、パウテ井エー、レッグ三學士の精緻なる稽査に依り、其の後世の僞作にあらざるを證明せり、況んや碑文を撰せし景淨と同時代に出版せし佛僧の紀錄「貞元新定釋教目錄」中に景淨の事を記し、且つ「彌尸訶教」(Messiah教即ち基督教)の語あるをや、基督教の古代の支那に盛行せしや知るべきのみ。

「太秦景教流行中國碑」

景教以後の支那に於ける基督教宣教師

若し夫れネストリヤ派の支那に入りたる以後五百年、羅馬法王ニコラスの派遣せし、フランシスコ派の傳道師モント・コルビノの元の世祖に優待

されたるが如き、其後三百年、法王クレメントの派遣せしゼズィト派の傳道師伊太利人利瑪竇(Matteo Ricci.)の明の神宗に師遇されたるが如き、同獨逸人湯若望(Adam Schaal.)の明の毅宗の宮中に入りて說法せしが如き、南懷仁(Verbiest.)の明の桂王に信賴されたるが如き、其他明代に當り伊太利の傳道師艾儒略(Jules Aleni.)、西班牙の傳道師龐迪我(Didacus de Pantoja.)、葡萄牙の傳道師陽瑪諾(Emanuel Diaz.)の漢文を以て地理、星學、曆法の有益なる著述をなしゝが如きは、東西の史乘に多く散見するを以て復た贅せず。

摩尼教

摩尼教の由來

摩尼教は之れと同時に波斯に行はれたるマヂ(Magi.)教と略ぼ同音なれども、全く別物に屬す。此教は實にヲストリヤ派基督教即ち景教より出で、波斯人マニが神託と稱へ、景教と拜火教(祆教)とを混和し、更に佛教を加味せし一種の宗教にして、要するに景教の外道たり。是より前、波斯には太古より神火を拜崇せる强盛の一宗教あり、ゾロアステルの開旨に係り、清淨潔白を以て教義の根本となし、東方に布教して遂に支那に入り、晉の以前(200

A.D.?)、既に支那に傳はりたりと唱へ、唐の太宗の貞觀五年(631 A.D.)に至りては、敕令長安崇化坊立祆寺、號太秦寺。又名波斯寺」と云ふを見れば、其の益、支那に盛行しゝを證するに足る。既に然り、波斯(安息も此國の內にあり)には太古よりの祆教と太秦より傳來のヲストリヤ派即ち景教と併び行はれ、此間に起りて耶蘇基督の遺業を繼紹すと唱へ、二教を攙梅し、更に佛教、大乘の一部分を加味し、遂に摩尼教なる一派を開きたるものとす。現時西藏人が日本人の南無阿彌陀佛の名號を唱ふが如くに常に唱ふる所なる六字大明呪(Vidya shadakshari.)の「唵麼抳鉢訥銘」は、同國人は俗に之れを「摩尼」と略稱し、又た「麼抳」は如意即ち佛陀の符牒なりと云ふことなるが、ニの新教旨に此等の事と何等の關係もなく、宗祖其人の名を直ちに音譯して附名せしものなるか、將たマニの教旨と佛教とは一部稍、似たる點もあれば、當時の唐人が佛典中に會、「摩尼」の字あるを以て、輒ち此く附名せし者なるか、其の孰れなるやは知るべからずと雖も、要するに摩尼教は佛教にあらず。又た摩尼寺を「禮拜寺」と喚べるが「禮拜」の二字は固より佛典中

の字なりと雖も、支那にて「禮拜寺」と云へば、普通佛教以外なる宗教の寺院を指し、內地にある回教の寺院を普通に「禮拜寺」と喚び、泉州府に遺存せる回教寺院の麼㮈の如き、清人は其の回寺たるを知らずして單に「禮拜寺」と稱ふ、故に禮拜寺とは佛教禮拜の寺院を指すものにあらず。

摩尼教の支那入來

摩尼教の支那に入りたる起因は詳かならず、唐の武后の時(684—705 A. D.)、其僧二宗經を持ち來りたる以來、或は玄宗の開元二十年(732 A. D.)に其の假りに佛教を冒かして邪見衆を惑はすとて嚴に禁斷を加へ、或は肅宗の寶應元年(762 A. D.)專ら此教に歸依する回紇人(Uigurs.)が兵を擧げて入り援け、東京(洛陽)を恢復して安史の亂を平げ、或は代宗の時(763—79 A. D.)回紇人の西京(長安)にある者をして摩尼寺を建てしめ、大雲光明の額を賜ひ、或は憲宗の時(806—20 A. D.)、新に摩尼寺を建てたるなど、皆な以て此教の當時支那に盛行せし形勢を揣摩するに足れり。而して西京及び荊、揚、洪、越の諸州摩尼寺あり、皆な大雲光明寺と稱へたるもの、佛典の「摩尼」が如意球を意義し、西藏にては眞の光明を意義すると關係あるか、將た無きか、兎も

大雲光明寺

あれ此教の意義、文字、戒法に佛教と同一なるものあるは事實なり、同一なるもの多々ありとて佛教にはあらず。佛教は當時支那に最も盛行し、且つ飜譯も太概成就しゝを以て、同時代の外教は新入者として後進者として勢ひ幾分の力を佛教に借らざるべからず故に佛教とは根本的に相違せる景教即ち基督教にして當時の佛僧が紀錄せし「貞元新定釋教目錄」の中に、釋教は佛を奉じ景教は彌尸訶(Messiah 即ち Saviour.)を信じ、其の差違あること涇水と渭水とが別に流るゝが如き者なりと、特筆大書せし此教すら、猶ほ且つ力を佛教に借り、「寺」「度僧」「大法主」「壇場」「大施主」「袈裟」等と佛教中の各般なる文字を使用せるを見て知るべく、今の基督教徒が「僧」の字を忌みて「傳道師」「牧師」「長老」等の字を用ひ、「寺」の字を避けて「教會」「會堂」と喚ぶが如くならざるなり、而かも當時にありては景教即ち基督教すら佛教中の文字を使用することと猶ほ且つ此の如し、況んや一部分を佛教の宗義の中より借り來りたる摩尼教にして、其の意義、文字、戒法の佛教と稍〻同一のものあるは偶爾にあらず、而かも摩尼教と佛教とは全然別種たり。

(一一〇) パラマッタ河及ウエントウオルス溪

(濠洲新南ウエールス州)

丸善書店にあるの日、ダーウヰンの「博物家世界周航紀行」を讀み、濠洲青山(Blue Mountain.)ウエントウオルス溪(Wentworth Gap)の奇勝を知るや久し。シドニー府に淹留する一旬、濠人亦た嘖々として其勝を艷說す、以爲らく一游せざるべからずと。溪は府を距る〻こと西七十哩、山深く地幽なる處にあり。時に予將さにバサースト地方を巡覽せんとす、バサーストはシドニーを距る〻百四十五哩、內陸牧羊平原の中心市場なり。因りて濠車に剳じ先づ溪の勝を探り、而して後バサーストに到らんことを思ふ。既にして復た以爲らく、鐵道の便を借るは尋常一樣の事、聊か逸興の少きに似たり、若かず行路の迂遠なるも逸興の多きにはと。乃ち地圖を按じ、濠洲旅行案內記を參考して前途の行程を描畫しぬ。四月十三日、晨起秋晴、游意勃動、乃ち鉛筆一枝、耐軒詩草一部を携へ、キングス街埠頭に到り、パラマッタ河行の小濠船に

搭ず。上等船客は唯だ年少なる紳士三名のみ、共に煙を喫し且つ談じ且つ笑ふ。予傍にあり、其說を聞くに、言々シドニーの事を痛罵極罵せざるなく、且つ本國政府の植民地治制を毀剌するもの〻如し。談終る時一揖して三士の鄕國を問ふ。三士答へて曰く、僕等はヴヰクトリヤ州人なり、メルボルン大學の學生にして、秋季休暇中此の地方を歷遊する者と。因りて又た問ふ、英國より移住せし者なりやと。答ふ、否僕等は植民地人(コロニヤルス)なり、メルボルン府に出生せし者なりと。三士共に談泊にして予を異邦人視せず、交〻日本の現情を諮詢す。既にして談濠洲の近事に及ぶ、一士予に謂て曰く、足下シドニーを喜ぶ者乎、シドニーは市街人民に至るまでメルボルンに劣るや數等なり、且つ僕はシドニーにて見る所聞く所一として不平不快ならざるなく、其の近き實例はメルボルンにて甘冽なる井水を飮用し居たるに、會〻此州に遊びてより其の汚濁なる水の爲に頓に下痢を起せり、是れも亦た新南ウエールス州に對する不平の一なりと、放言して呵々大噓す。蓋しヴヰクトリヤ州(メルボルン首府たり)と新南ウエールス州(シドニー首府たり)

パラマッタ河上の風光

とは、近年相互に繁盛を爭ひ、兩州人の間に猜忌嫉妬の私念なきにあらず、三士のシドニーを毀刺するも職として是に由るものならん。時に船漸くハンタース丘の麓を過ぐ。丘の左、堂塔の幽樹茂林の間に隱見するものをヴヰラ・マリヤ寺となす。寺の右、長虹の空に跨るが如きものはファイヴ・ドック鐵鎖橋なり。兩岸の煙樹翠黛滴るが如く、風光明媚、眞個に一幅米家の畫圖に似たり。蓋し人生の快樂は、山を觀、水を眺めて興の趣く所に隨ひ倘徉自適するか、將た亦た己れが嗜好する所の快話奇譚を聞くにあらん、此の風景に會ひ、又た三士の快話を聞く、果して人生の快樂を盡くすものと云ふべし。午前十一時三十分、パラマッタ埠頭に着し、直ちに瀛車に搭じてパラマッタの市街に到る、鐵道に依りて陸行せば、シドニーより此地まで十四哩に過ぎずと雖も、河流を溯りて船行すれば二十二哩なり。三士、予を公園外の酒舖に誘ひ、饗するに一盞を以てす。三士は此地より直ちにシドニーに還り、予はウエントウオルス溪を經、バーサストに歷游するを以て、此所に握手して別を告ぐ。公園に入るや、槲樹鬱葱、節秋に入るも葉々北半球の如くに黃

パラマッタ市

ペンリス町

ミエー平原

ばまず、一紳士の椽栗を拾ひて其の携ふる所の婦女に献ずる者あり、予を見て誰何す。予答ふ、日本の一旅客なりと、彼れ自己のポッケットを敲き莞爾として曰ふ、萬里の日本より游覽に來る、君が財嚢は定めて如何と。園後流水涓々、岩石狼藉、鉤を垂るゝ者あり傍にある一童子ハヘの如き魚四五尾を携ふ。市街を巡覽し、停車場側の一旅亭に午餐す、炙牛のサーロイン、南瓜などを供す、パラマッタの近郊は河水に瀕して土壤最も肥美、是を以て肉類、果實も亦た最も肥美なり。午後二時、ペンリス町行の瀛車に上る。三時三十分、ペンリスに着す。時に予は徒歩して青山に登るの意あり、乃ち殊更に瀛車を下り、ペンリスの市街に出で、チビヤン河(ホークスベリー河流中の主流)の大鐵鎖橋を過ぎり、エミュー平原に到る。會〻十歳ばかりの兩童兒の學校より歸宅するものあり、之れと同伴す、一人の無花果を入れたる籠を手にする者曰ふ、兒は學校にて英國史を習ひ居れりと、予戯れに問ふ、佛蘭西より來りて英國に打ち勝ちし者は誰ぞと、童子答ふ、ウヰリヤム・ゼ・コンクエラーなりと、予然り々々と答へ、相嬉笑して二三哩を過ぐ。既にして兩兒と別れ、予は獨

り青山を指して閑歩したり。時に路漸く險しく漸く悪しく、加ふるに前日來の降雨を以て到る處泥濘を極め、轉た行歩の艱難なるを覺ゆ。會〻後方より一壹兒の木材を荷積みせる馬車を驅り來り、予を見て「ヨン、ゲット、アップ、〳〵」と喚ぶ。乃ち其車に上り、青山の麓に達し、童兒に六ペンスを與ふ、彼れ殊更に憐れなる容顏を作り、一シリングを乞ひて止まず、遂に之れを與へて車を下り、復た徒歩して青山登臨の途に就きぬ。時に夕陽西山に曰づき、四顧人無く、秋風蕭踈たり、唐詩を放吟し、且つ唱へ且つ往く。蜜柑の黄熟せる園圃の間を過ぎり、ナップサック・カレイの複道を渉り、漸く登りてルークスヴァルに到る。山下を瞰望すれば、暮雲既に崩れ、殘紅西天に返射して、瞑色漸く合せんとし、平蕪沃野地平線を限り、チピヤンの長江其間に曲折して素絲を引くが如く、時に靄霧起りて風光俄かに改まり、人をして端倪すべからざらしむ。此所に小憩すること數時、羊を運搬する滊車の來るに會ふ。即ち囑して其の機關車に搭ず。車中に幼童兒女の學校より歸宅する者八九あり、予が頭髪容貌を熟視し、相顧みて笑ふ。此輩は皆な山下の學校に

通學し其家は各〻山上にある者なり。州政府特に無賃乘車を許容し、且つ機關手も亦た特別に意を用ひ、此等幼童出入の時は自から手を下して上下せしむ。學童を愛敬するの風喜ぶべし。幼童兒女の車を下るや、喜色滿面、各〻を揚げて「ハラー」、「ゴット、バック」、「マーマ」、〳〵、「グランドマ、〳〵」と喚び、其影遂にユーカリプタス樹の林叢中に入り、喚聲も亦た漸く微かに滊車も亦た漸く進行す。八時、ローソン停車場に着し、車を下り青山亭(Blue Mountain Inn.)に投ず。亭婦、老母と共に懇ろに予を待ち、コールド牛肉を供す。亭にシドニーの一老翁其の家族を率ゐて轉地療養するあり、予の姓名を日本字と羅馬字とにて記さんことを需め、曰ふ、Shiga Shigetaka とは實に長き名なる哉と。予曰ふ、Thomas Babington Macaulay の如き William Makespeace Thackeray の如き、予の名より更に長きにあらずやと。老翁、令嬢及び嬢の許嫁の紳士相驚きたるもの〳〵如く、眼を圓くして曰く、足下は定めて英國に遊び教育を授かりたる者なるべしと。予曰ふ、予は日本のみにて教育を受け、且つ國外に游旅

ウエントウオルス渓

するは此行を以て初とす、然かし日本にて予しきの知識を有する者は此の青山の巌石よりも多しと。翁等曰ふ、驚くべき國なる哉、驚くべき國なる哉と、十一時、枕上に耐軒詩草を覽つゝ寝に就く。

十四日、晴、午前亭を發し、滊車に搭じてウエントウオルス村に到る。乃ち先づ渓の勝を探らんと欲し、車を下り、農夫に道を問ひ、徒歩すること三十町許。既にして一天俄かに濁き、忽ち身は高巌の峭岸上にあり。左右を眺れば、崖谷煙霧の間に隠見し、直立千仞其の深サを窮むべからず、伏して之れを望めば、股慄き足悼へて意況自から索然たり。時に天籟颯々として渓中に起り、ワットル樹翠瑟を雲中に鼓するが如く、怪禽之れに和して其聲凄緊たり。渓の幅、長サ共に凡そ一哩、宛然として海水なき巨灣の如し、灣側を廻ぐり、渓を下り、巌巌を蹈み亂崖を穿ち、ウヰーピング・ロック(啼巌)の瀑布に到りて一息す。忽ち白雲眼下に往來して群峯を隠現し、仰るゝが如きものあり、曜るが如きものあり、舞ふが如きものあり、横廻峻拔、譎奇變幻極りなし、真に全世界中の奇觀なりとす。崖上一亭あり、亭中人なし、登臨の客皆其の姓名、

鄉國、年月日を壁に題するを見る、予も亦た倣ひて、紀元二千五百四十六年西暦千八百八十六年四月十四日、日本札幌シガ・シゲタカと書して去る。時將に正午ならんとす乃ちウエントウオルス村に還り、再び滊車に上りて、ヴクトリヤ嶺頂に達し、停車時間中一旅亭に入りて午餐し三時山を下りてリスゴー町に到る。滊車此嶺を上下するに屈曲線軌道を用ふ、是れを濠洲建國以來の大工事となす。滊車嶺を下る時、窓を開きて鐵道の兩側を望めば、極目千里牧場ならざるはなく、青草羊々、鳴羊咿々、人をして曠世の感あらしむ。五時、パサースト市に着し、一旅館に投じて宿泊せんとす。乃ち三四の旅館を敲くに到る處皆な謝絶す。是に於てか初めて支那人と誤認せられしことを悟り、警察署に到りて日本人たることを説明し、且つ心ならずも傲然として「予は日本の博物學者なり」と述べたるに、警吏は承了して、氣の毒に思ひたるにや、日を極めて市民の不禮を謝し、且つ慇懃しつゝデューク・ホテルと云ふに案内したり。時に薄暮皎々たる秋月はヴクトリヤの嶺頂に懸る。乃ち見る所聞く所を直記し、以て他日の備忘に備ふと云ふ。

明治十九年四月十四日、デュークス・ホテルに夕餐後、客室に入り暖爐の側に坐す、諸客予を奇とし相擁して交、日本の事を問ふ、館の主人は愛蘭より移住せる者、故に架上にムアーの詩集を備ふ、予の之れを披きて理解するを見、諸客皆な最と不思議の感をなし無言にして凝視す、九時市の劇場にコックス氏主唱の唱歌音樂會あるを聞き、入場券一シリングを投じて入り、「メル王」の曲等十數番を聽く、場閉づ、十一時半、館に還り、枕上に鉛筆を把り、睡を忍びて燭下に此の紀行文の半を草す、筆を收むる時、ヒスコバル寺の時辰鐘方さに午前一時を報ず。

"But the face of thy river—the torrented power
That smites at the rock while it fosters the flower—
Shall gleam in my dreams with the summer-look splendid,
And the beauty of woodlands and waterfalls blended:
And often I'll think of far forested noises,
And the emphasis deep, of grand sea-going voices."

——Henry C. Kendall, N. S. Wales, Australia.

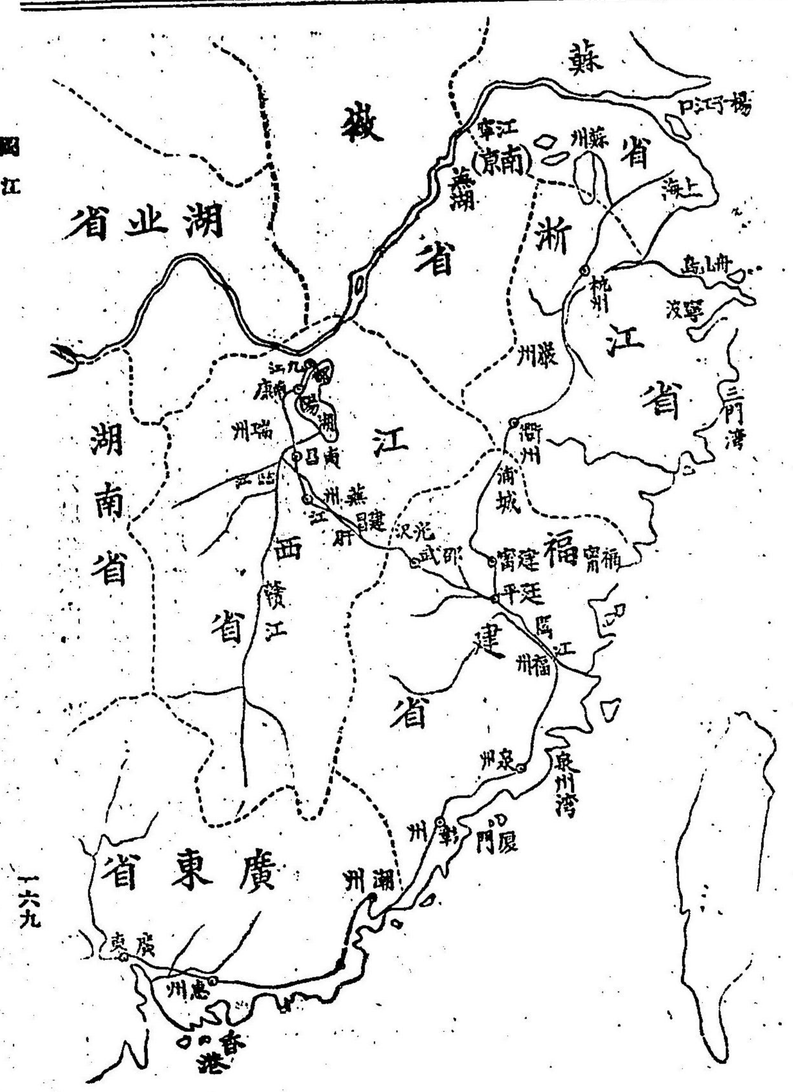
（二一）閩江

福州府（福建省城）より楊子江上の九江府に到る行途を啓くに當り、先づ頭腦を困勞せしめたるは通譯の事なり、蓋し福州語なるものは閩江の溪谷の下游百五十里の範圍にしか通ぜず、俚諺に「福州語は東西南北一日程しか通ぜず」と云ひ、而して閩江溪谷の中游には延平語なるものあり、上游には邵武語なるものあり、更に南嶺の險を越えて楊子江の灌域に入れば江西官話にあらずんば通ずる能はず、乃ち外務省留學生池部政次氏に通譯の事を囑托す、氏快く然諾し、支那服を新調し頭髮を剃り假辮髮を着けて同行せんとを約せらる、通譯は則ち得たり、次は食料の事なり、前に安溪、永春（福建）の境上なる山中に入るや、當初相應の用意をなしゝに係らず、中途にて食料に窮乏し僅かに甘藷などを以て飢腹に充て、爲めに健康を毀ひ久しく福州の温泉にて靜養したり、是に於てか江西省の中部に出づるまで前途三十日間の麵包、ビスキット、鑵詰、ジャム、牛酪、果物を準備したり、準備全

閩江

く丁りたるを以て、發途の前日、福州府井樓門外の温泉場にて在留の日本人及び知己の支那人と撮影す、南昌府知劉學恂氏も亦た遠く來り會せらる、氏は有名なる林則徐の實孫にして改革主義を主唱し、日本の文物輸入に鋭意なるの人、發途の日、豊島領事の夫人及び前島直氏(「閩報」主宰)の夫人は各手から日本風の餡を調へて閩江の舟中まで贈られ、吉田大尉海軍駐在武官は日本より舶載せし鹽引鮭を贈られ、日東洋行主人佐藤氏は日本風の饒餅を贈られ、其他日本の鹽カラ、鯛のデンブ、福神漬、餅菓物などを思ひ〳〵に贈られ、各長途の内陸旅行中に復た食料の窮乏と劇變とに依り健康を毀ひたる故轍を踏むなからんことを懸念せらる、諸君子の厚情感激するに足れり。

三十三年一月七日、福州府南臺の苔前山下よりハウス・ボートを貸し、雨を衝きて閩江を溯る、氣象は客腦まで殊に暖和なりしも、新年に入るや一日より東北時風(ときかぜ)吹き來りて、寒氣頓に加はり(少しく早き樣なれども東北時風の季節に入りたるならん)而して雨一日だも止まず、閩江の水爲めに平



常より高きと六尺に至る。午後六時半、洪山橋（ホンシャンチャオ）に達す。今の橋は花崗石を以て造くり明の成化十一年架する所とす。去年十月十二日、日本人三名が支那人の群衆より銃撃されたるは此所なり。橋を隔てゝ兩岸に小驛あり、人口合して大約七百あり。此夜ボート中に泊す、元の薩都剌（雁門）も亦た此所に夜泊し、感懐を寫して曰く、「勝地標孤塔、遙津集百船、岸廻孤嶼火、風度隔村煙、樹色迷芳渚、漁火起暮天、客愁無處寫、相對未成眠」と、頗る予と同一の情緒あり、嘗て國分青崖より雁門の詩の批評を聽く、青崖爲めに其の所作の清麗なるを說く、今や身は恰も雁門句中の人となり、而して青崖の批評を聽く能はざるを慨む。

八日、雨又雪。午前九時、洪山橋より小蒸汽船に搭じ閩江を溯る。溯ること五里、小橋（シャオチャオ）の邊に至るや、二水合併して閩江の流幹を作くる。五里芋原（イーユエン）、十里懷安（ホアン）、十里白石頭（パイシートウ）に至るまでは、兩岸坦平にして四顧浩渺、人をして眞に太陸の江水を行くの感あらしむ。白石頭を過ぐるや、花崗岩の山嘴は直ちに江水に迫り來り、舟行窮まるが如くして復た開け、十里甘蔗洲（カンチューチョウ）、十里竹崎（チューチー）、十里葉洋（イーヤン）に至るまでは兩岸坦平となり、荔枝、桃、蜜柑、甘蔗、落花生を多く植ゑ、人は雨笠を被ふりて青綠の間を衝きて行く處、頗る畫趣あるを見る。葉洋以西は兩岸丘陵漸く迫り、七里査溪（チャーコイ）、三里白沙（パイシャー）、五里馬坑（マーカン）、二里小瀨（シャオライ）、五里大瀨（ターライ）に至りて丘陵全く江水を壓し來り、水幅も亦た狹溢となる。然れども岸上には洪積層ありて道路（延平街道、即ち江西省へ出づるもの）を其上に築き、丘陵も亦た到る處岸上のものは江面より六十尺の高度あるに過ぎず、能く百尺以上に及ぶもの少し。七里大麥溪（タイマイコイ）、十三里清敎塘（チンファンタン）、二里半石仁鋪（シーレンプー）、二里半湯院（タンユエン）に至るや、岸上の丘陵は六十尺以上となり、荔枝、果樹を植ゆる漸く少し。湯院の對岸に下崎（シャーチー）あり、江面上三百尺もある山頂に觀音閣の高塔あり。三里蒼灣（ツァンワン）、七里梅埔（メイプー）、十里閩清渡口（ミンチンドゥカウ）、五里爪園塘（コワーユエンタン）、五里小裝（シャオチョワン）、五里大裝（ターチョワン）に至るや、兩岸の丘陵悉く禿にして復た一木を見ず。五里安陵溪（アンリンコイ）、十里謝灣（シエーワン）、五里牛頭塘（ニウトウタン）、五里大盈瀨（ターインライ）、五里小盈瀨（シャオインライ）、五里水口驛（スイカウ）に達す、時正に午後九時四十分なり。

水口驛は蒸氣船可航の極點に係り、此所より水上は閩江の所謂八百四十二灘ありて、支那形の小舟にあらずんば能く溯るべからず。豈に滊船可航

の極點のみならんや、此所より風土生産全く一變し、俚諺の「水口驛以上は榕樹を植ゆる能はず」と云ふが如きは、全く亞熱帶榕即ちバンヤン・トリーは亞熱帶にあらずんば生育する能はずを去りて温帶に入るてふことを言ひ顯はすものとす。要するに水口は低地と高地との境界なり、平水と瀧水との境界なり、亞熱帶と温帶との境界なり、多物産地と粗天然物産地との境界なり、古より陸上に水上に關門を建てたるもの故なしとせず。朱文公の閩關（閩は「水口」の二字を合せしもの）を過ぐるや、「依舊青山綠水多」の句あり、好く此間の風光を咏ずるもの。福州より水口に到る太約二百里、其間の地質は單調にして悉く花崗岩なり。

九日早天、池部氏と共に西に向ひて去る。乃ち福州より此所まで見送られたる桑田豊藏、水谷彬兩君に東京專門學校々友の二君に別る。時に飛雪紛々、別かるゝに臨み、二君に寄せて曰く、

君不見閩江沿沿九百里、水脈遠出白雲裏。我行應穿白雲去、欲入中原遊吳市。中原著花無盡生、山河破碎任人取。呼嗟時事畢竟有二耳、進則爲虎

退則鼠。番鷄亂號水口關。曉出關門飛雪寒。高歌一曲跨大馬、揚鞭笑指天邊山。

午前十時半、支那形舟を買し閩江を溯る。江は殆んど正東に向ひて駛下し、岸上よりは六十尺乃至百二十尺の丘陵連亘し、多くは禿にして樹木なし。十里灣口、五里大灣、五里鷺洋、三里柳埕、二里茂洋、三里谷口に到り、舟を沙渚に繫ぎ蓬窓の下に泊す。谷口人家僅かに四戸。

十日午前八時、舟谷口を發し、十里黄田に到る。黄田は延平街道中の知名なる驛次なり、而かも戸數三十二、人口太約二百に過ぎず。蓋し閩江の溪谷は福建省の中宗に所在し、全省の活力は皆な此の溪谷に萃まる。而かも溪谷中の知名なる驛次にして性命なきこと猶ほ且つ此の如し、一帶地方の荒寥なる知るべきのみ。然れども鑛産の未發利源に至りては或は測るべからざるものあらん。現に黄田の下流二三里より溯りて八九里に到るの間、江中及び江岸に蟠屈せる、岩石中處々に鐵の露出するを見る。十五里雲頂埭（十一戸）、五里三都口（二十戸）、五里渝徑洋十五里草嶺板に到り船中に泊す。

其の急湍

此日過ぐる處、兩岸より六十尺乃至二百尺の丘陵峭立し、樹木漸く多くして杉(所謂福州パイン、第一の輸出良材)、松、樟、冬青、柏、檜、竹などの常綠植物は丘側を彩り、雪は其間に斑にして、綠は白を抹し白は綠を粉し、時に椎の葉の黃ばみ盡くして翩々と東北時風に飛び、白頭翁の群をなして其梢に宿るもの指し數ふべく、下を顧れば、兩岸及び江中の岩は花崗石若くは片麻岩より成り、流水これを浸蝕して外貌詭詭を極め、變幻百出、佛の裸するが如きものあり、其傍に羅漢灘(ロハンタン)あり、聖人の長揖するに似たるものあり、其傍に聖祖灘(サンツータン)あり、曰く馬鞍灘(マアンタン)、曰く岸石灘(アンシタン)、曰く何灘、殆んど指點するに遑あらず、而して水或は石に遮られ、或は奮躍して石上に登り、舟を其間に行るや、固と流に逆ふを以て水激して蓬窓に衝り、飛沫百道、舟人の簑笠悉く濡ふ。既にして灘を超ゆるや、水漸く平かに、音響も亦た漸く低く、沙礫動き止みて汀渚方さに露はれ、汀側には一丈六七尺の蘆荻亂生して時を得顏に雪なす花を吐き、漁舟三々五々、花間を押し分けて出で來り、方陣を作りて網を投ずるや、潑剌として入るものは鯉、鱱魚(レイヒー)(桃花魚(ラヤウ)の大なる樣のもの)、白刀

其の魚產

魚、鰕(鮒)、黃尾魚(鯉に似て尾少しく黃なり)の類にして、鯉の如き時に四尺に餘まるものあり。汀上の人家五六軒より多き所なく、會〻魚娃の解すべからざる歌を哦ひつゝ網を相思樹(水楊の類)の上に懸けて黃金色なす夕陽に曝すや、樹下に童女のバリケン鳧を塒に追ひ行くあり。日既に邵武(シャウウ)群嶺の上に傾き、冥色江面に合する頃、江を上下するの舟は皆な沙汀ある所に來り泊して炊煙輕く颺がる。隣舟に建寧の賈客あり、予が蓬窓より面を露はす毎に「日本人好啊(ハヲアー)々々々々」と喚ぶ、遂に相親しみ、之れに漳州產の朱欒(ざぼん)を贈る(漳州の改革主義者王左營氏が遠く福州府まで携へ來りて贈られたるもの)、賈客も亦た汀上の漁人より購ふ所の銀鱗を割き煑て以て贈り來る。此夜月明晝の如し、東北時風の季節に入り連日雨にあらずんば雪あり、今初めて月を見る、自から一入の眺あり。賈客乃ち光を便りて予が舟に來り話す、池部氏傍より通譯す、福州日本間の材木貿易の事を問答すると二時間。客の去るや起ちて蓬窓の外を望めば、一帶の長煙江面に曳きて、水は其下より流れ、月光に映じて銀を鎔かすに似たり。

支那內地旅行の第一武器

十一日午前七時、舟、霏々たる雪雜りの雨を冒して章魯板を發し、十二里尤溪口(七十五戸)を過ぐるや、漸く九里灘の險に入り、江水瀑の如く、飛雨の如く、音響は宛がら萬雷の一時に吼ゆるに似、景象頗る雄渾を極む。特に眼上の峰嶺には白雪の皚々とし、眼下には灘水の雪花を飄へす處、上下映發して踏厲跌宕なる謂ふべからず。七里下九里灘(四十二戸)、六里上九里灘(十一戸)、五里白沙塘(六戸)、五里岳溪(四十三戸)、五里茶陽(十九戸)の下流に到るや、邵武の群嶺既に紫となり、暮色蒼然として至る、乃ち舟を沙汀に繫ぎて泊す。水口を出でゝより今日まで三日間、三食には建寧米の飯、日本の塩引鱒、塩カラ、鯛のデンプ、福神漬、果物を用ひ、以て食物の劇變を勉めて避けたるも、單調同一の食物を連日用ふるも亦た健康に可ならざるを以て、池部氏と共に汀上に登り、枯木枯草を集めて火を作くり、麵包を燒きツヤムを用ひ、巖上に腰打ちかけて暮れ行く山水を眺めつゝ夕餉を了りぬ。支那の內陸旅行に最も關心すべきは食料の問題なり、健全なる胃は內陸旅行第一の武器たり。

閩江中游の沖積平原

十二日午前七時、舟、茶陽の下流を發す。十里胡蘆山塘(十一戸)、二里金沙舖(十九戸)、三里五里牌(四十七戸)、五里吉溪(三十二戸、鹽公館即ち食鹽專賣所あり)を過ぐるや、上流より薪を滿載せる一大建寧船(喫水を極めて淺くせん爲め船の屋上に楫を横へ、舟師屋上にて之れを操るもの)の江心の巖石に觸れて看る〳〵沈沒するに會ふ。五里左岸(江を溯りて)に下臺(八十八戸)あり、福州府より延平府に到る閩江沿岸中の大邑なり。下臺より上流は江の幅却て擴大し、兩岸に沙礫の渚汀敷衍して、右岸の丘陵も亦た其高サ三四十尺に過ぎず。兩岸村落相黙綴し、居民溪を開きて圃隴を作くり、落花生、蔬菜などを植え、傍ら鯰、鰻鱺、鱓(鰻鱺の一種)の漁獲を業とし、又た野羊を牧するものあり。山林も亦た欝茂し、全躰の情勢概して富裕の色あり。蓋し閩江中游なる沖積平原の中心たる延平府に漸く近きたるを以てなり。五里安濟舖(六戸)、三里七里亭、七里倪坑舖、十里十里菴(五戸)を過ぐるや、忽ち兩岸の山崖に各〻一尖の高塔現はれ來る、語あり「支那內地にて塔を見れば必らず都邑あり」と、舟、山崖を一轉すれば果して人屋燈火の水上に隱見せるあり、延